平成三十年二月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔

創刊大正十三年　通巻一〇八九号

日川協加盟

特集　こんにちは新同人です

No.1089

二月号

第六回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第六回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題二句　共選）

課題吟　「つくる」［江畑哲男（番傘川柳本社）　居谷真理子（川柳塔社）］
「力」［天根夢草（川柳展望社）　古今堂蕉子（川柳塔社）　矢沢和女（時の川柳社）　小島蘭幸（川柳塔社）］

雑詠

投句要領　規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料　一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切　**平成三十年二月二十日（火）消印有効**

送付先　〒543－0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇一
川柳塔社　誌上大会係　宛
TEL／FAX（〇六）六七七九―三四九〇

賞及び発表　各題特選に賞呈　発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』

A5版
514頁
頒価　三〇〇〇円
（郵送料共）

目次

麻生路郎アルバム
麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」
麻生路郎文集・麻生路郎語録
麻生路郎物語（東野大八）
麻生路郎の人と作品
麻生葭乃作品「福寿草」
麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
麻生路郎・葭乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543－0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号
花野ビル201号
電話　06－6779－3490
川柳塔社
振替　〇〇九八〇－四－二九八四七九番

秀句鑑賞と梅志句集

小島蘭幸

昭和40年10月号（川柳塔改題第1号）から昭和44年3月号まで、秀句鑑賞を担当されたのが後藤梅志さんでした。秀句鑑賞を担当するにあたって梅志さんは、自戒的にいくつかの戒律を作っておられます。一、路郎川柳であること。一、新鮮味があること。一、世の中の悪口を言わぬこと。一、理屈を云わぬこと、誉め過ぎぬこと。一、マンネリズムにならぬこと。一、もの知りぶらぬこと。大体このようなものだ、がこれは自分の修養になるものだと書いておられます。

昭和40年11月号（川柳塔改題第2号）から秀句鑑賞はスタートしました。梅志さんが一番最初に鑑賞されたのは橘高薫風作品でした。

恩師の死その夜眠むしとも眠むし　薫風

川柳塔改題第2号、私は17歳でした。初めて近作柳樽に投句しています。私の作品が初めて秀句鑑賞に取り上げられたのは、昭和41年6月号でした。

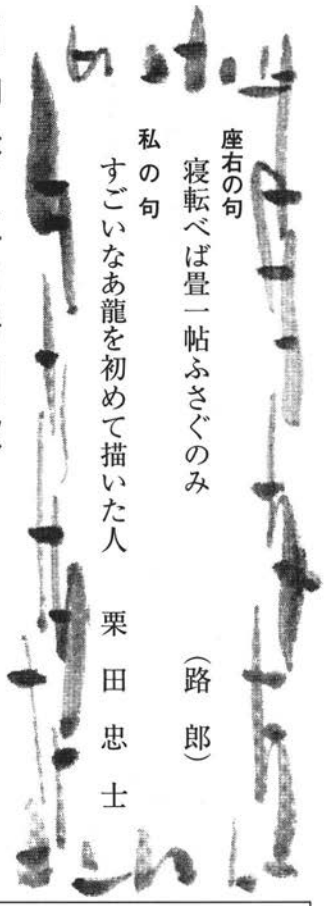
誂えたように卒業式の雨　蘭幸

蘭幸と改名して初めての入選句でした。高校の卒業式の日の実感句です。嬉しくて何度も繰り返し読んだことを記憶しています。梅志さんの鑑賞は、大きな愛に包まれているようで、とても心地良かったのです。昭和44年4月号、多くの皆様に好評だった秀句鑑賞でしたが、筆を持つことが難しくなったということで、清水白柳さんがピンチヒッターとして鑑賞を書いておられます。以後、梅志さんが鑑賞されることはありませんでした。

〝秀句鑑賞と梅志句集〟が発行されたのは、昭和45年2月、この年の1月15日に急逝された梅志さんは、ゲラ刷りだけは見ることが出来たそうです。序文は、麻生葭乃先生。多くの人に読んでいただきたい好書です。

梅志作品

こぼれては咲きこぼれては咲き朝顔の
春が来てうれしくてしょうがない小鳥
叩き売りからも甲斐性なしにされ
力這入らねば老女さえ演れず



座右の句
寝転べば畳一帖ふさぐのみ　（路郎）
私の句
すごいなあ龍を初めて描いた人　栗田忠士

川柳塔　二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「天使の階段・湖北」

■巻頭言　秀句鑑賞と梅志句集……小島蘭幸…（1）
川柳で人生を豊かに……川上大輪…（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…（4）
川柳塔の川柳讃歌158……木津川計…（44）
橘高薫風句抄……（45）
自選集……（46）
句集の森……（49）
■ショートエッセイ（霜ネタ日記）……髙瀬霜石…（49）
温故知新……（49）
水煙抄……川上大輪選…（50）
英語de Senryu74……吉村侑久代…（68）
■句集紹介「松　風」片岡智恵子著……澤井敏治…（69）
誹風柳多留一二篇研究56……（70）
愛染帖……新家完司選…（72）
檸檬抄「一大事」……山口光久・斉尾くにこ共選…（76）

川柳で人生を豊かに

川上大輪

川柳の歴史は二六〇年余り、柄井川柳によって世に広められました。

孝行のしたい時分に親はなし
22篇23丁

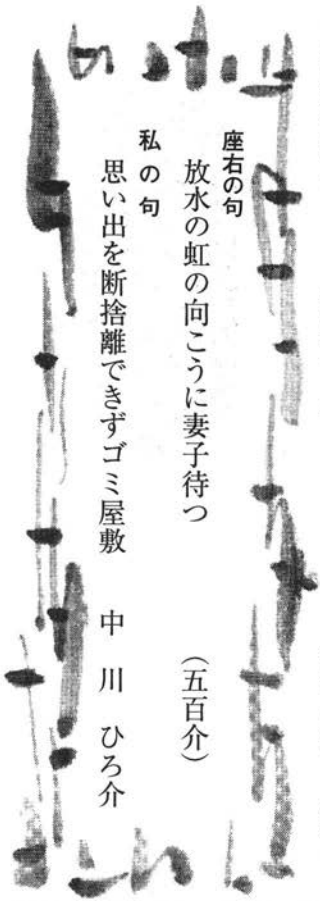
という句は、諺として広く知られていますが、このように川柳は社会の中で生きた言葉として伝わってきました。

今日では「サラ川」や公募川柳が盛んになり、「川柳」という言葉もよく知られるようになりました。しかし語呂合わせや駄洒落などの言葉遊びが多く、我々の目指している「命ある句」とはかけ離れたものですが、これも川柳なのです。

読んでいて思わず「うんうん」と頷くのは根底にある意識が互いに通じ合っているからであり、読んだ人にも「私だけでなかった」という共通の連帯感のようなものが生まれるからでしょう。

川柳の楽しみは句会や大会等での交流や作句する楽しみ、自分自身を再発見す

せんりゅう飛行船 ㊻……新家完司…(79)
一路集（「鬼」）……栗田忠士選…(80)
（「格別」）……藤井寿代選…(81)
初歩教室「短い」……居谷真理子…(82)
川柳塔鑑賞……北野哲男…(84)
水煙抄鑑賞……丹後屋肇…(86)
『麻生路郎読本』余滴 (44)……棄原道夫…(87)
特集 こんにちは 新同人です
インスピレーション・ナビ 印象吟……大西泰世…(90)
一月本社句会……弘津秋の子…(100)
句会燦燦……真島久美子・森山盛桜共選…(102)
川柳塔WEB句会「だんだん」……(106)
各地柳壇（佳句地十選／寺川弘一・平井美智子）……(107)
柳界展望……(108)
朝日なにわ柳壇 今年の十秀……(121)
二月各地句会案内……(121)
■編集後記（ひとこと／飛永ふりこ）……朱夏・勝弘…(122)(126)



座右の句
放水の虹の向こうに妻子待つ　（五百介）

私の句
思い出を断捨離できずゴミ屋敷　中川ひろ介

る楽しみ等、楽しみは他にも沢山あると思います。

句会に出て、入選句を聴くだけでも勉強になりますし、自分の句が入選するかどうか、といったドキドキ感も味わえます。読まれた時などは本当に嬉しいものです。また同じ趣味を通して、人との繋がりもでき、なによりも大きな人生の財産ともなります。

句は自分の言葉で生み出すもの。最初は、表現することの恥ずかしさもあり戸惑うこともありますが、言語化することによって、自身の新たな表現が生まれることもあります。生み出された句は自分自身なのです。

日常では気づかなかった自分という存在が、川柳を通して見えたり、自分を客観的、批判的に見る眼も養われます。悲しみは句にすることで慰めにもなり、心を癒してくれます。

句を作ることは自分を磨くこと、人生をより豊かにしてくれます。ただ句会の題詠ばかり作っていると、自分を見つめる機会が失われる可能性もありますので気をつけたいものです。川柳で人生を大いに楽しみましょう。

大阪市　津村志華子

卒寿万才これから先はミステリー
老いひとり膳はつましい物ばかり
貧乏神と手を取り合って暮してる
ヘルパーさんが帰るとほっと気が休む
身元調査悪い事などしてません
平穏な一日でしたくすり飲む

米子市　吉田陽子

二礼二拍手神は心の中に棲む
時代劇見るべきものになり老いる
修羅いくど収めたことかお針箱
花生けた今朝のみずみずしい私
前向きになると何でもないこの世
ゆっくりと冬に馴染んで来たところ

奈良市　大久保眞澄

聞くつもりないのに聞いている背中
手びねりですと重い茶碗をいただいた
リラックスしようと気合い入れている
福笑いピカソの気持ち考える
しゃべるだけしゃべって浮いていた私
豆腐づくし検査結果が出たらしい

小島蘭幸選

弘前市　髙瀬霜石

逃げるのが悪人だとは限らない
検診の日はボロ負けを覚悟する
悪人の洗濯ものは乾かない
髭剃ればなぜか背筋がピンとなる
逆転は可能　長生きすればいい
損得で決めてはならぬ　とはいうが

橿原市　居谷真理子

買える物だけを欲しがることにする
有精卵夢のぶんだけ重いはず
痒いとこ掻いてくれない猫といる
登ろうかここから先は虹だけど
君の呼気吸うて私の呼気あげて
こなしてこなしてこなしての過労死

大阪市　谷口　義

おぼろ月きみを育てたことがある
あの手この手でやって来る老後
一人でも専業主婦と言いますか
ゆらりゆらり横綱審議委員会
神さまも巡業に出てはるらしい
蕗の薹父の眼鏡を掛けてみる

篠山市　酒井真由

ほとぼりの隙間を埋める旅プラン
粗削り木目がとても美しい
腕まくりしてにらめっこしています
蕎麦処由緒正しきたたずまい
じわじわと酔いがまわってくる　独り
漂うて自由満喫しています

大阪市　平井美智子

故郷(くに)からの電話の中の父の咳
行き暮れた影とブランコ漕いでいる
まるくなりたいといつも思っている心
昨日なら塩焼きにして食べました
極月の訃に揺れている冬木立
握手した手を大切に持ち帰る

桜井市　安土理恵

限界までまだありそうで紅を買う
言い分があるなら皆の居る時に
おばあさんだって夜道は怖いです
傾斜する弱さ頼れるものが欲しくなる
土の匂い焚き火の匂いも身について
晩鐘へ遠い信心揺らぎだす

鳥取県　斉尾くにこ

コーヒーは飲みかけメールは書きかけ
加速度を増しすべり台すべる秋
お互いに贈る気持ちのいい言葉
踏みつけて触れて地球と親しむ日
「あ」と打つと「ありがとうね」と出るスマホ
シンプルで普通にここちいい時間

河内長野市　山岡冨美子

ところでと構えてみても余生の譜
剛腕で押してくるのは締切日
家計簿が無口になった十二月
ホットレモン今日の元気は予約ずみ
竹箒風とバトルをして冬日
取りあえずを入れたまんまの小袖斗

寝屋川市　伊達郁夫

残された時間を噛んでまた噛んで
錯覚で錯覚食べている余生
鞦で母思い出す墓掃除
身の丈を半径にして立ち泳ぎ
黒枠の友の知らせを裏返す
通夜の席　昔の恋が会釈する

尼崎市　山田耕治

五人生んで皆遠くに居ると言う
不要品の仕分け娘が買って出る
母だけの若しもをエプロンに仕舞う
旧姓で並ぶ名簿をいとおしむ
墓を継ぐ次のランナーまだ見えぬ
減塩のお汁うまいと言い出した

八幡市　今井万紗子

一人じゃないと今の幸せふと思う
やさしい香いつもの朝餉しじみ汁
三世帯ドタバタ喜劇終らない
人の恩達者な内に返しとく
流れのまま気楽にいくか二人して
きりりっと絞めて緩めていく余生

大阪市　古今堂蕉子

リバーシブル片側ばかり汚れてる
引き返す術ない道だから笑う
戦争だって風化しそうな顔である
忘れる探すじゃまくさい　ああ老いた
これ以上崩れぬようにお腹もむ
久し振り涙出る程笑った日

河内長野市　村上直樹

カレンダーびりりあの世へまた一歩
ポックリ寺効き目は多い順らしい
節約をしても長生きするでなし
酒やめたところでいずれ来る迎え
眠れぬ夜ふと人類の千年後
人生の指針をくれた水五訓

三田市　久保田千代

都合良く特急乗れた倖せ度
耐えて耐えて待った選者に呼名する
古顔の昔語りに寂がある
何もせぬ一日でした　寒かった
マンネリにならぬアイディア絞り出す
ふるさとの青空忘れさす都会

倉吉市　牧野芳光

復活の狼煙が上がる森の中
広重の雨に刺されて逃げまどう
無抵抗主義を守っている卵
伝説をささやき合っている星座
トロピカルフルーツ町を闊歩する
青空を背負って丘は動かない

防府市　坂本加代

浮き沈みあり細くなりゆく絆
暗号を出しても返事戻らない
永遠に待てはしません女です
本番の宴会だけは遅れない
お供えは私の好きなものばかり
忙しくしている時が私です

藤井寺市　太田扶美代

夕焼けの匂いに酔うているすすき
風を読むことにも長けてきた余生
淋しい日雑木林の振りをする
わたくしに模様をつけてくれた街
北風が残していった父の声
惜春は悲しきものの一つです

西宮市　秋元てる

超難聴同士筆談大歓声
まがいものの知識かざして上機嫌
何にでもぴったり母の目分量
老いて尚伸び代あるとおだてられ
余生だろ杓子定規にゃ暇を出せ
戦争を知らない議員の勇ましさ

海南市　小谷小雪

負けるのももうへっちゃらになってきた
つぶやきも罪作りなのかも知れぬ
ポックリと逝くのは難しいらしい
新しいただそれだけでいい匂い
御誠実触れただけでもあたたかい
担がれているようだ視界が揺れる

和歌山市　松原寿子

真っ新な気持編み込む毛糸玉
出直しの心の駅と決めて発つ
三面鏡笑顔に変えて夢を織る
紀州路で暮らし雪んこにはなれず
そう言えば敵は確かに酒だった
喝采はないが昭和の意地を抱く

寝屋川市　籠島恵子

弟は土にまみれた好好爺
三回忌平常心でいられない
賞味期限無いようである冷凍庫
枯葉散るその一瞬のそのように
みやげ話に満月を連れ帰る
お菓子より焼きおにぎりがいいと言う

八尾市　山根妙子

結ぶより解く難しさ人と糸
祝箸陰膳の子の名も書いて
御譲位が粛粛として日をめくる
折々の風情語れる人が居る
力添え心添え受け独り住む
頷いて勝気な人の電話聴く

竹原市　岩本笑子

なぜだろう退院の空晴れている
年一度墨の香賀状書いている
日溜りの確かに新芽伸びている
元気です感謝してます墓掃除
元日の朝輝いている御節
薬飲む為に三度の食事する

百八つ消してもすぐに改まる
娑婆がいいシャバに居たいというハート
健康寿命伸ばす役ならやる気あり
娑婆気が生きる意欲を追加する
煩悩を叩き起こして明日が来る

鳥取県　竹信照彦

卵から羽化した子等に従って
うっかりと踏んだ新聞詫びている
秋菊の華麗長持ち楽しませ
好きでした仏壇義父母ありがとう
コスモスが最後の美よと誇ってる

鳥取県　西谷悦子

大学が多くて今も浪人だ
泣くまいぞ親子で背のびする師走
寝ては駄目サンタの鈴で目がさめる
老人になるから餅をついて食べ
あの人も十歳若く舟をこぐ

鳥取県　松川行男

対談のゲストで変る視聴率
不慮の事故天命だったのだろうか
拒否される覚悟で芝居してみます
心配性だからへそくりつくらない
お笑いを芸にするのもむづかしい

鳥取県　山下節子

社会面びっくりニュース慣れてくる
飲みすぎと言うがせっかく乗ってるに
郵便はがき公開なので覗かない
黄砂降る視野もあいまいもこにする
自責点承知のうえで居直るぞ

鳥取市　池澤大鯰

二キロ減それが辛くて延びるオペ
半世紀憧れつづくサユリスト
スイーツが三度の食の娘も主婦に
ロウソクの灯りで偲ぶ四回忌
血糖値高い夫と美食断つ

鳥取市　奥田由美

糖質はゼロ愛は100パーセント
騙されて一時甘い夢を見る
喉元を過ぎるとグレー白になる
アルバムに不幸話は似合わない
娘が怒る私と同じ顔をして

鳥取市　加藤茶人

十四歳僕も将棋を指していた
「リンゴの唄」も「異国の丘」も忘れない
子に残す化石のような物ばかり
D51の雄姿が映える山陰路
雪予報外れて怒る人はない

鳥取市　岸本宏章

鳥取市　岸本孝子

迷わずに仏になれる法話聞く
老いた歯にりんごはジョナと決めている
長期予報あてにはせぬが聞いておく
ポッチャリが好きを真にうけLサイズ
おいしくなるまでに無くなる吊し柿

鳥取市　倉益一瑤

鏡の中の亡母と問答してひとり
半眼で風の動きを模索する
梨を剥く母の小言は聞かぬふり
仏壇から脈々続く河がある
捨て切れぬしがらみ冬が抜けられぬ

鳥取市　坂本とも湖

汗かけど大臣賞の句が詠めぬ
核兵器ゼロの地球がまだ出来ぬ
憎い癌老夫（つま）の命を毟り取る
川柳がずっと私を寝つかせぬ
コーヒーでぼくの頭脳も一休み

鳥取市　田中天翔

ふうもんの天皇早すぎる崩御
点滴にしばられ恩師動けない
病床の笑顔の握手温かった
たくさんのご恩わたしは忘れない
少しづつ雅号に似合う句を目指す

鳥取市　棚田大

秋の空俺の心に愛想つく
眠らずにマラソン終わりまで見てよ
最近はゲストティーチャーどんと増え
天命と天寿の声が喝入れる
手探りに拘り過ぎてやつれはて

鳥取市　谷口回春子

呆けるのは天命ですと自己弁護
バイキンマンいつもどこかで生きている
孫の躾婆の顔見りゃ目に涙
頼られりゃ何でもすると啖呵斬る
再稼動しても課題は先送り

鳥取市　永原昌鼓

クラシック旨いワインの子守り歌
子らの知恵借りて精出す町起こし
ポケモンへ鳥取砂丘一大事
ペットの死天命だよと諭される
めぐみさん今年も遠い母の胸

鳥取市　中村金祥

犬猿の仲にも情や義はあった
困ってる人を見かけて落ち着かぬ
古文書を解いて時空を駆けめぐり
クラシック好きな女房が唸り出す
宝の木取りに行こうと舟に乗る

送料は無料で愛を届けます
たわいない話は気がねなく続く
さよならを告げてやれやれああ自由
煩悩を使い果たして酔っている
もの忘れ思い出したらまだまとも

鳥取市　夏目一粋

曾孫だくこれぞ私の優越感
飛び込んで来た句の努力飾りたい
国挙げて減反論を躱したね
裏付けはともかく嫁の世話になり
生き延びた挙句まさかの道辿り

鳥取市　平尾菜美

慟哭が春まで続く日本海
まっすぐに私のままに生きてゆく
思い出を語り合ってる笑い皺
雑音は耳栓してもよく通る
海鳴りも耳鳴りも未だ鳴り止まぬ

鳥取市　前田楓花

相次いで柳の巨星が黄泉の国
無口亭主無駄口妻とコラボする
妻多趣味僕は無趣味でお留守番
五七五の迷路にはまり抜け出せず
綱の命品位品格泣いている

鳥取市　山下凱柳

鴉よりドローンに脅えている迷路
伝説の池も泡立つ外来種
遅れた子仲間言葉で走り寄る
宇宙にも地球の仲間見つけたり
結婚式化石の置物と並ぶ

鳥取市　吉田孔美子

淋しさをほぐす楽しい法話聴く
玄関に用心棒の男下駄
読経とお香を焚いて今日動く
温度差にとまどう老いの昨日今日
親方の黙秘相撲の裏を知る

鳥取市　吉田弘子

北朝鮮はミサイル夢中拉致放置
国会答弁本質突けずもどかしい
老人施設何されるやらああ恐い
恋すれば生きるエナジー湧いてくる
流行語大賞師走実感ひしひしと

倉吉市　猪川由美子

親しんだ平成と別れがつらい
立ち居振舞ちゃんと見ているひ孫
まっさらな空気活力湧いてきた
会心の笑みで何でも食らいつく
その昔犬に噛まれてから卑怯

倉吉市　山中康子

消しゴムで鉛筆ならば消せるウソ
この景気私達にはまだ迷路
半額のシールの時間出掛けよう
負けて勝つ負けたら逃げる部屋がない
災難がソフトな顔でねらってる

米子市　後藤宏之

良心か鴉が残す柿一つ
通の舌フェーク料理がもてあそぶ
人生の味覚知ってる老いの舌
大食いが芸になるほど豊かかな
新婚を暮らした町が寂れてる

米子市　後藤美恵子

内視鏡結果はサンバカーニバル
つながりを確かめたくて墓参り
合併で消えた町の名忘れない
雪三日湯どうふおでんキムチ鍋
絵手紙の栗が言うから栗ご飯

米子市　竹村紀の治

牡蠣づくし取れ立てカキに恵比須顔
追い焚きの朝風呂いつも気持ちよい
キッチンの暦家族のメモ代わり
欠席の返事昔を切り離す
定刻に動くこの国素晴らしい

米子市　中原章子

居酒屋のママが老眼鏡かけた
説明がつかなくなってつい笑う
消灯を忘れた時は酔っている
ライバルに波があるから憎めない
笑い声もう手遅れのばあさんだ

米子市　成田雨奇

退位決定　乾通りの人の波
負の遺産背負い続けた両陛下
生き過ぎたと思う独りの夜のしじま
インスタントの赤飯（おこわ）独りの誕生日
母の享年八十六になった新春

島根県　伊藤寿美

嘘つきが多くて亀になっている
遊んでるカラスよ塒あるのやら
面白くしろよと棒を渡される
厄介な大人捻じれたかりん糖
メンタルを餃子の皮で包み込む

松江市　石橋芳山

怪談の序章はドアの音らしい
賽銭は無いが素通りさせぬ神
大根干す　ただの女となる師走
すっぽりと布団を被り森眠る
巻き寿司に熱い涙が止まらない

松江市　川本畔

松江市　藤井寿代

マッハ3で過ぎてく冬の時刻表
昼の月貴女はもう若くはない
手の内を見せてはならぬ昼下がり
野良猫の気まま羨ましいかぎり
ステルスは北朝鮮へ舵を取る

松江市　松本文子

また夢はオリオン座にひっかかり
パラパラの拍手だったが幕閉じる
谷底に落ちて気楽な事もある
礼儀知らずが二階から降りて来る
私も輝く線香花火くらいなら

出雲市　伊藤玲子

荒神の面を飾って邪気払う
出涸らしになっても続くアノネノネ
寒行のうちわ太鼓の僧に喜捨
哀しみに涸れた涙の補充酒
七十路で惚けがでた友放っとけぬ

出雲市　岸桂子

決められた役目が心重くする
例外を認めてからの妥協ぐせ
一枚のハガキがくれた不整脈
やさしさに触れて心の棘を抜く
影武者に先ず座らせる指定席

出雲市　小白金房子

砂山にきのうの夢が置いてある
湯の宿で邪心を流す丸い月（おくいずも）
迷い捨て動かぬ芯をもっている
こだわりを捨てた女の丸い背な
色々な事件を耳に年暮れる

雲南市　菅田かつ子

初詣でふっと浮かんできた一句
生き生きと今朝を咲いてる寒椿
萎びれた胸で包んでくれる母
信号の向こう会いたい人が行く
窓辺からニュースをもって来た雀

雲南市　松本昌

次はなにふるさと納税楽しもう
孫が来て成長したのか無口なり
出雲路は弁慶が居た巨石あり
長生きは健康診断受けません
カップ麺流し込んでる繁忙期

雲南市　松本はるみ

日々動く生物のごとドル株価
松茸の素性知ってる土びん蒸し
明日もまた旅はつづくと信じつつ
あの人のほほえみ浮かぶ夕焼けに
膳椀にやさしい里の顔がある

岡山県　髙岡茂子

「おはよう」は写真の夫が一番に
紅ひくとお洒落心が目をさます
10年振り出会った姪にハグされる
青春がもどるタンゴのコンサート
自由な時間謳歌している八十歳

岡山県　田中恵

母に似たふるい私が居る鏡
茶が温い忘れた心取り戻す
片意地を張ったばかりに笑えない
団栗が肩をならべて日向ぼこ
鉛筆を削るも日課指を折る

岡山県　山縣のぶ子

三羽ガラス些細な事は知らん振り
百歳の恩師の形見よく似合う
百歳の師と盛り上がる早春賦
先生と距離が縮まる歳となる
ハグをした師の温もりを忘れない

岡山市　工藤千代子

沈黙はわたくしなりの謀叛です
罰なのかご褒美なのかこの風邪は
雪になる中途半端を断ち切れと
畳に寝そべって語る旅のいくつか
ポケットが多くていつも捜し物

岡山市　丹下凱夫

冬至でもないのに昨日今日ゆず湯
ポインセチア聖歌もどきを口遊む
朝昼晩欠かさず食べて飲んでいる
夢二生家つんつんツバキまだ咲かぬ
追伸にやんわり苦言書いておく

岡山市　永見心咲

令月に産まれましたという便り
萎えそうな心に母という添え木
真っ直ぐな糸になるまで縒り合わす
ためらえば横穴ばかり増えてくる
エンドロール流れ名前がやっと出る

岡山市　藤成操江

おしゃべりもボケ防止です午後のお茶
正論を吐けば寂しくなる景色
マイナンバー使い所が未だない
しみじみと家族おでんの箸すすむ
推敲をかさね一句が重くなる

岡山市　前田恵美子

チャレンジの時間はあるよ翔んでみる
したい事する事多く時間飛ぶ
台所以外に居場所探せない
バタバタと動いていたら夜が来た
古城も輝くように花植える

笠岡市　藤井智史

婚活の気合いがわかる身上書
こたつでみかん平和だなと思おう
ダイレクトアタック恋は砕け散る
角ばった場所に私の悪が住む
沢山の星が届いてくる努力

広島市　岸本清

頬っぺたを叩き気合いを入れる朝
穏やかに妻のお小言聞いてやる
ユーモラスゼロ歳からの英会話
いい味が滲み込んでいる割烹着
こだわりがクローゼットにぶら下がる

竹原市　石原淑子

落着きなさい凩母の声で吹く
おほつかぬ足を忘れてボランティア
霜柱朝を弾ます黄帽子
故里の空で見付けた忘れもの
落葉掃く箒の音が姑に似る

三原市　鴨田昭紀

口喧しい妻と暮らしている至福
色褪せてきた目標のない暦
奔流に押し流されていく小舟
突風に頬を打たれる有頂天
平凡に暮らす都会の命懸け

岩国市　上村夢香

山茶花は向かい風でも受け止める
ケセラセラ明日を信じて深夜便
赤バイク今日も待ちます庭先で
本当の自分探しは迷い道
宿題はまた山積みの年の暮

宇部市　平田実男

安倍総理十八番は軍歌かも
皺白髪ほどよくあったほうがいい
出る杭になってた頃を懐かしむ
あと五年生きねばならぬ日記買う
失言と言うが本音が見え隠れ

下松市　有海静枝

暗い森抜けてもひとつ暗い森
底ぬけに明るい底にさびしがり
一人鍋テレビの笑い見て食べた
足と口鍛えています老い支度
悪い事ないのに出るごめんごめん

東かがわ市　川﨑ひかり

夢一途　人間陶冶の道を行く
喜怒哀楽みんな月日が連れてゆく
ウサギ小屋幸せだった若かった
桜紅葉温く迎える栞句碑
まだ飛べる余力を溜めている翼

松山市　栗田忠士

反骨の鬼一匹を飼っている
真摯真摯と真摯が独り歩きする
八十年不平も言わず足の裏
非常袋の賞味期限が切れていた
木守柿消えてヒュルヒュル冬に入る

松山市　宮尾みのり

パンの耳好きで少うし変人で
今日一日今日一日と朝思う
立枯れの覚悟を風に試される
前向いて行くには足がもろくなり
天抜けるように明るく笑おうよ

松山市　柳田かおる

せかせかともう天井は見えている
もう少し歩こうシャンソンのこころ
迂回路はございませんは無いでしょう
尖がったことばにミックスベジタブル
やみくもに走って影もくたびれた

大洲市　中居善信

ハンドルの遊びくらいはある余裕
米の重さを忘れてしもた日本人
別嬪を選んだわけでない妻で
思い出の行き着くとこに芋がある
それからの事を聞きたい人がいる

西予市　黒田茂代

一瞬の輝き紅葉から雪へ
落葉たちの行方は風に任せよう
秋冷の候もう昼寝やめにする
冬枯れの葦です意地で立っている
譲られたら素直に感謝して座る

西予市　西田美恵子

人柄を買うたと言ってくれました
話してごらんこんな私で良かったら
半額が好きお試し品はもっと好き
誰にでもあるでしょ過去の負の荷物
ハイヒール近頃履いた事が無い

高知市　小澤幸泉

死ぬことのドラマまだまだ書けません
食卓に飲まぬ薬が並べられ
五十年もう東京は遠い空
東京に愛と憎しみ埋めてくる
神さまはここにも居ます黄泉の国

土佐清水市　辻内次根

庭に来た蜻蛉一匹だけだった
独り鍋今夜は酒で温もろう
前の樹に対の鴉が棲む田舎
今日までの事を巡らす夜の雨
夜が更けていく　ことりと音がした

ヨイショッ気合を入れて生きている
お正月ワクワクときめき今はない
老犬と自分の姿かさなる日
食べ話す笑う平凡ありがたく
まあいいか本でも読もうふみん症

北九州市　小松紀子

まだ遺影出来ていません閻魔様
地獄行き決めてお迎えまだ来ない
団塊が割り込んで来る地獄行き
お待ちをり申し候閻魔殿
地獄への待合室はもう地獄

唐津市　坂本蜂朗

三百年続く祭儀の孔子堂
ガラガラと鈴の音色も新世紀
粗削りだけどセンスが垣間見え
何処へでも酸素ボンベが供をする
祖父の背でおもらし成さる女王さま

唐津市　山口高明

たそがれの人生だろう欲が減る
豊満な胸に目が行く私とて
お見舞の菊の花束嫌がられ
台風が二度も外れて戸仕舞う
呑む量の減った夫に拍手する

熊本県　岩切康子

ピラルクー顔の新幹線に乗る
遠く来てあれが畝傍と知る大和
旅に疲れ仕事に疲れ湯に疲れ
南国へやはり淋しい秋が来る
紅葉の彩り故里を想う

熊本市　杉野羅天

ピンクのパーカーのフードは卑猥だ
ガムテープ悪事に加担させられる
リモコンを壊して元サヤに戻る
横顔が少し怒っている花瓶
無視されたスルメが薄くなっている

沖縄県　森山文切

風吹いた止んだの軽い日本丸
時事吟に防空壕の懐かしさ
人生をショートケーキで語れるか
礼節に力が入り土俵去る
ほしのゆめ道産米の格を上げ

札幌市　小沢淳

オクターブ下げ幸せの歌うたう
身を削り諭す消しゴムには感謝
マスクしてスーパーで主夫しています
雪景色除雪知らない人が褒め
願わくは百まで詠まん一行詩

札幌市　三浦強一

春風に乗った孫からの手紙
春が来て雪の重さを知る津軽
生き延びる明日へ空が透き通る
あなたには幸せそうなにわか雨
じわじわと孫の産声天を突く

青森県　松山芳生

再放送髪の毛があったわたくしも
少子化も待機児童も同じ国
多機能の家電ぼくには役立たぬ
雪国に魔法使いがやって来た
雪が降るライトアップの洋館に

弘前市　浅田隆樹

南天と友の訃届く寒の朝
おはようの声が凍えて出てこない
ストレッチ終えて雪掻く日記帳
青天に岩木お山が笑ってる
引きこもりじゃありませんよ寒いから

弘前市　稲見則彦

ペンギンの歩幅で歩く老いた君
颯爽と気取り路上で転けた足
予定表美術展観てパンダ見て
じわじわとまたも灯油の値上げなり
諸諸の家計に響く灯油高

弘前市　今愁女

日本には百均店の味方ある
熱燗で今日の寒さを吹き飛ばし
空襲のように黄砂が攻めて来る
割引のタイム腰痛飛んでゆき
バイキング特別製の胃に変わり

弘前市　須郷井蛙

広くなるオデコは老いの電波塔
補聴器は優しい声がお好きです
子の自立行くあて知らぬしゃぼん玉
雪のんの近くて遠い両隣
冬津軽春待ちわびて結露拭く

弘前市　高橋洋子

雲海へ顔出す富士を見る機空
放流の稚魚がキラキラ海へ向く
しんがりの雁が束ねる北帰行
旅先に五七五の投句箱
曼珠沙華旅を誘う道標

弘前市　福士慕情

鬼遣らい妻は今年も儀礼的
雪道のスリップに似る出来心
晩学のプラン点検する炬燵
中庸に飽きてしまったロゼワイン
佳句はどうぞと七版の広辞苑

塩竈市　木田比呂朗

波まかせこれも一つの生きる術
鰯の機嫌しだいさ時化の海
発芽する心は捨てぬこぼれ種
雪だもの春に備えて死んだふり
再春と名付けて仕切り直しする

男鹿市　伊藤　のぶよし

無償化で国の借金どうするの
今はもう忖度のルビ消えました
適材適所の基準は何ですか
真っ直ぐに生きて心に傷少し
よく柿喰う客の正体はカラス

さいたま市　星野育子

腕を貸すことに気付かぬあなたです
ブランコは優しく揺することにする
メモを取り謎の数字が残される
断捨離に明日はないよと叱咤する
喘息の吾子抱きしめた日の記憶

上尾市　中村伸子

木枯らしの一号奥歯うずきだす
十年後あたりでもやにつつまれる
空席はあるけどいつまでも家族
がんばれとほら冬晴れにしてくれた
質問なし雲ひとつない青空に

東京都　川本真理子

食べ頃になるまで番をする先祖
のんびりと炬燵でミカンそんな日も
雪便り雪の重さを思い出す
迷いつつ生きてる喜寿の一輪車
葉を落とし私らしさを曝け出す

八王子市　川名洋子

荷くずれを直し頑張る八十路坂
買物は小分け小振りの二人分
ふる里の重いふとんがすぐ馴染む
言いかけた禁句へ妻の咳ばらい
根回しのできぬ男の回り道

横浜市　菊地政勝

鯛焼きを手土産にして話好き
節分会母の仕草で豆を煎る
寅さんのように生きたい時もある
掛け違う釦見てから鬱になる
癌封じの寺を詣でて荷を下ろす

富山市　島ひかる

飲兵衛は森羅万象肴とす
飲兵衛の苦労分からぬ下戸の妻
片付けがなければ妻ものむお酒
美技ひとつあれば嬉しい草テニス
パスポートまた申請の七十九

可児市　板山まみ子

予約した旅行へやってきた寒波
北陸は雪を覚悟のバス旅行
ちっぽけな倖せでいい移植鏝
あれはあれで上手くやってる夫婦仲
苦しくはないが手摺りに助けられ

愛知県　早川遡行

そういえば栗も松茸も食べてない
検診結果年相応にちと不満
不老不死の薬出来てもいりません
国宝展のパワーと人波の疲れ
出すやめる迷う賀状の二三日

犬山市　金子美千代

生いたちを語る笑顔に救われる
赤ひげのテレビ黒沢には勝てぬ
笑点にいつも感心する見付
穏やかか気短になる老後なり
わくわくと正月用の本を買い

犬山市　関本かつ子

天と地の間で細い息をする
飯茶碗愛をいっぱい盛りました
のたりのたり亀のリズムがうらやまし
想像の糸を吐き出す夜が好き
紅葉を見ながら紅葉になる

鈴鹿市　小河柳女

一年に入院三度命減る
奇麗すぎる女医先生に罪はない
世の中が暗い眼鏡を掛け替える
正月もなし透析に通う妻
酉年も第九を聴いて締めくくる

京都市　清水英旺

流す涙は口で言えない言葉です
見えぬ心言葉の中で見え隠れ
喧嘩しても定位置につく夫婦茶碗
女のつもり専用車両で幅利かす
甘かったすんなり老いていけません

京都市　藤井文代

他人からばあちゃん呼ばれ知らんふり
患者用ナースの笑顔とってある
知らぬ間に十年日記フィナーレに
もっともっとしっかり学びたい言葉
とらさんも文化勲章もらう価値

京都市　桝本宏子

ひまやけど押し詰まったと言う師走
電話では舌がもつれる御礼状
救急車遠ざかる音聞き二度寝
電気屋にお母さんと呼ばれ不愉快
喜寿傘寿約束出来ぬクラス会

京都市　三宅満子

長岡京市　山田葉子

バトン渡す若手のいない職人芸
五年ごとにふと立ち止まる癖がつく
押し切られたままで呟くまあいいか
行こうぜともうあかんわがないまぜに
海に落ちる真っ赤な夕陽の中にいる

大阪府　米澤俶子

元気じるしの呪文をくれる菜の緑
ありがとう素直に言えて夫婦です
失ったもの反芻しつつ早師走
ピーマンのような海馬にある記憶
去りがたいこの世元号変わるとも

大阪市　岩﨑玲子

スタートといつも誓うの誕生日
誕生日やっぱり父母に感謝の日
ふるさとはいつも味方につけてある
脳トレに秋の七草言ってみる
怒るのは六秒待てと著名人

大阪市　内田志津子

神の道只黙々と砂利をふむ
任得たか得意な顔でよく喋る
戦争の恐さ惨めさふと思う
すっぴんのままで長寿の旅続く
過疎の地でお国訛りの子守唄

大阪市　宇都満智子

雨のベンチ今日は落葉が腰かける
散歩の理由氏神様にあいにゆく
手をあわす心の弱さ埋めたくて
私の気が済むまっすぐのお辞儀
我慢我慢牛の歩みの快復期

大阪市　江島谷勝弘

ほんとうにボクは幸せ甘辛党
我を通し悔いはないけど落ちこぼれ
三歳児ペラペラと機関銃
広辞苑より明鏡さんがボクの秘書
貧乏だったから今もリベラル派

大阪市　榎本日の出

菜の花の暖かさには敵わない
熟睡で迎える朝の有難さ
友達が宝だという趣味を持ち
寝たきりにさせたくなくて子は叱る
うっかりと好きなご飯のお代わりを

大阪市　榎本舞夢

紅葉狩りいちょう並木と移行する
平安神宮草間弥生と嬉しい日
両陛下御退位決まり安堵する
御退位と共平成の世も終りとか
先ずは新年いい年になります様に

大阪市　大川桃花

物作り日本の誇り今何処
拉致家族喜ぶ顔を早よ見せて
女系家族みんなで父を甘やかす
子供記者の質問痛いとこを突く
ピンピンコロリ希望通りに逝った父

大阪市　大治重信

何時も来る仲間の来ない忘年会
背かれて山茶花の道泣きながら
内弁慶外へ出たならイエスマン
もう二度と国難突破で踊らない
人の世を見下ろしながら紅葉散る

大阪市　奥村五月

竹槍の昔忘れて皆ソフト
酒止めて元気なくしたおじいちゃん
アチコチとネジも緩んで錆もくる
渋柿も祖母の細工で甘くなる
田や畠忘れられぬと母は過疎

大阪市　笠嶋恵美

甘えよう決心したら楽になり
エアコン掃除息子夫婦がていねいに
正倉院展長蛇の列にあきらめる
知ってるようで知らぬ正しい歩き方
義弟の葬儀最後まで居て礼尽す

大阪市　川端一歩

神よりも友の言葉を信じよう
杭を打つ水の祟りを知らないか
忘れたいことが夜中の夢に出る
老体に鞭打つことはしない主義
お互いに杖になろうがすぐケンカ

大阪市　熊代菜月

物忘れ増えて指折る五七五
あれそれで足りる二人の友が来る
酒の味わからぬ下戸の酒のかん
聞き役と話上手な友と旅
迷いつつ心にブレーキかけて居る

大阪市　小谷集一

生き甲斐は七人の敵みな元気
八合目あたりでしょうか老いの坂
鈍行の人生可もなし不可もなし
しっかりと生きて明日の糧とする
小春日を浴び充電の日向ぼこ

大阪市　近藤正

核禁止ひとすじの道きり拓く
アメリカが我欲あらわな国に堕ち
一食を二回にわけて生きのびる
憲法を活かす世論が動き出す
五輪で沸き築地で沈む東京都

大阪市　坂　裕之

そんなこと忘れて今日も走ってる
楽ですよ細かいことは忘れちゃう
二階まで来て何だったかと笑う
爺ちゃんの駄菓子屋があるシャッター街
肩に荷を背負ったことで前を見る

大阪市　田浦　實

生駒山朝日届ける使者の様
新たなる明日を生むのは命です
退院後雑草までも美しい
ビル風に乗って烏が舞い上がり
老いてから酒の美さを知りました

大阪市　髙杉　力

土俵より土俵の外が面白い
ハロウィンに負けてはならじクリスマス
欠点がデフォルメされていく老化
誰にでも優しい人でつまらない
うっかりと忘れてしまう薔薇のトゲ

大阪市　田中　ゆみ子

初日の出地球は回ってるんですね
初鏡皺も私の財産だ
毒舌がやがて身になる骨になる
迷ったら会いに行きます亡夫の樹
自分との対話自分を好きになる

大阪市　津守　なぎさ

トンネルとみかん交互の南紀の湯
ハイポーズ晴着出揃う三笠山
初詣で清水坂は数珠つなぎ
冬支度鹿もしつこく餌ねだる
食欲で病い退散させる腹

大阪市　寺井　弘子

冷戦の空気をほぐす孫の声
今朝の空取っておきたい次世代へ
ノルマから開放呼吸楽になる
ていねいに生きて残高ゼロになる
悠悠自適笑顔絶やさず暮らしたい

大阪市　寺本　実

神の手にまだ縋りつけそうもなし
カレンダー奇数の月は寂しくて
終電車降りた所は一つ前
あの世にもぽつぽつ友が増えている
飽きるほど論吉をためてまだ欲しい

大阪市　栃尾　奏子

三叉路の一つはライクからラブへ
二人乗り居心地の良さ確かめる
もう何度背中にキスを贈ったか
マフラーの中で二月の独り言
この恋は熟れることなき青林檎

大阪市　原田すみ子

分別が時に翼を閉じさせる
孫の手は未来を掴むために有る
ライバルと言うより壁になっている
他人より遠く今日のひとつ屋根
無農薬葉っぱ見事なレース状

大阪市　平賀国和

珍しく妻に誘われコンサート
祝いたい日系人のノーベル賞
日本人過去と向き合い学びたい
軍拡へ舵を切ったか日本国
きな臭い世に忘れてならぬ和の心

大阪市　藤田武人

みよちゃんの面影探すクラス会
ブランドが勢揃いする参観日
過去は過去自分の影に背負わせる
ガラクタのひとつひとつにある想い
サイの目がゆっくり行けと赤ばかり

大阪市　藤原千恵子

呼べばすぐ返事が返るワンルーム
歌ってると自分の心見えてくる
梵天像天と地を指す優しい手
ノックしても石の扉は開かぬまま
万人に正規通りの除夜の鐘

大阪市　升成好

脱皮してもしても翔べない僕である
負け組にまだまっ白な明日がある
旬の人旬の話に深い味
ストレスの栓を抜きたい青い空
ご破算に願いたいのは歳の嵩

大阪市　山本加お里

柚子一個うかべて独り冬至風呂
えべっさん頼んまっせと手を合わす
内緒ごと相槌だけで聞き流す
エッセーに書き残したい夫のこと
小さい方取って得したこともある

大阪市　吉内タカ子

有り難う忘れずに言って笑顔もね
好きな事出来る喜び世の幸に
恩返し元気一ばん靴磨く
たまに行く薬がわりのカラオケ屋
北朝鮮に歯痒く拉致は忍び泣く

大阪市　若本安代

身軽さをバネに出かける趣味いくつ
浮かんでは消える思い出追いつづけ
すべて良し病院帰り風光る
川柳は私の脳のストレッチ
せめて紅明るい色を選っている

堺市　柿花和夫

外人が増えたか旅籠にも聖書
冬を越す老いのサプリはあらばしり
よそ行きの会話となって恋終る
愛用のベルトが叱る不摂生
反戦の誓いも新た十二月

堺市　加島由一

寝床から雪のニュースを見て起きず
退院しまず仏壇の水を換え
テーブルにミカン一つの温かさ
勝負勘二番人気の馬に賭け
地蔵には見ててくれよとだけ祈る

堺市　源田八千代

お年玉済めば成人式祝
腹ごなし氏神様へ初詣で
国会中継視聴しながら句を作る
両親に叱られ子供立つ瀬ない
暗いニュース案じ出したら切りがない

堺市　齋藤さくら

プライドが邪魔する年で無くなった
テレビ無い時代今さら帰られぬ
あの頃も今も変わらず楽天家
どっこいしょ言うから年がすぐばれる
力み過ぎ途端に風邪を引いている

堺市　澤井敏治

福音を運ぶ鈴の音赤い鼻
梵鐘の音うるさいという世相
終電の尾灯見送りネットカフェ
殻に合う目標やっと知る八十路
金婚式赤じゅうたんに蹴躓く

堺市　坂上淳司

孫出来た師匠も孫をうたい出し
大病によくぞ勝ったと孫を褒め
初賞与で馳走したいと孫娘
孫曽孫に世界平和を贈りたい
核廃絶の署名忘れている日本

堺市　遠山唯教

日本人が雪の自然を慈しむ
落胆もまた人生の糧になる
百名山を踏破の人が先に逝く
ダイヤ婚へふたりの永い履歴書がつづく
老人の歩幅がせまくなる師走

堺市　内藤憲彦

団塊と言われた僕も七〇歳
赤胴鈴之助以来のサユリスト
お説教2時間聞けば子守唄
小夜曲が終わったとたん目が覚める
異国語もお聞き届けの廬舎那仏

堺市　矢倉五月

焼き芋の匂もしあわせのひとつ
仏壇へ孫のお供え受験票
ニニロッソ深夜便から贈り物
ちょっとしたひけ目があってやさしなり
惚れた弱味孫の要求飲んでやる

池田市　栗田久子

気持ちだけ気忙しくする年の暮れ
冬晴れの身に沁む寒さ妥協する
枯れ草を分ければそこに兆す春
山芋をもらい今夜はとろろ飯
勢いのままの妥協で暮れる年

和泉市　横山捷也

羊羹に分母の数が多すぎる
担がれていると承知で輪に入る
早口になった機嫌悪そうだ
般若経説いてる和尚酔ってるな
サングラス外せよ紅葉きれいだぜ

茨木市　島田誠一

人の目があって老躯の早歩き
太鼓判押したカルテが夫を突く
他人事でない半島のきな臭さ
小池流騙りの口に裁かれる
猫だまし横綱相撲にも新手

貝塚市　石田ひろ子

来年のパワーを詰める手帳買う
地に還る事も許されない熟柿
一線を引いて同居の仲がよい
行き詰まる脳に充電する散歩
ほっとする石蕗一面の黄色

河内長野市　大島ともこ

ポケットの穴から本音ポロリ落ち
無理承知我儘言って困らせる
持つべきは友喜びも悲しみも
もうちょっと我慢できるぞ歯科はイヤ
孫到来夫婦喧嘩は中休み

河内長野市　梶原弘光

吊り革も心も揺れる終電車
濡れた舗道自転車保険入ろうか
落としても割れない心持っている
誰にでもオハコの歌がひとつある
大吉と凶を交換するふたり

河内長野市　木見谷孝代

詰めすぎて息切れしてるカレンダー
句会前無口になったバスの中
満月に消された星をふと思う
露天風呂でっかい朝日拝む宿
四百年の老舗もなかの味を知る

河内長野市　黒岩靖博

この世は修行かなわぬ事と妥協する
就活が出来ず未練の影法師
古時計止まったままの守り神
さて私どこに座れば宴の席
カラオケで自声に酔って有頂天

河内長野市　谷久美子

風呂上り湯気もいっしょに飲むビール
コンビニでおにぎり買った旅の朝
試食する度に土産を買いあさる
アルバムに仕舞ったままの青春譜
罪一つ積むたび痩せてゆく心

河内長野市　辻村ヒロ

言い合って張り合う友がいる至福
口ぐちにおしゃべりが舞う老女たち
亡き妻に心から言うありがとう
韓ドラで帰宅時間が決められる
キッチンで一人暮しも楽しめる

河内長野市　藤塚克三

腹の皮捩れるぐらいわろてんか
秘伝の味母から妻へ引き継がれ
霜降りた白菜主役蟹食われ
明日検査ふぐの鰭酒ああ我慢
飼い主の化粧に似てるブルドッグ

河内長野市　山室光弘

痩せたヒメクリまた一年を無にするか
無理と無駄凝りずに続く厚化粧
ゆく年にあれこれ想い爪を切る
寒い日はコンビニおでん湯気も買う
肩車で背負う年金ゆがむ顔

岸和田市　宮野みつ江

讃美歌がふと口に出る十二月
クリスマス気分貰いに御堂筋
戌の絵を色々描いてみる賀状
黒豆に煮えたらメールしてのメモ
一人用おセチ注文春準備

岸和田市　雪本珠子

時により言葉が武器になる事も
何気ないその一言で愛冷める
また二人アドレス削除年の暮
正月を磯で迎える釣りマニア
病む友に逆に慰められている

四條畷市　吉岡修

あの人が丸うなったらおしまいや
期待する政治力より漫画力
夢は宝てなこと言うて酔っている
お賽銭淋しい音で落ちてゆく
神の名で爆弾抱いて死んでゆく

吹田市　太田　昭

品格に欠けた横綱押し出され
真実を探し玉ねぎ剥きつづけ
いつからか馴染ができたクリニック
杖をつき自分の影と向かい合う
憧れたあの娘も八十路過ぎたそな

吹田市　木下敏子

現状維持続けて登る八十路坂
どんぐりの仲間のひとり転び出す
山茶花のピンクが白と競いあい
まあいいかこれでいいわと丸くなり
美しい言葉探して書く賀状

吹田市　須磨活恵

蹲いて冬の夕日に笑われる
遡りゃ其処此処押したい訂正判
無駄話いいえ心のサプリメント
冬将軍負けてたまるか鍋奉行
春浅く笑い袋の紐を解く

吹田市　野下之男

西郷どんの胸の火もやす桜島
流石だね総理よく出る長州だ
有名人享年がまず気にかかる
横綱もつい間違えた愛の鞭
一人でも責任果す横綱だ

高石市　浅野房子

君知るやひとり暮しのむなしさを
栗ごはん食べたいが皮むくのがね
コマーシャルだらけのドラマ見てられぬ
アレもコレも賞味期限が切れている
成るように成るしか仕方ないこの世

高槻市　片山かずお

昔風がいい味出している器
昔話をして青春を取り戻す
小物だな昔のクセで威張ってる
後期高齢昔気質は直せない
昔ながらの作り方だと味噌自慢

高槻市　島田千鶴子

痩せ我慢してもどうにもならぬ歳
冬茜からす一羽を抱いて落つ
ふかし芋ほっこり渡す手の温さ
立ち位置を外野と決めてから楽に
居眠りも出来る素敵な指定席

高槻市　初代正彦

自分史の余白のんびり埋めてます
やわらかくなるまでそっと待っている
リセットボタンときたま押している私
姿見の知らんふりする丸い背
あきらめの早さを嗤う忘れもの

高槻市　杉本義昭

モダンジャズ流れ我が家は動き出す
本物のサービス苦情から学び
卵割る幸せ思う朝ごはん
定年後妻は多忙で僕は暇
落とし物私を待っていてくれた

高槻市　富田美義

残り日をどう刻もうか四字熟語
読んだかて何も残らん頭です
話したく無くて読む振りスマホ本
未だ呼吸あるを知らせる年賀状
あのヤマイ避ける為です五七五

高槻市　富田保子

楽しいな年を取らないサザエさん
脳トレと励ましながら書く手紙
いつまでも話せる友がいる田舎
なる程と選者の選ぶ句をほめる
秋が好き今日はオシャレで出かけます

高槻市　原洋志

リプレーの検証にある泣き笑い
バスを待ついらちな影をなだめつつ
靴残し介護施設に行ったまま
未練などもう何もない崖の上
サービスのいいお役所だすぐやる課

高槻市　松岡篤

外国語行き交う簡易宿泊所
帰省ラッシュ戦後日本の風物詩
子の寝顔夫婦喧嘩のブレーキに
顔怖い人が歯医者を怖がって
回る寿司日本が誇る食文化

豊中市　藤井則彦

新元号を楽しみにして暮らす日日
しっかりと握手したのに名が出ない
くしゃみまでハイに聞こえた文化の日
ヒト科への恨みを乗せて飛ぶ花粉
おむすびがつい欲しくなるお正月

豊中市　松尾美智代

ドキドキの種が詰まっている命
先が見えぬ時間の浪費もう出来ぬ
鏡見てつくづく老けたなと思う
ライバルの友も一緒に老いている
目を外に向けて幸せ呼び込もう

豊中市　水野黒兎

裏山に忘れた時の残る里
焚火することも目的里帰り
綿菓子は甘くて子らは宙に浮く
傘寿前豆腐の味が判りかけ
あの角を曲るとすぐに冬景色

富田林市　関　よしみ

信じるの一途が変える風の向き
お百度を踏む中にある命の炎
こだわりの和菓子に番茶添えて出す
ロボットに技を渡して新境地
おみくじを信じる波は穏やかに

富田林市　中井アキ

ときめいたまんま化石になりたいな
いつもとは違う朝です誕生日
ローカル線で若い私とすれちがう
だぶだぶの服で隠してきた微罪
シナリオが行方不明になる深夜

富田林市　中村　恵

断捨離でスリム清清しい暮らし
遺り甲斐を貰う傘寿の台所
寂しくてふっと嵌まった思う壺
踊らない私を責める虎落笛
失敗はしない女の高笑い

富田林市　山野寿之

試着室マネキンだけに似合う服
知恵の輪がようやく解けた空は青
親が描く未来が重い塾カバン
誕生日重ねて丸くなる器
駅の傘受けた善意が戻らない

寝屋川市　冨山ルイ子

好きだった夜がきらいになってきた
トイレに起きそのまま起きていて朝に
年末に思い切りよく捨てている
耳遠く誘いついつい断って
まあーだまだ役立っていると思う自由

寝屋川市　平松かすみ

老眼にとてもやさしい太いペン
鍵持たぬ主義で通した旦那さん
家庭医も二代目になり八十路坂
延命はノーとサインをしておこう
お賽銭上げに登った野崎さん（百五十段）

寝屋川市　森　茜

つんと鼻頼もしきかな救助犬
こおろぎの髭の先までヴァイオリン
環状線どっち向いてもスマホ繰る
まっ先に芽吹いた友のチューリップ
魁夷描く道は静かに永遠に

羽曳野市　安芸田泰子

手応えは確かにあった赤いバラ
輪廻とややがて私も地に還る
無農薬のキャベツ畑は蝶の園
意気込んで見ても身体がついて来ぬ
諦めた中でもしやを待つ未練

羽曳野市　宇都宮　ちづる

断捨離が進む師走の回収日
ポチよりも長生きすると決めた朝
一年の速さ覚える年会費
終活が済むまで行かぬポックリ寺
何にでもポン酢を掛ける減塩中

羽曳野市　徳山　みつこ

向き合って話せ今年の漢字「北」
気づくお人だ忠告はやめておく
日の丸弁当いまの子知ってるか
亡き人が囁いてくる冬の星
平和への一歩ＩＣＡＮ締め括る

羽曳野市　永田　章司

年度末予算底迄使い切る
宇宙より地球に残る数多謎
一騎打ち敗けた候補が生き返る
腰痛でだんだん世間狭くなり
喪中の葉書八十路になって多くなり

羽曳野市　仲谷　真一

立春はこれから寒さ本番だ
節分の豆まき今は落花生
石光寺寒ぼたんが見ごろです
国会がはらん含みで始まった
糖尿病バレンタインに無関心

羽曳野市　藤原　大子

持ちつ持たれつ苦笑しあって住む二人
ぼんやりと流れのままに終った日
いたわりを素直に受けて笑み交わす
健康の言葉に耳と目がなびく
体力が待ったをかけてくる遠出

羽曳野市　三好　専平

釣り堀の時雨のなかの仏たち
ゆずられてゆずってのぼる老いの坂
マンションの下にひろがる枯れ御陵
しあわせは小さな窓のお月さん
掛けているメガネを探す読書欲

羽曳野市　吉村　久仁雄

潮の香も少し混じって目刺し焼く
言いたいこと言うとその夜はよく眠れ
負け数の重みに耐えていた青春
古い椅子座って昭和顧みる
頑張れと言わずに強くハグをする

東大阪市　北村　賢子

落胆へ青空だけは味方する
若者にすまない病院のはしご
同居人居て笑い合うこと出来る
やることがまだ有る歯車を回わす
まだ元気言うた以上は努力する

東大阪市　佐々木　満　作

孫帰り修羅場と化した四畳半
大方は不徳の致すという謝罪
勝ちパターンそろそろ切り札を送る
どう見ても妻の弁には歯が立たぬ
除夜の鐘無病息災感謝する

枚方市　海老池　洋

冬眠の扉を叩く春の風
ぴちぴちの美学乃木坂欅坂
冷眼で私をみてる三面鏡
一番鶏きっと爺さん鶏だろう
川柳ファーストこれで老後を通したい

枚方市　小　林　わ　こ

五感みなゆるゆる孫のバースデー
気前よくポンと差し出し泣く始末
渡れない橋の向こうに君が待つ
言い勝っても嬉しくはない一人ぼち
配ってもくばりきれないありがとう

枚方市　丹後屋　肇

ひと花を咲かすと古木ツイッター
デジタルという伏兵に襲われる
もうあかん言うて米寿を一跨ぎ
下五締めシャキッとなった胃のもたれ
断捨離を果たしてサイダーのゲップ

枚方市　寺　川　弘　一

交番の前は一度も通らない
噛み合わぬ歯車大き過ぎる妻
神さまが決めたバランス男と女
楷書で怒り笑う時にはカタカナで
本気になった途端世界が広くなる

枚方市　二　宮　山　久

ボランティア笑顔あふれる一時間
無人駅コスモス揺れて里帰り
寒風の中を山茶花咲き競う
手探りで始めた趣味で教える身
幸せを包む我家の灯がともる

枚方市　二　宮　紫　鳳

新聞を読み切るゆとり雨の午後
ノルマ課すように皮むく吊し柿
老い二人アレコレソレと的を得ず
好奇心アンテナぶれる七十路
母の味嫁が受け継ぐ知恵袋

枚方市　藤　村　亜　成

たまに尋ねる私は一体誰ですか
おろかしき出生祝い人生を呪う
月隠し太陽隠して雨が降る
もつれ話をバッサリ切ってきた鋏
運命に流され抗う舟を漕ぐ

秋天に悪戯書きの雲仰ぐ
許し得て心ほぐれて酒二合
秋風も押してくれるか呼名待つ
水よ樹よ石よ自然の摂理見る
声援は空に突き抜け孫こける

枚方市　山口弘委智

みんな生きているんだ交差点の波
無印は進みなさいと言うことね
寒い景色の中へ帰って行くかもめ
芳香剤が漂う妻のテリトリー
戊年のグッズの一つ手に入れる

藤井寺市　鴨谷瑠美子

鬱の字がすらすら書けて鬱晴れる
四つあるポケット使うのはひとつ
錯覚だらけの人生だったまあいいか
不器用な花が開かぬままに散る
おおきにな　ほなサイナラと逝きはった

藤井寺市　鈴木いさお

欲得が無くて忘れてばかり居る
遠くへ行ってしまったあの人も此の人も
人間を忘れることがないように
ひと言の重さを解らない人と
折り鶴がふわりと春風に翔んだ

藤井寺市　髙田美代子

悔い無いが五年日誌に余白あり
造語増え語源がなげく生き字引き
我が心映す遺影に励まされ
肌刺激冬至の柚子で若返り
雪だるま宅急便で飛んで来る

藤井寺市　田付絹枝

都会にも廃屋増える十二月
来る春に銀杏拾う十二月
また一軒町から消えて行く本屋
歌仲間戦後生まれに囲まれる
傘寿坂年齢言わぬ事にする

藤井寺市　吉田喜代子

大掃除だけは手伝う父の暮れ
トットちゃん「あらま」連発子らが真似
エプロンをすればベテラン母の顔
ベテランの母が丸めた鏡餅
楽しみにしていた旅の日を忘れ

藤井寺市　若松雅枝

どのサプリ効いたか今日は調子いい
熱燗でスタート息の合う仲間
気合入れ年末ジャンボ買ったのに
しみじみと呑んでみたいな八代亜紀
換気扇すめばお風呂の掃除です

松原市　森松まつお

十年を取って書き込むアンケート
生かされるままにここまでたどり着き
三歳までどの児も天使天才だ
うそと知り信じるふりも深い愛
忖度が出来ずにいつか窓際へ

箕面市　大浦初音

今日のこと今日のお茶碗洗いつつ
冬の月夫はいつも横にいる
家中におでんの匂い温かい
ひざポンの句を目指してるペンの先
したたかに生きて見せます独りでも

箕面市　酒井紀華

折半でドイツ旅行をする親子
孝行と思いつきあっている息子
ビジネスクラスでも半日は乗れません
帰る迄ニュース気になり落ち着かぬ
楽しまにゃ損と囁やく余命表

箕面市　出口セツ子

筆ペンを友に貰って賀状書く
観光地日本語聞こえほっとする
街路樹も電飾まとい暖まる
はぐれぬよう夫婦腕組むルミナリエ
冬空も何のぽかぽか一万歩

箕面市　広島巴子

マイページホーム暮らしは秘密です
大正の生まれ道頓堀を車椅子
闇市の昔を語る術もなし
悪女にはならず生涯終わりそう
ごはんです体操ですホーム忙しい

八尾市　高杉千歩

喜寿過ぎて未だ十年の旅券買う
晴れ渡る今日の天気のような妻
二刀流燃える野心がメジャー目指す
豊作へどや顔駆けるコンバイン
Jアラート鳴り渡るけどどこ逃げる

八尾市　寺川はじむ

天気予報故郷も明日は晴れるらし
目を合わさぬ彼に怪しい影がさす
足腰金どれも海外には行けぬ
元旦も晦日も同じ暮しぶり
寒いのに寒いと言わず野の仏

八尾市　宮崎シマ子

よし行こう決めたら雨が降りだした
価値観の多様化あれもこれもいい
年金で見栄を張っても高が知れ
世話したり介護されたりして母娘
角界のさわぎ関係ないけれど

八尾市　村上ミツ子

神戸市　上田和宏

ひと筆書きの辞世を舞って銀杏散る
ポインセチアポインセチアの十二月
十二月忙しがってる日本人
虹アーチに鎮魂託すルミナリエ
八十歳まだあすなろの夢を見る

神戸市　奥澤洋次郎

久しぶり置かれた肩の手の温み
とんぼりのネオンに過ぎし日日を追う
五十年希望の町は高齢化
赤ん坊のところでついている格差
呼ぶ声へ降る銀杏葉や御堂筋

神戸市　冨永恭子

庭の花あげてもらってできた縁
球根を太らせ春へつなぐ土
持ち寄って楽しいランチ　ボランティア
お直しは不要ですよの心地良さ
一つ忘れ一つ入れてる小ひきだし

神戸市　能勢利子

寝言では私を叱っている老母
介護度を通知表だと勘違い
デイサービスではいつも褒められてるらしい
往診に服を着替えて化粧する
曽孫には年中くれるお年玉

神戸市　細川花門

日溜りに喜寿と米寿と古稀と猫
街並みもすっかり変り人情も
バス停で待つ子を父の肩車
街に灯がともり冷たい雨が降る
秋天の自由琵琶湖に雁の声

神戸市　山口光久

口車に乗ってしまった運の尽き
ひとすじに歩き続けた歩の誇り
風が止むまではじーっとしておこう
貧乏性今日も朝から急き立てる
ぼちぼちと行こか腰痛宥めつつ

神戸市　山口美穂

片付けてまた探し物年の暮れ
お早ようよりお寒と口先に言う
ボーナスの噂きいても縁はない
もうとまだの狭間今ではどちらでも
つつく鍋野菜の高値きかされる

神戸市　山﨑武彦

言いわけがすんなり絶好調の舌
素のままで生きた証の深い皺
有るがまま飾らず生きた母白寿
耕せば亡父の匂いがする棚田
出稼ぎの父を見送る蕎麦の花

明石市　糀谷和郎

振り出しは日日子が待っている我が家
君だけが生きがいなんて良き昭和
遺書をかくなんと身軽に生きたのか
もしもがあるからあきらめぬ徳俵
誘われる今が旬よと諭される

芦屋市　黒田能子

独りぼっち淋しい犬が吠えている
豊かさにもっともっとと切りもなし
消したつもりそのうっかりが多くなる
恐ろしいニュースに食事不味くなる
飾り捨てのんびり生きることにする

尼崎市　市坪武臣

親しみが増すもマナーは崩さない
歩かねば悲鳴を上げる膝小僧
月となら切ないことも話せそう
ゆるキャラの妻が必至にペダルこぐ
タイガース若手に期待粒揃い

尼崎市　加川靖鬼

何がめでたいぼやき倒して百万部
バナナ一本幸せだった昭和の子
指揮棒につられてハモるクリスマス
冷蔵庫の玉子の部屋をちょっと借る
蝙蝠のようだひらひら生き上手

尼崎市　永田紀恵

逃げ道を確保してから売る喧嘩
有終を飾る奈美恵の荒稼ぎ
贈り主の魂胆匂う胡蝶蘭
閉店しほっとしているシャッター街
百薬の長の処方はしない医者

尼崎市　藤井宏造

名人芸鱧の骨切り桂剥き
ピリ辛のバンバンジーがくせになる
しがみつくほどの過去など何もない
負けられぬライバルはまだボケてない
休刊日やはり調子の狂う朝

尼崎市　藤田雪菜

上着にはいつもポケット付けている
買い過ぎて賞味期限に追われてる
紅葉に人生重ね合わせてる
警察も人だ時々逮捕され
優先席でスマホ使うの迷惑よ

加西市　金川宣子

難聴も噂話に耳ダンボ
フルムーン老いをしみじみ感じとる
旅先であなたの良さを気付かされ
来年もはかない夢のダイエット
忘れても思い出せればまだイケル

川西市　大坪一徳

前向きな男で今日も忘れ物
日経を読まなくて済む今が良い
腰痛と言いつつゴルフだけは行く
ゴルフより安いと値札見せられる
エンジンブレーキのような忠告身に沁みる

川西市　岡一心

七転び八起き黒星無念坂
天高し自然のリズム若づくり
念のためしっかり打って鱗釘
あたたかい心づかいのおすそわけ
明朗闊達男気のある好青年

川西市　山口不動

初恋は似た人でしたヘップバーン
初恋の人の賀状はとってある
同窓会トキメキ残すおばあさん
散り敷いて裸木となる潔さ
特養と組合せ良し保育園

篠山市　北澤稠民

大昔泣いたことさえ今笑う
クラス会むかしのあだ名生きている
無為という宝の時間いま過ごす
素っ気ない老父は純なだんまり屋
つり橋は怖がる人によく揺れる

篠山市　酒井健二

隠れんぼ消えた友垣消えたまま
大会に赤いパンツで臨んだに
アンケート名前書けとはよく言うな
突然に不幸おとずれ句が出来る
一片の愁い忘れず生きていく

三田市　足立つな子

トンネルをぬけたか今朝は鼻歌が
A型で案じることは認知症
これしきの事で諦めはがゆいね
川柳に追い捲られて年の暮れ
郷ぐらし新車にかえて娘が嫁ぐ

三田市　石原歳子

昼日中息子と散歩する私
手鏡で初めて顔の皺を見る
知らぬ間に歳をとったと諦める
おぜんざい食べて落ち着く独り者
二人で夕日をみたが今一人

三田市　上垣キヨミ

練るほどに川柳の芯遠くなる
車中席混雑無視のスマホ族
世間の輪忘れる事も生き上手
同期会初恋談義盛りあがる
二重丸つけて今年を締めくくる

三田市　上田ひとみ

君の住む街にも同じ雪が舞う
この距離に試されている私たち
特別なこともないから住き一日
曲がり角かあさんの声温い風
全力の笑顔でお待ちしています

三田市　尾崎一子

吉祥の日本丸初荷準備中
川柳と追いかけっこの日の短
転けるな呆けるな自問自答師走
来し方を綴る私の一行詩
初雪を踏んで先祖の墓参り

三田市　北野哲男

身に染みる大和言葉にある情緒
被災地の陛下へ婆のナマンダブ
成長を背中に見せる反抗期
野仏や鬼瓦にも綿帽子
むつかしいパズルの様な野党絵図

三田市　多田雅尚

風雪に耐えて通った登下校
核廃絶をアピール出来ぬ被爆国
食って寝て大いに笑い医者いらず
漁夫の利で得た政権を私物化し
高齢の事故は最初に歳を言う

三田市　福田好文

白タオル投げても止まぬ妻のぐち
下校の子が元気をくれるこんにちは
時間には余裕できたが金がない
ぐち聞きにぶらり立ち寄る縄のれん
行列した記念硬貨が寝る箪笥

三田市　堀正和

お若いのスマホもいいが空も見よ
十坪の庭にもちゃんと四季がある
肩凝りは厚着の所為にしておこう
数独がやっと解けたと晩ごはん
五合炊きフルに使って嬉しい日

三田市　村田博

楕円球気ままに弾み困らせる
半分になった頭髪お大事に
もう師走誰か日捲り破ったな
無理と無茶境界線がきな臭い
制限時間越えて呑んでる手酌酒

高砂市　松尾柳右子

お買物手押車で行く傘寿
孫曽孫集う正月夢一杯
戻れない亡父夢にも来てくれぬ
暖房の部屋で句作り出来る幸
枯れ葉舞うカラコロ蝶が飛ぶように

一・一七あなたが守ってくれました
長風呂を心配しあう歳になる
よくしゃべる夫婦でいましょ旅途中
黙祷の一分よろけるようになり
わたくしも女子力発揮する年に

宝塚市　田中章子

唄聞かず終った頃にただ拍手
終活の連絡先が先に逝く
貼紙をするなと貼紙が言う
免許返納最後の社会奉仕かも
夕食の潤滑油とてこの一杯

宝塚市　丸山孔一

許されて許して水も澄んでくる
しゃべらなくてもいいのです達者なら
久しぶり孫を見上げてお年玉
懐がぬくいと顔がしまらない
迷ってもやっぱり作るお重詰め

西宮市　緒方美津子

晩年の運を育てていくつもり
姉いもとたまに諍いして楽し
時として死ぬの忘れるかと思う
母の忌の紅ひとすじの白椿
仏壇の蕾ひとつづつ開く

西宮市　亀岡哲子

今更に知らないことが多すぎる
ゆったりと浮かぶ雲から学ぶもの
いらいらは散歩の風に捨ててくる
熟語ひとつ思い出せない進めない
あほなこと言うひとも居て座が和む

西宮市　西口いわゑ

お乳飲む赤ちゃん傍も皆笑顔
意外にもぴったり合った娘のお古
冷蔵庫奥からひょっこり小鉢出る
この頃はお節の予約盆直後
受け継いだ亡母のお節の有り難さ

西宮市　福島弘子

本四橋昔水軍おでましで
うっかりが増えてきたから脳検査
ぬるま湯で心潤う朝である
よう減るわ夫が私の化粧品
クラブ休み久方振りに孫の顔

西脇市　七反田順子

カラオケの趣味ある同期若く見え
小遣いを握った顔は晴れやかだ
緑内障二泊三日の手術する
佐渡に見た夕日が溶ける水平線
冗談は相手によって言葉変え

姫路市　古川奮水

南あわじ市　萩原狸月

山もなく谷底もなくもう傘寿
ＡＩの下僕になるか近未来
老いてまで競うくらしはもうご免
人生の奇縁つくづくフルムーン
食足ってしあわせだぞと言い聞かす

奈良県　安福和夫

戸締りをしても電話は越えてくる
迷惑な電話にリズム壊される
今日もまた非通知電話二件あり
不用意に質問すると術中に
折り返し電話しますで勝負あり

奈良県　谷川憲

高齢化の波わが町も呑み込む
葬儀に出自分の余命考える
廃線の駅舎に残る時刻表
昭和生まれ昭和で年を読み替える
家事修行風呂やトイレの掃除から

奈良県　中原比呂志

絵馬祈願きれいな文字が見当らず
三が日だけが神妙寺社参り
ロボットの進化定年寿命延ばし
記念日は元気元気と握手の輪
いのちある句を残そうよ記念の日

奈良県　長谷川崇明

ポインセチア真っ赤な闘志もう一度
残り火を種火に変えて趣味の道
腹減った言えた若さを懐かしむ
ほどほどの手加減知った昭和の子
財産と思うこの家子に負担

奈良県　渡辺富子

白寿の母バラ百本に囲まれる
生きる意味ふと考える冬木立
マンネリを裏返したらふとヒント
むなしさのすき間に咲いた赤い花
身の内の尖りが消えるまで歩く

奈良市　阿部紀子

夫のオペ牛の生体弁入れる
手術済みさっさと歩く夫追う
若い医師成功したと涙する
遂に来た老々介護の幕開く
母さんが泣く雪山はやめておく

奈良市　宇賀史郎

やれるならやってみなはれ運も友
ふり返りあしたが見えず今日の床
デリカシーなんて知らない分厚い手
ほっこりと孫の幼い字の手紙
橋のない川岸結ぶ愛讃歌

奈良市　高橋敬子

うまく干柿出来てわけたい人がふえ
膝痛でも計測の歳五十七
詐欺電話騙される気がわかりだす
愛犬に付き従って子らが来る
愛犬に話す子の声いとやさし

奈良市　辻内げんえい

断捨離で残した背広出番なし
団塊は欲しいと言えず耐えてきた
インフルのワクチンうって敵を待つ
いつまでも辿り着かない夢を追う
逆上りやはり出来ない俺の孫

奈良市　山本昌代

住職の法話にこころ入れかえる
ああ背伸び肩がこります年齢差
ストレートことば足りずの四面楚歌
沈む日は喜び探す散歩道
ケン玉で近寄る老いを追っぱらう

奈良市　米田恭昌

謎は謎秘めて古墳にあるロマン
里が好き昔の染みた古畳
文春定退引き手数多の興信所
馬籠宿歩けば昔そこかしこ
スマホの世ガラケイどっこい生きてます

生駒市　飛永ふりこ

古稀迎え新たな海へ舵を取る
弱かった私を祝う健やかさ
せいいっぱい生きなあかんと淡雪が
みかん剥き笑い合ってるおかげさま
わたくしのピンクで無垢の残像を

香芝市　大内朝子

運命のレールの今はどのあたり
寒いからおでん炊いたらよけ孤独
年金で命を繋ぐ綱渡り
取り敢えず新元号は見届ける
三丁目の夕陽傘寿になりました

香芝市　山下純子

故郷の裏山浮かべミカンむく
3歳でチラリ悪女の兆し見え
バーカウンター初体験の女会
露天風呂ぜい肉なんてなんのその
当てられてちょっと嬉しい隠し事

和歌山市　磯部義雄

トランプに似て呟いてばかりいる
黙々と蟹食べている大家族
お金では買えない夕陽独り占め
孫が描く絵馬は愛犬ピカソばり
まだ希み捨てずに昇る八十路坂

和歌山市　上田紀子

白い項女が匂う花舞台
神に運委ね真っすぐつき進む
円空仏木から仏を生んだ技
一丁の豆腐が百の技を持つ
届きそうな夢を北風攫ってく

和歌山市　喜田准一

誇るもの外にないのか北の核
年の暮感謝感謝の墓参り
さり気ない言葉の底にある重味
寒気団老いの二人を追って来る
これと言う話もなくて姉妹

和歌山市　楠見章子

元気よくやって来ました反抗期
少年の夢はすらすらカタカナ語
かすみ草いつも主役に憧れる
取り敢えず足にきいてるスケジュール
木枯らしにお地蔵さんも目をつぶる

和歌山市　坂部紀久子

どうでもよい掃除明日に又のばす
屑篭へストライクですこたつから
〆切りが過ぎて産まれる佳句秀句
昔給料　最近のお年玉
元旦にせめてスリッパ新しく

和歌山市　武本碧

末席でシャープな意見うずくまる
女同士分かり合えるという強み
ドンキホーテに負けぬ妄想抱いている
常識の世界を越えた青いバラ
鏡の中に母の昔が生きている

和歌山市　土屋起世子

美男子の曽孫投げキスしてくれた
仕事好き家族も好きなやじろべえ
幸せの素振りしている付けまつ毛
眠れないベッドで今日の非をを悟る
方向をかえて笑いに囲まれる

和歌山市　福井菜摘

子には子の夢ありそっと紐を解く
子離れてライフプランを練り直す
張り合って生きて双方おとろえず
夢ひとつ叶いプラスのキーを押す
言い切って自問自答の灯が揺れる

和歌山市　古久保和子

帽子屋の鏡に冬が映り込む
日本語を忘れてしまう街の風
メタセコイヤ真っ直ぐ伸びろ子どもたち
肩甲骨かつて翼があったはず
海に降る雪はドラマを書き上げる

和歌山市　堀　冨美子

永らえて今年も子等に招かれる
失明の老犬子等は温かい
いい顔をする度諭吉袖を引く
似合わぬと苦労話を茶化される
仏前へコーヒタイムを忘れない

岩出市　藤原ほのか

私の歩幅で渡る虹の橋
子を思う愛が過ぎると飛べません
年の暮れ元気でしたと賀状書く
越えてきた何やかんやと年の暮れ
年の暮れ帳尻合わせ幕を引く

海南市　堂上泰女

女より女形が魅せる柳腰
人情が失せてしまった国技館
漂着の北の舟から知る悲哀
越冬の小鳥へ残す木守柿
室内で滑り転けるという不覚

紀の川市　宇野幹子

サスペンス猫も聞き耳たてている
じっくりと煮詰めてやっときた夜明け
逃げ腰になると跳べない水たまり
時は金気にしていない長電話
流れには乗らぬか細い葦である

紀の川市　北山絹子

一本の道を歩いた父の意地
自分史に九十九折りした道がある
一向に結果の出ない塾通い
北国は雪の重さに耐えている
言い訳はやめて心が痛むから

紀の川市　楠原富香

喜怒哀楽ともに味わう釜の飯
どの皺も生きた証だ良く似合う
毎日が断りもなく過ぎて行く
山坂を越えて夫婦の日向ぼこ
母さんが演歌でしめる仕舞風呂

紀の川市　山東日出男

もつれずに器用に足を出すムカデ
居酒屋へ溜まった愚痴を捨てに行く
鍋奉行寡黙な父がよく喋る
米粒に二羽の雀を描いた絵師
縄のれん美人女将は聞き上手

田辺市　岡本昇

挨拶に笑顔を添える業がある
広島にお好み焼きというグルメ
年金の目減りが怖い老い二人
自己主張まだ決まらないフルムーン
振り出しは朝市通り能登の旅

夢追えと尻を叩いてくれた母
納得をするまで民は真を追う
九条のブレーキ永久に緩めない
危険な空もしやもしやに怯えてる
屋台でも味の秘密は持っている

橋本市　石田隆彦

汗と涙の宮城産米また届く
核心に触れず笑顔でする握手
軽く一杯黙って聴いてくれた母
センセイとわたしの距離が遠過ぎる
心にもアイロンをかけ靴を履く

（前月分）岩国市　上村夢香

重症をあえてさらりと告げる医者
気取るなよ浪速なまりの標準語
「好っきゃねん」くどき文句に決めている
放物線描いて消えた老いの恋
値引き分足して定価は決められる

（前月分）尼崎市　永田紀恵

ひとこと欄　原稿募集

1行15字20行まで（タイトルは別）
原稿の採否は編集部に一任のこと

第67回　西大寺会陽川柳大会

と　き　平成30年2月25日（日）
午前10時開場
午前11時30分　投句締切
ところ　西大寺ふれあいセンター
（JR赤穂線西大寺駅徒歩7分）
会　費　1500円（発表誌・記念品呈）
各　題　2句（席題なし）欠席投句拝辞
兼題と選者

「悩　む」	新家　完司　選
「　魂　」	大谷　慧水　選
「　髪　」	大森　昭恵　選
「　原　」	黒田るみ子　選
「ほめる」	増田　敏夫　選
「春　隣」	丹下　凱夫　選
「　肌　」	高橋土筆坊　選

問合せ・連絡先
西大寺川柳社　主幹　野島　全
TEL 086-943-4627
主　催　西大寺川柳社

誌上競詠川柳「咲くやこの花賞」

30年度	題と選者	ハガキに2句	
第1回	水	森中惠美子 選	2月20日締切
第2回	闇	井上　一筒 選	3月20日締切
第3回	選　ぶ	雫石　隆子 選	4月20日締切
第4回	斜	嶋澤喜八郎 選	5月20日締切
第5回	デザイン	前年度優勝 選	6月20日締切
第6回	湿　る	天根　夢草 選	7月20日締切
第7回	バリバリ	笠嶋恵美子 選	8月20日締切
第8回	島	大野　風柳 選	9月20日締切
第9回	針	樋口由紀子 選	10月20日締切
第10回	常　習	新家　完司 選	11月20日締切
第11回	フライト	赤松ますみ 選	12月20日締切
第12回	巡　る	小島　蘭幸 選	1月20日締切

投句料（掲載誌料含む）1年分　2000円とする
送金先　〒547-0006　大阪市平野区加美正覚寺
3-5-5-304
立蔵　信子　あて
投句先　〒532-0033　大阪市淀川区新高6-7-5
鷲田　寿子

川柳塔の川柳讃歌 ⑬

上方芸能評論家　木津川　計

上を向き歩くが虹と出合えない

堀　正和

「上を向いて歩こう」はその昔、夜間高校生を励まそうとして大阪労音が自主制作した曲だった。作詞は永六輔、作曲を中村八大、坂本九が歌って大ヒットした。〈上を向いて歩こう／涙がこぼれないように／泣きながら歩く／一人ぼっちの夜／悲しい歌だったが、その境遇の少年たちを慰めた。夜だから虹と出会えないが「夢淡き東京」は〈かがやく聖路加か、はるかに朝の虹も出た」と。その朝、虹よ、正和さんの凱旋門よ、は目の前にある。

気兼ねなく早起きできるマイホーム

中原　章子

ベストセラーだった『病院で死ぬということ』を評して永六輔さんは「人間生きたいように生き、死にたいように死なせてあげるというのが著者・山崎（章郎）さんの一番考えていること」に山崎さんが答える。「確かに病院の中ですと、自分の気持ちのままに生きるというのはとても難しいですね」（『大往生』）と。病院や施設では早起きするのも気兼ねする。章子さんは幸せです。何時に寝ようが起きようが誰憚ることもないのですから。

九十歳まだぬけぬけと神頼み

津村　志華子

「サヨナラ　サヨナラ」の淀川長治さんは願った。映画が終って観客の帰る声が遠くに聞こえる。掃除のおばさんが椅子をパタンパターンと片付け始める。寝ている淀川さんがいるから「おじいさん。映画終わりましたよ」と肩を叩くと、もう死んでいる、を理想としたが腹部大動脈瘤破裂で逝った。数え九十歳だった。志華子さんの九十歳は佐藤愛子さんの「何がめでたい」でなく「まだぬけぬけと神頼み」。神様は頭をかかえています。

息子からいい事だけを聞く不安

桝本　宏子

岸本水府の優れた才能は次の句が明かしている。「母親へ土産は安いものがよし」。母親の何たるかをこの十三字が語り尽している。この母親の愛を淀川長治さんは生涯忘れなかった。だから年老いた母と入浴し、背負って散歩した。親孝行そのものが生き甲斐で独身を通した。他の女性と結婚したら母は淋しい。母の淋しがることをしてはいけなかったのだ。宏子さんの母性はご子息が母を心配さすまいといい事ばかり言うウラを案じるのです。

作文を孫エッセイと誇らしげ

米田　恭昌

その違いを問われたら、作文は子供、エッセイは大人です。だからお孫さんは大人になった気分で「誇らしげ」なのです。豊田正子の「綴方教室」である。トタン屋根の陋屋に父は病気で臥せっている。番傘の岩井三窓が詠み「綴方貧しき父は母を打つ」。貧乏のあまりを三窓はよく捉えた。諸兄姉に言う。これが川柳というものだ。手内職でやつれきった妻を父は痩せ細った手で打つのだ。恭昌さん、お孫さんに綴方の良さも語って下さい。

妻知らぬうな重食べた一人旅

浅田　隆樹

中学で新聞配達、高校で牛乳配達と家庭教師をしていた僕は、一人前になったら食べたいものがあった。卵十個を一遍に焼いた卵焼きと、鰻の蒲焼き十枚を重ねてかぶりつく。「それが僕の夢」と、なお貧しかった二十代に初恋のひとに言うと、「食べればいいじゃないの」と事もなげに言われ、別れた。隆樹さん、鰻を食べるとはそれほど大事なのです。

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

学問の跡形もなし　小商人
人情の　秋深まればよみがえり
紫綬やよし　詩人の胸をいろどるに
明治百年　蹄の音は消え去りぬ
赤帽もそのうちみんな齢をとり
十二月　あしかの声につまさるる
中之島剣先は寂　十二月
元旦の恋に使いし一時間
オーバーの襟立てさらに破魔矢立て
何もかもぬかるむ戦後　明治村
ベトナム遠し　子のピストルに斃れる真似
建国祭　寒の卵に血がまじり
飯盛山　遺恨の如く雪残る

一人旅　わかさぎ釣りの氷穴親し
黙々と水かけ不動　恋の垢
処女の死　鏡の中へ歩み去る
おたまじゃくしのままでありたし少女の恋
人を待つ　かたわらの花嗅ぎもして
一日の重さ軽さよ　日記帖
風薫る　キューピーほどの裸はなし
風薫る　歩きながらのハーモニカ
歌うより踊るよりない平和かね
テレビ見る　子を頤と膝に埋め
金環蝕　そらエンゲージリングだよ
舟歌は最も人を恋う歌か
捨猫とうなだれがちの向日葵と
童顔は首から上だけのことさ
同期の桜　酒に爛れてしまいけり
四五人が来て瞬時句碑華やげり
句碑ありぬ　亡き先生の背丈程の

自選集

小島蘭幸

結婚式の笑顔遺影になりました
義弟逝く孫抱く夢も果たせずに
これは現実義弟の骨拾う
泣いて泣いて泣いて妹よ生きなさい
妹が独りになった街の灯よ

前たもつ

いい町だみんな赤ちゃん取り囲む
人一倍欲があるから大丈夫
終章は快速列車丁度よい
くよくよそう曇天の上晴れている
就寝へ感謝数えて祈り終え

政岡日枝子

着ぶくれて犬と散歩の小正月
連れ歩く犬に米子弁で喋る
賢くて瞳と眼で相図出来る犬
ゆっくり歩く私に添ってくれる犬
気遣ってもらっているは私かも

三宅保州

超特急何をそんなに急ぐのか
油紙に包んであった父の遺書
凛として妥協をしない葱坊主
さりげなく隣りの前も掃いておく
古里は山紫水明だけ残り

宮西弥生

ふり出しというやり直しある居場所
一つ片付け一つ不明の十二月
座禅して行方不明が見つかった
別れない結果に子供浮び出る
量低くなった賀状ら翔こう

村上玄也

また嫌な冬が来たなと滅入ってる
飲み食いへ我慢を強いているカルテ
燥ぎ過ぎた後はしばしの孤独感
念を押し過ぎてくどいと咎められ
不寛容が差別生みだす荒んだ世

森山盛桜

真結びがほどけてだらしない姿
内角を抉られぬよう身構える
無遠慮な風琴線をかきまわす
行く道はこれか遠近法の点
思い出のよすがグラデーションになる

生涯主役

朝きっちり起きるとパンも美味しくて
陽と歩くサンバイザーは必需品
本を読む世の中知らぬことばかり
ずるずると生きては役もつとまらぬ
残りの旅も主役は私だけだから

八木千代

五十数年やっと夫婦のハーモニー
追うものがありペン走り出す夜長
負のスパイラルネガティブになる冬の夜
ふと忘れふと思い出す恩師の名
冬のくつろぎこたつにみかんあればよし

山本希久子

寒かろうパンチの効いた句が出来ぬ
東から西へ直球あかね雲
二〇二六心がわれるほど寒し
素うどんのような夫と掘り炬燵
達筆で猛犬注意猫の声

板尾岳人

正月かそうかそうかと何もせず
歩いてるうちに大人になっていた
文字跳ねる少し尖った音たてて
あと味の悪い言葉は塩焼きに
爪を切る仲良しごっこする前に

川上大輪

夢十夜食べてお下げの頃のまま
点点と椿が誘う白昼夢
夢の途中と知って頁を伏せました
名前など付けて金魚と冬籠り
一日が冬のリズムで暮れてゆく

木本朱夏

争いの種は拾わずいい話
病名のわからぬ痛さ太い息
赤鬼も青鬼もいる披露宴
感情を押さえる度に胃が痛む
無職とは書きたくないが書かされる

小西雄々

魂はしっかりしてる冬の葦
近道はよそうよ橋が朽ちている
地吹が連れてきたのは焼き芋屋
研究心途切れぬように種を選る
頼られて頼って絆太くなる

斉藤劦

月煌煌七十五歳誕生日
何をしに生まれてきたかフト思う
軽やかに晩酌前のウォーキング
窓叩くのは惜別の歌ばかり
ネクタイの結び方さえ忘れそう

新家完司

それ以上　以下でもないともめている
街に住む人から過疎の良さを聞く
当然の顔で電気のある暮らし
名告れないような大学出た学士
神様の怒りか乱れだした四季

竹治ちかし

出不精に追い打ちかける傘マーク
またしてもこまめに消してホゾをかむ
常備薬揃え師走にまぎれ込む
火の用心肝に命じる師走風
采の目にせよとうるさい雑煮餅

津守柳伸

エンゲル係数にかずけて励む健康食
たっぷりと亡妻の分まで大根炊き
冬の陽へついおろそかになる夕餉
ショートする相手もなくて夜が更ける
遠近を老眼に替え正信偈

都倉求芽

にんげんを復活させる本を読む
簡単に呼名をKと書いておく
マンゴウと梨とリンゴと夏みかん
その時は焼いて化石になるつもり
ここからは迷路地獄の一丁目

土橋螢

せちがらい浮世さりとて去り難し
女子会の夫貶して孫褒める
冬眠中です捜さないで下さい
道なりに歩き続けて今ここに
冬の底惜しいお方の訃報聞く（悼・正雄さん）

西出楓楽

如月や軍神の墓凍えてる
如月や国の予算は五里霧中
如月や12球団日本一
如月や蝉は隠忍準備中
如月や八十路の僕に長い月

仁部四郎

第6回 広島県川柳協会誌上大会

課題と選者（各題2句・3名共選）

「　鐘　」　天野　弘士
　　梶川　　藍　共選
　　川上　大輪

「自由吟」　大森　昭恵
　　長藤　敏子　共選
　　赤井　花城

投句要領　規定の用紙（コピー可）またはB5用紙に2題4句を連記のこと

投句料　1000円（定額小為替）
作品発表誌呈

締　切　平成30年2月末日（当日消印有効）

賞　各選者特選に呈賞

投句先及び連絡先
〒723-0044　三原市宗郷2-7-27
鴨田　昭紀　宛
TEL/FAX 0848-63-1096

主　催　広島県川柳協会

霜ネタ日記

髙瀬霜石

去年11月、「国民文化祭なら」で、蘭幸、完司、楓楽、朱夏諸先輩にもお会いでき、誠に光栄でありました。

というのは、お題目。本当の目的は、国文祭の2日後に、尼崎で開催された「アート・ガーファンクル　コンサート」に行くためであった。

オット、失礼。その「アートなにがし」って、一体誰やねん？　何者や？　となりますわなあ。

1960～70年代に活躍した「サイモン＆ガーファンクル」というデュオ（歌手による二重唱）をご記憶だろうか。映画「卒業」にも使われた「サウンド・オブ・サイレンス」や、大ヒット曲「明日に架ける橋」は知らなくとも、「コンドルは飛んで行く」は、ご存知か。

まず1曲歌ったあと、彼は、おもむろに、カタコトの日本語で、聴衆に（僕に）こう言った。

「ワタシ・・・歌うの・・・ダイスキです」

彼は1941（昭和16）年生まれ。僕より8つ上の76歳。背中も丸くなった普通のオジイサン。でも、彼には歌があり、彼の歌声――当時「天使の歌声」と言われた――を愛するファンがいる。だから、そこに居た。

それに比べて僕はというと、大好きな川柳だったはずなのに――忙しさにかまけて、八木千代さんのおっしゃる「川柳さん」を、おろそかにしはじめてきているのではないかと――猛反省した夜であった。

76歳になったら、大阪まで行く気力・体力は多分ない。が、「川柳大好き人間」ではありつづけたいものだ。

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

好きなことどれだけしたか誕生日
人の世に馬鹿と言われるむつかしさ
あの世への入口があるお仏壇
病には負けぬが老いにはかなわない
盆帰り仏に暑い夏だった
空爆をするよりほかにない面子
長いこと貧乏したが孫もでき
長生きをした甲斐があり記事になり
死ぬというまだ残ってる大仕事
忘れえぬひとりを憶う花水木
誕生日せめて散髪して迎え
爪切って一日ほかに用がない
嫁はんに叱られ部下を叱りつけ
ゲルニカの絵を忘れない二等兵
おとむらい他人は酒を飲んでいる
詩を作る人でうすぎたない暮らし
ゴシップのないタレントで忘れられ
友だちの好きなラガーが冷えている

川上大輪選

誤字脱字絵馬の子犬が吠えまくり
糧を得る女の汗の染む造花
ラッピングしすぎて今日も一人ぼち
逢いたくもない男から年賀状
子育てよりも手古ずっているスマホ
雑炊は三日後になる一人鍋

大阪市　横山里子

リセットをする煩悩の百八つ
片目瞑れば許せることが多くなる
聞き違い言い間違いが多い古稀
足腰の螺子を締めてる年の暮れ
中流の中で飛べない鳥になる
椎の実はまだ覚えてる里の秋

貝塚市　吉道あかね

しゃっくりが止まらないまま降りる駅
一冊の手帳に秘密握られる
そろそろと私の肌も冬支度

千葉県　廣瀬良磨

悪い癖鏡の角度変えてみる
情報が右の耳から漏れている
ポケットの中に詰め込みすぎた秋

瀬戸内市　宮宅比佐恵

ご退位を祝し私も好きにする
年新た愛しい絆抱きしめる
新年も使い捨てにはまだならぬ
私に賞味期限はありません
出世魚食べて今年の運を待つ
松竹梅活けて米寿の旅に出る

鳥取市　山野すみれ

地に足が着いてるか問う蟻の列
都合良くスケジュール組む昼下り
とりあえずスマホは横に置いてから
簡単にばあちゃんは出す知恵袋
また一人賀状が遠くなっていく
苛立ちを適当に切り陽に晒す

佐賀県　真島久美子

指先の色は現実逃避色
目に見えるものは手に入れなくていい
春色になった私の頭蓋骨
ふわふわの真ん中居心地の悪さ
外気温ばかり気にしている独り
砂糖無しホットミルクのような母

大洲市　花岡順子

爪のない猫はネズミと仲がいい
長いものに巻かれて終る小さい意地
それからは付かず離れず距離を置く
きれいごとで固めて心凍らせる
ケロイドは近付き過ぎた後遺症
結局は自分の顔が立てばいい

豊中市　荒木郁子

歳重ね気持の張りの身繕い
健康維持サプリメントを又ふやす
検査結果嬉し涙とありがとう
心配性非常出口を見届ける
輪の中に溶け込む笑顔得意技
お正月婿に気遣う老夫婦

大阪市　長髙俊雄

御しやすし喜怒哀楽が顔に出る
演技派と褒めて美形とは言わず
節くれの指にダイヤが不満げで
殊勲甲譲って蔭のひととなる
屋台酒その場かぎりのツレが出来
とめどなく枝葉繁らせホラ話

竹原市　土井輝恵

紙カップまだまだ役に立てそうで
紅葉狩り五百羅漢の亡父に逢う
ケアホーム義姉置いて来て穴が開く
ウン千万リュックに入れてケアホーム
時々は大黒柱立てておく
爺婆を秤にかけて頼みごと

大阪市　中島栄子

心の明かり消してしまった夫の死
消えて行ったあなたに今日も語りかけ
亡きあなたの温もり今も手の平に
幸せの人よりも不幸の人が好き
名店ぶら婆ちゃん仲間お洒落して
曾孫増え嬉しさ同時資金ぐり

横浜市　川島良子

すこし黙って考える時間をください
十年日記扉を開ける古希の春
憶測で人は安易に物申す
変人か否か貴乃花の存在
満員御礼危機は避けたい大相撲
踏み出せる一歩と踏みだせぬ一歩

寒風の広場で長いセレモニー
心とはうらはら白髪容赦ない
体調に命見つめてくらす日々
昼寝って老いの妙薬出る元気
割り切っていても未練のあるこの世

鳥取県　門村幸子

一人とは洗顔化粧忘れ出る
一字ごと辞典を見ては句を作る
離婚してぐれているのは男です
取り合った土地は柩に入れなんだ
年金のカード亡夫は置いたまま

鳥取県　下田茂登子

生きていることが幸せ老いの春
いい人の笑顔の裏にある苦労
目が覚めて何時もの朝に感謝する
鼻唄に合わせ男の手打そば
女房が逝ってぽっかり穴があく

鳥取県　橋本整

泣かないと決めた褒美の赤い靴
生きるとは自分励ますことと知る
悲しさをハハハで済ます胆を持つ
森歩き物の見方を変えてみる
押し花が当時の私知っている

鳥取市　大前安子

嘘一つ重ね女は強くなる
忘却という武器があるから生きられる
諦めが悪く指輪が外せない
諦めた夢に衣を着せ語り
宴会でゲストの蟹が盛り上げる

鳥取市　田賀八千代

望む事なんにもなくて生きている
ムクムクといつも迷いが先に出る
グングンと似てくる癖にとまどう血
つぶやきが本音になって湧いて来る
簡単に記憶無くなる政治界

倉吉市　岡崎美知江

柿たわわ故里に住む母想う
まだ米寿化石だなんて言わせない
雲行きが怪しい夫に近よらず
ギシギシと夫婦にヒビの入る暮れ
塩コショウ適当に入れ自分流

倉吉市　若松由紀子

妻ケーキわたしはいつも芋である
程ほどが良いとパチンコ屋のチラシ
老いと呆け止める昼寝は欠かせない
北の核たった一人のためにある
もう一つ新元号に逢えそうな

米子市　生田和之

米子市　伊塚美枝子

列島の汚れ洗うか今日も雨
バイキングあれもこれもと欲しがる目
婆ちゃんはいつも何かを探してる
同い年いいえ私は早生れ
仲良いね言われ文句を引っ込める

米子市　川本美津子

鑑定団私に値段つけてくれ
来年は増えるといいな笑いジワ
亡母の年越えて形見の服を着る
元気ですか ただそれだけですれ違う
働かぬ脳に栄養カニ食べる

米子市　永井三津子

我が娘には言えるが嫁にゃ言えません
あわだち草嫌われながら其処彼処
川柳を愛し愛した人が逝く（両川洋々さん逝く　3句）
川柳のノート抱き締め恩師逝く
見てますか没句大会してますよ

松江市　相見柳歩

教えます熱い心がある限り
挑戦を続ける王者逃げだした
工夫して税金下げる法案を
生きること真面目に君を愛すこと
土の声聴こえるように手を洗う

雲南市　永見安子

少しずつ色づく山のもの悲し
頼もしいうさぎと亀の二児いて
訃報知る笑顔は今も胸にある
少しずつ忘れ楽しい明日があり
忘れてる事すら忘れ今日が暮れ

広島市　田桑恵子

自販機で苦闘しているおばあさん
顔見えるアナログ昭和が懐かしい
廃線が迫り乗客どっと増え
ローカル線まるで遠足熟女達
いい匂いパン屋が出来た散歩道

三原市　笹重耕三

渋柿がぽとり独りの秋終わる
ミサイルが飛んだ赤とんぼも飛んだ
休肝日今日一日を誉めて寝る
詳細はこちらクリックなどしない
凡人と決めて明日の風に乗る

山口市　青木隆子

窓開けて胸の痞（つかえ）がとれた朝
間髪の友の答えに舌を巻く
我慢の糸ぷっつり切れて黙りこむ
抱え込む悩み話せば戸も開く
母卒寿カニ街道で頬ゆるむ

山口市　中前幸子

こころ渇いて海鳴りを近く聴く
振り子時計コチコチ夢をまだ刻む
謎ぽんと弾けて流れ星になる
独り居の風は虚しさ置いて行く
冬の詩きらきら裸木に咲くロマン

松山市　郷田みや

言い放ち隅で自分を責めている
下り坂同じ歩数を確かめる
しりとりをしてバスを待つ小さな手
気付いたのはムーンウォークだったから
タンバリン軽く叩いて小休止

今治市　渡邊伊津志

色褪せた赤い糸にも我慢跡
近過ぎて一番見えてない自分
褒められた分無理をして背負い込み
目立たずに生きて貫く自制心
オブラートの上でジョークが溶けていた

高知市　三谷松太郎

薪くべて囲炉裏で燃える回顧録
つづら折り越えて地元の顔になる
ばあちゃんがイケメン医者にシャンとなる
老いにつれごうつく張りがまた光る
久々にボクと言ったら若やいだ

沖縄県　禱モモト

女子会はランチとディナー殿何処
女子会の至福タイムは御喋りで
サプライズ母歌い出す披露宴
眴(めば)せで席譲り立つ女学生
怒る人笑う私は変ですか

沖縄県　宮すみれ

おしろいが着かないようにソフトハグ
お世辞でも今の私に心需品
大空にハッピーなことささげたい
目覚めては元気ポキポキまだいける
お隣の子持ちの猫に引っかかれ

那覇市　前川真

古手帖初心を熱く語り出す
独り身が生きる証しのシャツを干す
神の名を叫びたくなる夕まぐれ
生らぬ樹に拗ねてる訳を問い質す
ハグされたような気がして目を覚ます

弘前市　髙森一呑

足の裏僕の履歴が埋めてある
貨車通過数える癖はまだ続く
好きな様にせいと言ったら寝てばかり
なにもかもストーブ列車忘れさせ
元気そう週に一度は通院中

横浜市　巖田かず枝

いよいよか鍵の迷子に気がつかず
国産という安心を買わされて
自動化に手伝うことを探してる
愛情がママのご飯の中にある
痩せ細りサンマ苦労が多いのね

名古屋市　冨田末男

マンネリの母だが学ぶことにする
チャンス到来しっかりゲットしたくなる
疑問符があっても言わぬ母だから
いっぱいの笑顔貰えた褒め言葉
苦労することを好きだと思いたい

豊橋市　西郷紀美代

大きいと思った孫は前の列
それぞれにスマホしながら食事会
指先のひび割れコイン掴めない
胸焼けに懲りずに午後も芋を食う
大粒に期待をするがしじみです

大阪府　小栢こずえ

皆同じ二十四時間持って生き
寒い日は動け動けの応援歌
何も彼も忘れたき日の落葉掻き
特別な事もしないで疲れてる
恵まれていても不満はいつも持ち

大阪府　神野千恵子

ヒト科なのに3足歩行しています
スマホ充電　脳はカラカラ
ぬいぐるみ抱いて自撮りのあほらしさ
真摯・丁寧・謙虚　国語辞典を引いてみる
人よりもずっと凛凛しい野の菫

大阪府　畑中節子

裏庭で夜はコオロギコンサート
紅葉散る木枯しの舞う風の笛
霜の朝庭異次元の美しさ
レシピ付き採りたて野菜道の駅
欲一ぱいつめてゆがんだ旅鞄

大阪市　小野雅美

平等と言いつつ垣根拵える
膝痛め痩せないのかと膝が問う
通りすがりの街に情けをかけられる
ネオン煌めき街の素顔に溶けていく
結局は自分を責めて生きている

大阪市　柴本ばっは

汚れた手雪で洗って家に着く
豪雪から逃げた母です眠る余呉
母の墓碑春まで守る余呉の雪
福豆ポロリ卒寿の母も噛んでいた
二ン月はふところ寒い老いふたり

大阪市　森　廣子

すっぴんになると風まで柔らかい
へそくりを全部はたいて蟹ツアー
にっこり笑い友したたかな敵になる
土に抱かれ大根はまだ眠い
復興の重い言葉を抱いて冬

堺市　羽田野洋介

まあだまだ誘いのかかるうちが華
飲むほどに強気の虫が顔を出す
よしやるぞここ一番へ深呼吸
顔見せるただそれだけで充分だ
励ましも時と場合にプレッシャー

池田市　上山堅坊

隙間ない趣味の予定に励まされ
寒椿冬を励ます赤い花
高い技術が泣いてるネット詐欺
同世代のバタバタとくる喪のハガキ
コンビニがじわじわ変えるわが食事

池田市　太田省三

オフィスビル地下に昭和のトンカツ屋
小正月過ぎて淋しい太鼓橋
最短は敵地突破とナビの指示
問診票少なめに書く酒の量
七人へケーキを分ける難しさ

河内長野市　中島一彌

背伸びした善の真似事続かない
割引シール貼るのを横で待って買う
野良猫も警戒を解く日向ぼこ
雑巾を絞る力が枯れてきた
寝付かれず闇天井と睨めっこ

河内長野市　原熊知津子

何気なく言った言葉が発火する
話しだすチャンス待ってるティーカップ
誰ひとり悪くないから吠えている
諦めきれず坂の途中で振り返る
刹那に燃える別れへと続く道

吹田市　岩口のぞみ

AIに代われぬ仕事何だろう
サンタさんたまにはパパもお願いね
ミサイルと木造船と拉致被害
今年の字来年こそは幸となれ
年賀状名簿にらんで減らせない

高槻市　三谷白黒

バス旅行トイレが無いと行けません
寝たらすぐ朝が来るのは幸せだ
早いこと何もしないでもう一年
コンビニは公共機関田舎では
正月は何もせずともやってくる

豊中市　荒巻　夢

ハロウィン昭和生まれは気恥ずかし
老いたとて演歌に心揺さぶられ
陽を背なに漂う埃吹いている
雑踏が古都の魅力を剥いでゆく
旧友へぽとりポストの音を聴く

豊中市　貝塚正子

ほんのりと紅差し開花待つ椿
神様に乗せられている幸不幸
笑ってる場合じゃないよ孫八人
らくらくと教育勅語戦前派
胸張ってシャンと歩けとカラ元気

豊中市　木藤こみつ

安物のエビ衣をつけて太くする
お相撲さんに自動改札機は狭い
同時通訳少し追いかけながら言う
少しくらい太っても着られる和服
シルバーシートいずれ足りない高齢化

寝屋川市　岡本勲

看護師の評判よくて流行る医者
この靴がためらう俺を居酒屋へ
どちらにも鳴る鈴中間管理職
いつだって本音でものをみる鏡
躓いた石に生き方教えられ

枚方市　谷英也

八十路過ぎ今年もそつなく駄馬で行く
何するもゆとりがないと脳枯れる
よもやま話上から目線はずまない
年老いた遊ぶ相手も減ってきた
優しさも棘があるので要注意

箕面市　中山春代

この次は美人に生まれますように
喜寿の初春　百まで生きる設計図
新しい靴が落葉を踏みたがる
おしゃべりの時間が足りぬバイキング
あや取りの指が昔を忘れない

八尾市　田邊浩三

高齢者爪髪だけは良く伸びる
タメ息をついて十円また取られ
高齢者渡る世間に増え続く
仕事でも呑んだ時でも野暮な奴
それ以上聞いてくれるな野暮用だ

八尾市　前田紀雄

瞬発力無い草食系家族
文春に分からぬ様にする示談
国家予算防空壕の設置など
残業ゼロ正規雇用で妻の部下
一年中スイッチオンの北のアナ

ひとり居に遠慮いらない大欠伸
怪しいと思いつ乗った欲の皮
ささやかな幸せ今日も良い目覚め
昭和史を繰れば長屋の義理人情
昭和へとわたしを誘う深夜便

神戸市　玄番美恵子

割り勘の計算だけは負けてない
なんとなく妻の足音老いている
僕の癖素直に靴が知っている
一度でいい冴えてるなんて言われたい
母さんが笑うと子らにぱっと花

神戸市　奥水弘

失敗の数を増やして一人前
人も葉もやがて色づく円熟期
ちっぽけな虹の断片手に入れる
いい人を演じ続ける自信無い
今年また思い残しの暮れの鐘

神戸市　田本古鈴

名医ならなおして欲しい恋病
人並に義理をはたして先ずは酒
言いかった喧嘩のあとのすきま風
九条を消してはならぬ呱呱の声
不義理して友と無言の仲たがい

神戸市　山根弘華

あれこれのケリをつけたい年の暮れ
一時金がわりにくれた蟹2杯
酒を飲みたくて飲んでるしじみ汁
ヘアピースめくるいけずな風に遭う
二世帯の雑煮にみそ派おすまし派

尼崎市　清水久美子

正座する畳の部屋でないけれど
古希越えて体が歳といいかけた
明日という日はあるけれどまずは今
暇だからなかなか切れぬ長電話
大ジョッキドイツで飲んだ初ビール

三田市　辻開子

何歳と聞けばくねくねパーを出す
浦島太郎乙姫達が離さない
延び延びの返事はNOに決めている
一位より二位がファイトを沸きおこす
小さなドラマとうとう独りになりました

三田市　東内美智子

我が家にもリセットしたい人がいる
リベラルはアベノミクスが大嫌い
五十年辛抱したんはどっちやろ
相思相愛一緒にあの世それは無理
幸せと思った人が最後勝つ

宝塚市　太田としお

西宮市　福田正彦

民捨てて世界平和は語れない
スーパームーン地球をのぞき憂えてる
師走空喪中の報せ続く日日
拉致思う難破木船影背負う
スマホ打つ指の動きがはやすぎる

姫路市　中野忠

雑草と格闘をした荒れ畑
転んでも手にしっかりと千歳飴
これからも生きて行きたいあるがまま
ストレスをほどよい酒が解きほぐし
はや師走佳句なかったが頑張ろう

和歌山県　森下よりこ

寝るときは姿勢正して目をつむる
大それた事は願わず生きている
雨の音聞いてゆったり朝寝する
お葬式から帰ればおなか空いてきた
生きているだけでも大変なこの世

和歌山市　倉橋悦子

宝くじ捕らぬ狸を友として
被災地の溜息を聞く寒の入り
家計簿が景気を記す半世紀
寒牡丹見事に咲かす額の中
如月が合唱してる春よ来い

和歌山市　定松宏枝

満月の視線気になる露天風呂
老犬に引かれ日課の散歩道
好き嫌い無いけど注射大嫌い
クラス会昔の名前で出ています
無精者コタツの周り物の山

和歌山市　西川千鶴

結果論お茶も疾っくに冷めている
胃カメラに心の裏も覗かれる
早送りしたくなるよな下手な芸
時計など見ずに一日過ごしたい
大の字に寝て鼻風邪を引きました

和歌山市　福呂秀子

緩衝地あって休まる絆にも
手を合わす今の平和に感謝する
ジンジャーティ心も和む冬の朝
冬将軍受けて戦う終わりまで
黒豆の煮る日書き込む年の暮

岩出市　村中悦男

デイサービス互いに過去に華咲かせ
敬老日子供のようによく笑う
月命日せめて読経をまちがわず
料理法添えて野菜をさし上げる
大根の白さが光る霜の今朝

鳥取県　児玉規雄

改選の度に増えてく新党名
マイファースト全てこの世はエゴイスト
戦いは舌戦だけにして欲しい
一文字で一年括る難しさ

鳥取県　橋谷静江

老々介護続ける覚悟出来ている
リーダーはなかなか骨の折れること
ゆっくりと休んで元気とり戻す
強気でも寒さ体にきつすぎる

鳥取市　上山一平

風力の発電気分よく回る
しば栗の渋皮を剥く白い肌
じゃんけんのポンかホイかで笑っちゃう
歴年の日記世相をあぶり出す

倉吉市　大羽雄大

悠悠と追い越していく若い脚
音痴だと歌わなければ分かるまい
Jアラート空を見上げて見届ける
復興祭舞う風船と歓声と

倉吉市　田中紀美恵

雪降る夜いやに退屈早寝する
懐がいつも寒いとぐちこぼす
遅咲きの花といっしょで芽が出ない
絵手紙の金魚が泳ぐポストです

倉吉市　田中けいこ

自慢する女優の話ラジオ切る
浮かんでは消えてまた出る同想句
屁理屈は分析しても分からない
不自由で居心地のよい暮らしぶり

倉吉市　堀　かずこ

陽が沈むあしたが来るよがんばるぞ
人生の道は狭いが陽はそそぐ
くやしさを笑顔で隠し乗り越える
夕暮れの散歩に誘う影ぼうし

境港市　中井虎尾

戦中と戦後を生きて七十九
晩酌の量を減らして健康さ
初雪や俺の身長またちぢむ
追い越しをかけたその先パトがいた

米子市　池田美穂

酒ばかり演歌にケーキ出てこない
お土産のシャネルトイレにおしげなく
目も耳も弱くなっても威圧感
のど元を過ぎてしまったかの惨禍

米子市　黒田紀美江

妻の乱インスタントで先済ませ
人生大学右も左も高齢者
老いの坂いよいよ来たな待ってたよ
断捨離をちょっと休憩まだ長い

夜勤でもてきぱき看護感謝する
北の国世界相手にいきりたつ
冬空に雪の大山美しい
年賀状どうしたものか思案する

米子市　田村周子

泣いた日は写真の亡母も泣いていた
なつメロが純な気持ちを呼び起こす
年賀状だけが行ったり来たりする
時々は補聴器外す生きる知恵

米子市　戸田真理子

私と一緒遅れ出したな古時計
スーパームーン顔のシワシワ暴かれる
上座には今もどっしり父の影
どっしりと貫禄付けた嫁の腰

米子市　野川宣子

犬でさえ姿勢を正しお手をする
墓参り枯葉を払い手をあわす
木枯しが寂れた路地も吹いていく
二人居は一汁一菜ことたりる

米子市　見山温子

敬老会ちょっと派手めの服で行く
歳よりも若いと言われ役に就く
子が逝って金婚式はまたにする
喪中葉書に子の頑張りを書いておく

松江市　中筋弘充

声掛けてかけられて居る安堵感
ストーブの温もり眠気誘い出す
ひとり膳レシピ通りでない自由
被爆者の言葉は胸に目はうるむ

松江市　山根邦代

稀勢頑張れ日本人です綱にかけ
のめり込む世直しの句に四苦八苦
リズミカル病が癒えて本調子
欲張って景品狙いセール待つ

出雲市　黒目ひでお

師のあとを追って大きな背中知る
ふしぎだな無口どうしが笑い合う
葉を落とし素顔を競う冬木立
天国行きのナビはモザイクされている

島根県　原徳利

少子化を憂う男子は子を産めぬ
貧困を嘆いた頃の子沢山
勝手ですなどと言えない位置に居る
ど田舎で案山子に聞かす子守歌

岡山県　大杉敏夫

終活を親子三人話し合う
親孝行してるつもりが逆剥ける
向かい風迎えうつには力無い
倉敷をレディー歩きで颯爽と

玉野市　片岡富子

平凡な暮しへ愛を少しだけ
あすを見る瞳へ愛を少しだけ
なにもかも許して愛を少しだけ
エスプリを効かせて愛を少しだけ

広島県　日谷　寛

平等に育て個性はままならぬ
ほほえんでばかりの母が寂しそう
荷をあける喜ぶ孫を見て詰める
都市砂漠言い得て妙の住処なり

広島市　松尾信彦

趣味多し仲間も多し日々楽し
雑沓の主役は俺と胸を張り
機嫌良く別れたそれが永遠に
これからも時代遅れで生きてやる

尾道市　小畑宣之

ライバルが逝って空しいクラス会
白寿まで生きる予定の趣味の会
書き込めぬほど増えたね老いの予定表
すんなりと老いてはいけぬ此の乱世

宇部市　高山清子

老眼鏡何時ものように隠れんぼ
忖度はなくて私の指示でした
写真帳過去完了の花をみる
麦と芋どちらも旨い食前酒

高知県　茨木昭夫

甘酒を朝の一杯よしやるぞ
二歳半名前を呼べばハイと手を
卒寿すぎ不便で車乗りまわす
孫よろこぶうさぎの形りんごむく

福岡県　本田さくら

快晴で出たいが足がともなわず
同盟の信頼武器の売り込みも
核禁止核の傘をばはねのけて
老齢を愚痴らず一歩のその強み

唐津市　岩崎實

祝日になぜか国旗上げるくせがつき
配達のバイクに目覚め起きる朝
優しさを前面に出し進む老い
友去りていくばくとなく寂しけり

山鹿市　中山好打

この児らに夢の明日をタッチする
町おこしつなぐ笑顔の手と手と手
丁度いい今のくらしも生き方も
うぬぼれる要もないが卑下もない

山鹿市　柳田白沙

ひらめきも花火のように消える老い
妻ディナー家の守り人いわし缶
筋トレをしながら指は五七五
手はクロス腰は十五度振り唄い

沖縄県　島村つばき

札幌市　斉藤宏子

アスファルト落葉の布団着て眠る
衿立てて小走りに行く雪催い
子等も去り柱に残る傷のあと
無人駅銀河鉄道空をゆく

札幌市　富永恵子

鱗一枚みがき疲れて年の暮
闊歩する大股小股大辞林
ドンヨリの空から白い贈り物
気休めにワイングラスをかたむける

東京都　髙岡弥生

クリスマス　ママプレゼント貰ったら
コスプレのサンタを見つけ固まる子
年末も主婦の休みはありません
子もハタチ私の役目もう終わり

静岡市　渡辺芳子

何事も動きやらねば始まらぬ
ちぎり画の魅力に引かれ生きる幸
年賀状ミニダックスの背に小花
何事もありがとうだけで生きて行く

名古屋市　山本三樹夫

トランプの一言世界を二分する
切実な願い届かぬ永田町
赤子まで赤字国債背負する
一年の没句を偲び鐘をつく

江南市　脇田雅美

ピンチからチャンスに変える占い師
長生きに惚れこみ野山よく歩く
ワケありの野菜食べても味同じ
荷物棚買った土産が降って来る

豊橋市　小松くみ子

笑うたびメガネを汚すほほの肉
注目をしてほしいからカギかっこ
ほめ言葉夫の辞書に書いてない
目覚ましを止めて二度寝で夢を見る

豊橋市　高柳閑雲

コンビニを笑いとばして過疎の村
ものひとつ申せぬ近親者の葬儀
全力で取り組むなんて嘘ばかり
湯に浸かるゆっくり脱皮するために

豊橋市　藤田千休

精神力が尻を叩きにくる部活
脚色が上手く話を拵える
若作りしても座席を譲られる
秀吟がこころのドアをノックする

京都市　櫻﨑篤子

お金には縁がなかったなあ八十路
急ぐことないがあの世も満員か
疲れたと言えば次から出られない
昔からある駄菓子屋で友と逢う

暖房と法話で心地よい睡魔
着ぶくれをデパ地下の中悔いている
鳥たちがきれいに捌く留守の柿
冬の陽が施設の屋根でたじろがず

大阪府　高木道子

責任を取れぬ役人また悲し
モノ造り忘れて先がない日本
ワイセツの警察官いま何してる
親のミス繰り返す子を叱れない

大阪府　中内孚彦

何気なく二人くつろぐサンルーム
恙無く年を越せると亡父母に告ぐ
懐かしいな密柑に炬燵団らんが
五年日記完記を誓い購入す

大阪市　磯島福貴子

喧嘩してすねて見せるも好きだこそ
何をして頑張ろうとも生きがいを
脳トレとはじめて一句うかばない
リハビリで力みすぎては腰いため

大阪市　田中廣子

捨てがたい思い出があり物減らず
人生の余白を趣味に生きている
身の回り八方リスクに満ちている
散髪を済ませ鏡に別の僕

大阪市　樋口眞

顔よりも心の美人玉の輿
大相撲暴力指導直らない
除夜の鐘今年も無事と星を見る
大酒で不満を消せぬ年金者

大阪市　前川善之

急停車ながらスマホで知らんぷり
満面の笑みに隠れた悪だくみ
コンビニでトイレを借りてガムを買う
改ざんが慣れっこになるおそろしさ

大阪市　松田聰

働くと過去の努力が生きてくる
川柳に入門以来世が開け
夫婦して旅した頃がなつかしい
良い夫婦分かっていても口喧嘩

大阪市　吉田知之

力み過ぎ楽にと医者に促され
力むほど結果はいつも空回り
校長も学生服の村芝居
ほろ酔いに独り芝居の台所

堺市　梅木澄空

身の丈のささやかですが我が暮らし
平凡な人生芝居にはむかぬ
泣きながら頑張る姿いじらしい
中味だと外観無視で言い寄られ

堺市　近藤治子

三枚舌最後の舌は切手用
女房とはランチおしゃべり長電話
さっぱりわやや言うもちゃっかり儲けてる
ロボ犬を連れて散歩に出かけます

堺市　松永庄三

九条のけだかさ国のお粗末さ
川柳で元気と若さ弾む夢
天仰ぎ今日は無事かな基地の島
助成金政党ダメに拍車かけ

堺市大和峯二

満期日に電車賃にも満たぬ利子
ママ友が今や亭主の愚痴の会
一人暮し儀式のように食べる日々
セーラー服未来を描き投票所

泉大津市　助川和美

歳上で奇麗だなんて許せない
励ましの言葉はあとで効いてくる
九条が有ってこそ有る日本です
楽しいか転がる石よ苦しいか

河内長野市　穂口正子

失敗もまだのびしろのある若さ
俎板の凹みため息ためている
となかいの寒空走る愛走る
オウヤアで青春をよぶ友に溶け

河内長野市　森田旅人

アルバムに見た目疑うママがいる
ヒロインがイメージ落とすコマーシャル
食べ飽きた冬場オデンの三日間
電話口上品だったママの声

河内長野市　渡邊修

存在を忘れることの恐ろしさ
少年の日の夢今も懐に
柿食えば義姉の温情身に沁みる
進化とは人を怠惰にばかりする

豊中市　源田啓生

白い庭一寸と覗いた福寿草
喜寿の今名札を着けたクラス会
夕日受け田の草を苅る帰省かな
祖父の杖使い古しをそっと替え

羽曳野市　磯本洋一

木枯らしと連れもってくる焼いも屋
お互いに気儘老人愛と杖
行先を聞かないように新婚よ
電話聞く名が出てこない年になる

枚方市　坂本ミヨノ

日が落ちてインスタ映えの寒の月
喪中葉書だんだん親が兄弟に
自分史も黒塗りしたいところある
国会答弁種も仕掛けもありそうだ

枚方市　佐藤武紀

指編みで脳の老化を活性化
三つ編みの少女見かけぬ女学校
仲直り一晩眠り忘れてる
入口も出口も見えぬ北朝鮮

箕面市　寺井柳童

切り札を持って人生強く生き
正論を吐いて空気が尖り出し
清濁を呑んで人間丸くなる
少年のｉｆにでっかい夢がある

伊丹市　延寿庵野鶴

年賀状友も減ったが口減らず
最近はスマホ頼りの生活に
家事用事感謝してますロボットに
ちょっと聞く直ぐにスマホをピコピコと

伊丹市　平井富夫

排除する言った自分が排除され
建前は声高本音胸の奥
冗談と言っても顔に好きと出る
戌でなく猫描き送る年賀状

加西市　山端なつみ

雪がふる私の罪が白くなる
今を生く何も願わず手を合わす
言えないのきっと来てねの一言が
手をつなぐ愛じゃないわよただ介護

篠山市　岩下さゆ子

冬だなあ天気予報の雪だるま
凩も疾風も負けるビル風に
悪い風邪心の隙にしのびよる
あの背中見てこうなったしょうないか

篠山市　長谷川善輔

ボケ防止ストレス防止鶴を折る
何気ない出会いがチャンスで友となり
気の弱さ喜寿を過ぎてもそのままで
ご近所の灯りが心強い夜

篠山市　藤井美智子

古稀の坂登るヨイショの応援歌
雪しんしん温泉宿の灯が温い
笛の音が踊れ踊れと誘い出す
口笛を吹いてもやはり音痴です

三田市　九村義徳

電動車小さな旅をみつけたよ
点滴の音が聞こえる暗き部屋
百均で道具揃えた新世帯
また会おう固い握手の友訃報

三田市　馬場貴美江

喜寿がきて自分探しは止めました
すまんなあその一言で泣けてきて
我の強い出っ張り形の耳の相
ちと皮肉言ったら倍に返される

三田市　松本ゆかり

宝塚市　岸田万彩

善し悪しを問えば空しい日々となり
耳たぶに振り子ぶら下げすまし顔
鼻づまり治るならする鼻ピアス
アラ喜寿になって二兎追う余裕でき

三木市　山口久子

われ九十　七転八で良しとする
鍵掛けて買物行った母を待ち
ひ孫が九人名前おぼえられぬ
一日一笑たのしく過すデイサービス

和歌山市　(故)上野寛

仕込み唄杜氏に起こる里心
祝宴に新酒飛び散る鏡割り
いのちがけ酸素ボンベを提げて呑む
帰郷して先ず味おうて地酒呑む

和歌山市　北原昭枝

平凡な暮しの中の三が日
ご馳走になったふる里うまいめし
もやもやをすっきりさせる晴れた空
みかん剥く初春の日差しにふたりいる

和歌山市　佐藤まき

あと一段手摺り放してころげ落ち
あちこちの痛み我慢の医者ぎらい
気忙しい暮れこそ足を踏み締める
欠礼の知らせ続々老いを知る

和歌山市　鍋嶋澄子

すじ雲を刷毛であちこち書きなぐり
みかんの木風雨耐えしを祈る祖父
夫婦茶碗時にはひかる食器棚
今日やっと外泊許可を笑みはじけ

和歌山市　福島一雄

風邪で寝る昔一日今七日
ウィルスよもっと若い娘選ぶべき
目盛ある体温計は肌に合う
温かいコタツの中の初日の出

(前月分)鳥取市　橋谷静江

自分史を語ると貧乏話だけになる
寄り道をすれば機嫌の悪い夫
経験で話がつづくおばあさん
百歳を越えた葬式笑い声

(前月分)山鹿市　柳田白沙

よそ行きの顔してドアに立つ私
終活と決めたその日にショッピング
政治家と政治屋さんの区別する
為になるニュースも見たい朝いちに

(前月分)豊橋市　藤田千休

核のゴミ引く手数多の夢を見る
呆けだして何がめでたい喜寿傘寿
おめかしの妻に気付かぬ近視眼
別人の貌で出てくる化粧室

英語 de Senryu⑭

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

恋のない　人にうれしい　皿の数

a lot of dishes
such a happy time
for people with no lovers

砂ぼこり　売れない品を　裏返す

sandy wind,
shopkeeper
turns goods over

---

a lot of たくさんの　*dish* 皿、料理　*people* 人　*happy time* 楽しいひと時　*lover* 恋人
sandy wind 砂ぼこり　*shopkeeper* 店主　*turn over* ～を裏返す　*goods* 商品

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⑭　猫と俳句と自転車の人生

マルタ・ホチウオフスカ *(Marta Chocilowska. Poland)*

マルタさんは、ポーランド俳句協会の創設メンバーで、アグニエシカ梅田さん(元ワルシャワ大学教・俳句研究者)がポーランドで開催しているハイクスクール(日本の「葛」俳句ポーランド支部) のメンバーです。ポーランドの首都ワルシャワで猫と暮らし、自転車を愛する女性です。ポーランド内外の『俳句選集』に参加し、日本の俳句誌『葛』に作品を毎号投稿しています。『ポーランド季語の四季』という著書もあります。

彼女の俳句を *cherry trees and willows*『桜と柳』から引いてみましょう。作品はポーランド語、英語、そして日本語で書かれています。日本語は「葛」句会の関木瓜さんのチェックが入っていますが、英語は彼女自身の英訳です。

a peony bud/wanting to spread petals/an aroma
(牡丹の解けんとして香を放ち)

picking basil leaves--/so it must be summer then/my husband tells me
(バジリー葉摘めば夏だと云ひし夫)

a path through autumn/little footsteps behind me/wild stalking pigeon
(秋の道こつこつついてくる野鳩)

I light the wood stove/and on the birch log/two leaves yet
(暖炉燃ゆまだ葉のつきし薪をくべ)

■句集紹介

『松　風』

片岡　智恵子　著

澤井　敏治

昨年7月7日の路郎忌本社句会に、西出楓楽さんから、米寿を機に上梓された川柳句集「松風」を頂戴した。平成23年半熟のまま同人にしていただきました者として、一人で読むだけでは勿体ないと思い、四百七十三句のごく一部分だが、川柳句集を紹介させていただく。

古くから同人の方はよくご存知だろうが、智恵子さんは、昭和59年サークル檸檬に入会され川柳を始められた。昭和61年には早くも同人となられ、川柳塔社の最高峰である路郎賞を、準賞一席・本賞と二度にわたってお受けになっておられる方である。

まずは、西出楓楽相談役の序文「お祝いのことば」を通じてのご紹介。

平成4年度路郎賞準優秀作第一席から。

六十から女に生きる差が生まれ

平成13年度路郎賞から。

やかましい妻だが逝かれては困る
写経する父に手紙を書くように
人間らしい人間のいる吹きだまり
妥協するばかり自分を見失う
モノクロの名画と逢えた雨の午後

専業主婦として充実し、また幸せな日々を楽しんでおられる日日の一端。

洗濯機回して今日も風に乗る
鍋釜を光らせ訳もなく楽し
わが城にねかす糠味噌半世紀
まな板の音はわたしの自己主張
よく笑った日は夕食に手間をかけ

残念な事は、平成14年金婚を迎えられた十年後ご主人が他界された。絶唱とも言える句は胸うつものがある。

七十億のひとり夫が肺癌に
夫逝くすでに夏野になっている

サークル檸檬句会から。

忘れんぼ眼鏡が逃げる訳でなし
待たされて風邪のおまけをもろてくる

ここで、五句の鑑賞させていただいた。

写経する父に手紙を書くように

わたくしは十歳の時に父を亡くしたので「父の句」には一番こころを奪われてしまう。病床で日々格言のようなものを書き綴っていたことは記憶にある。眼裏に残るのは「写経する父」の姿である。

いい音色悪魔の笛がここちよい

路郎先生の「見渡せばユダのこころをみんな持ち」がすぐに浮かんだ。孫と「アンパンマン」を見ていると、孫には言えないが、ちょい悪の爺ちゃんは「バイキンマン」に憧れることもある。人間の本性をとらえた感性に感服。

許す気が無いのに溶けてゆく氷

長生きの秘訣は物忘れとも聞く。忖度が上手な冷蔵庫で造る「氷」は、見事に溶けてくれる。そういえば、密談を聞いている「角砂糖」も国会に呼び出されないように「わたくしはその時には溶けておりましたので、記憶にございません」と嘯くそうである。

若くいよう歳を忘れることにして

佐藤愛子さんの「90歳。なにがめでたい」や篠田桃紅さんの「一〇三歳になってわかったこと」や今は一〇一歳の高橋幸枝さんの「こころの塩加減」にも、究極の神髄は「歳を忘れることにして」につながっているように感じた。

ちぎり絵の蝶は春野を待っている

まさに歳を忘れた少女は蝶になって限りなく春の野を満喫されることでしょう。

川柳はもちろんのこと、表紙絵・挿絵など、何から何まで本当に素晴らしい句集を頂戴し、誠にありがとうございました。

誹風柳多留一二篇研究 56

細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫・石川道子
小栗清吾
清博美

469 **貴僧さまなとゝ品川はつのふみ**

細井 増上寺の坊様あてに品川から初めての手紙が来たが、まだ名前を明かしてないので「貴僧様」と宛名を書いてよこした。

法灯をかゝげ読んでる品の文　一〇六5
文つかい南好院と芝できゝ　安六智6

小栗 賛。坊主客が「貴僧」と呼ばれているのを、無知な飯盛が名前と思ったというのかと考えていたが、坊主客がメーンの商売でそんなことはないか。

貴公さまとハはつかしい届ケぶみ　一三7

清 いや〳〵小生も小栗説である。「貴僧」などは、上等の表徳に聞こえる。

470 **かれらふぜいをといたぶる下女が宿**

細井 下女の請宿は口入業（人材派遣業）であるが、身元保証人も兼ねているので、下女に何か落度があれば弁償し、逆に下女が被害にあえば、親代わりになって強硬に雇主と交渉してくれる。ここでは、店の奉公人たちが寄ってたかって下女を妊娠させてしまったので、請宿が来て「彼等風情をどうなさるおつもりですかね」と、下手に出ながら店の主人をいたぶっているところ。

ずる〳〵　べつたりにハさせぬ下女か宿　安四智6

御壱人一両ツゝと下女かやど　拾二30

小栗 賛。下手というより、嫌味たっぷり。あそバされたであの腹と下女が宿　四三17

清 賛。

471 **弐百年ほどふいんだとたけの内**

細井 武内宿祢は、垂仁・景行・成務・仲哀・応神・仁徳の六朝に仕え、三百六〇歳もの長寿を保ったという伝説上の人物で、蝦夷地の視察に神功皇后を助けて新羅征伐、香坂・忍熊二王子追討に活躍したという。その宿祢が三百歳ころに述懐して曰く、「百歳くらいまではなんとか致したが、もう二百年くらいご無沙汰しているなあ」と。

御長命百済迄も責給ひ　新三21
六朝につかへた竹ハ弓になり　五五33
百済へ御供の頃ハ二百歳　六一21

小栗 賛。「ふいん」は？「不淫」？「無音」？

清 やはり「不淫」なんでしょうネ。

472 **大門へこのしろの入るにぎやかさ**

細井 吉原には総鎮守である九郎助稲荷をはじめ、廓内には榎本いなり、開運稲荷、明石稲荷、吉徳稲荷があるが、初午と八朔に祭礼があり、大変な賑わいになる。祭礼準備に神饌の鰶（コノシロ）を持ち込むのにやんや〳〵と賑やかに大門を入って来る。

このしろの鏡にうつるにぎやかさ　五40
初午ハ角ミつこばかりさわかしい　一七23

清　賛。

473　**百旦那あらとほどなをあつらへる**

細井　貧乏なのかけちなのか、盆暮のお布施に百文くらいしか出さない百檀那は墓も粗悪な安価な石で、しかも荒砥程の小さなのを誂えるのだ。

百旦那つちへいけるがめつけもの
安五鵜3

百旦那まかり違ふと地ごく也　七12

小栗　賛。荒砥石の見立ては確かにオカシイ。

清　賛。いささか小さすぎると思うが。

474　**仁ンのある人はりかたを作り出し**

細井　独り身のご婦人はさぞお淋しかろうと、張形を発明した人は余程思いやりのある御仁だ。

器物にてうへをたすかる長つほね　一〇22

小栗　賛。張形の発明に「仁のある人」というもっともらしい言葉をつかったところがオカシイ。

清　賛。

475　**ゑんの下タのぞひて廻る樽ひろひ**

細井　酒屋の小僧はご用聞きに来た序でに、空樽や空の徳利が放り込んでありはしないかと縁の下を覗き廻る。

椽の下覗くハ御用邪推なり　傍四10

清　賛。

476　**せつなさに年シとり炭をなげ出し**

細井　元禄十五年(一七〇二)十二月十四日、赤穂浪士に邸内へ踏み込まれ、炭小屋に隠れていた吉良上野介は終に見つけられてしまい、どうしようもなく、必死になって新年用の年取り炭も投げて抵抗したであろう。

物置キてあやの小袖をたつね出し
天元梅2

炭のみか浅漬なども取てなげ　九五6

小栗　句意はその通りとおもうが、「せつなさに」は落着かぬ言葉遣いだ。

清　賛。

477　**此村の名ィ医で箱をかつかせる**

細井　この村のお医者は迎えに来た使いに序でだからと薬箱をかつがせる。急病なのだろう。一刻を争うのだ。

薬箱素人の持ツはきう病気　一二9
田舎医者急病馬で駈ケ付る　一六七10
田舎いしや小にだおつ立〳〵来　安三桜3

伊吹　江戸ならあたりまえのことだが、村の名医だから供の者に薬箱をかつがせるのだろうか?

小栗　よくわからず。伊吹兄のおっしゃるのは、田舎の医者は、原則として自分で薬箱を持っていくとの意なりや?それなら句として成り立ちそうな気がする。

清　田舎の医者であるが故に、弟子もいなければ下僕も居ない。そこで呼びに来た者が道具箱をかついで案内することになる、というのだろうか?

478　**蓮池院つれて助兵衛茶やへ来る**

伊吹　そひたらぬ院号の顔美しき　天二智1
という句があるから、後家は院号で呼ばれたようだ。蓮池とあるので、不忍池の蓮の茶屋へ後家を連れた好色漢がやってくる。

山田　賛。蓮池院、助兵衛、茶屋、いずれも「暗示語」で、それを連ねての句作。

清　賛。

愛染帖

新家 完司 選

（投句278名）

完璧でブレがないから訝しい

（評）完璧な思想も法律も有り得ないのと同じように人の為すことに完璧はない。にも拘わらず傲然たる態度は、どこか胡散臭い。

河内長野市　原熊知津子

古椅子がギイギイと泣くキムチ鍋

（評）アツアツ&ヒリヒリのキムチ鍋をフウフウ。冷えた身体も古い椅子もギイギイ。オノマトペが飛び交う愉快なひととき。

鳥取市　上山　一平

ハンガーの服にはちゃんとあるくびれ

（評）服には「ちゃんとある」のだが我が身体からはいつの間にか失せてしまったくびれ。これからは凹凸のない仕立てにするか…。

奈良市　大久保眞澄

万歩計忘れ大損した気分

（評）歩数を日記に記録しているのか。距離に換算して地球一周などに表示する歩数計なのか。一歩も稼げない散歩など大損！

箕面市　中山　春代

一匹になった金魚が泡を吐く

（評）なんだか寂しくなったなあ～、食事をくれるのはありがたいけど、ともだちがほしいなあ～、と呟いているのかもしれない。

弘前市　福士　慕情

神様はきっとギャンブル依存症

（評）一か八か、吉か凶か、どう転ぶのか予想もつかない此の世。人智を超えた大いなるものが遥か彼方でニヤニヤ楽しんでいる。

橿原市　居谷真理子

勝ち組の方へ合わせる周波数

（評）負け組の残党として隅っこにいるのも癪。だが、いきなり摺り寄るのも軽薄。少しずつ目立たないように同調してゆくべし。

三原市　鴨田　昭紀

まやかしが輝く美しい街だ

（評）宵闇がせまると商店のネオンがキラキラ。街路樹のＬＥＤがピカピカ。だが、新鮮な朝の光が「まやかしだ」と暴露している。

富田林市　中村　恵

父さんのお茶碗だけがよく割れる

（評）腹立てて投げつけているわけでもなく邪険に扱っている覚えもないのによく割れる。亭主の茶碗だけ百均の安物ではないのか。

神戸市　田中　章子

終活はやめた恋人募集する

（評）遺書を書く。形見分けの仕分けをする。

神戸市　細川　花門

不用品を処分する等々、気が滅入ることより恋人ごっこして愉快に過ごそうではないか。

鳥取市　大前　安子

途中からハミングになる子守唄

奈良県　安福　和夫

謎かけて指図する妻憎たらし

岡山県　山縣のぶ子

冷蔵庫おまえいつから開いていた

松江市　椙瀬みちを

体力チェックよせばいいのにムキになる

八尾市　高杉　千歩

老人ホーム　ラジオ体操バラバラに

鳥取市　岸本　宏章

年末に初めて知った流行語

玉野市　片岡　富子

新商品とりあえず買い食べてみる

尼崎市　市坪　武臣

男には出来ない長い立ち話

芦屋市　黒田　能子

言い残す言葉そのうち考える

東かがわ市　川﨑ひかり

逝く日さえ解れば貯金使い切る

三田市　北野　哲男

その内に死ねなくなるか医の進歩

寝屋川市　籠島　恵子

友達が逝ってしまった水たまり

伊丹市　延寿庵野鶴

国宝の染みは昔を語らない

大阪市　江島谷勝弘
雑に生き書いたことない日記帳
鳥取市　山野すみれ
穴のある暮らしでいつも救われる
枚方市　谷　英也
地球にももっと優しくしてあげて
三田市　久保田千代
憧れた方の隣で委縮する
豊橋市　藤田　千休
ご破算で願いましては離婚印
黒石市　北山まみどり
ちゃんこ鍋闇鍋よりも深いなあ
円満にところどころで空気抜く
大阪市　高杉　力
コンビニのおかげで今日も生きている
血圧と歩数を記録する日記
羽曳野市　宇都宮ちづる
ひとつだけ失くす手袋イヤリング
並んでるタクシー恐いワンメーター
大阪市　樋口　眞
率直な友の批評は良い薬
引用が多くて見えぬ真の君
鳥取市　前田　楓花
才能は無くても努力しています
犬の服たくさんあるが着られない
横浜市　菊地　政勝
上品なくしゃみとならぬ花粉症
酩酊が大きな靴を履いてくる

河内長野市　穂口　正子
口笛を吹くとすっかりお婆さん
宇部市　平田　実男
争いの種はいつでも妻が撒く
尼崎市　永田　紀恵
唇に触れもせず来て友以上
奈良市　米田　恭昌
賀状減りクスリと皺は増えてくる
和歌山市　楠見　章子
着膨れてファッション雑誌遠くする
池田市　上山　堅坊
玄関のドアのメモまで見忘れる
パリ協定協力しろよトランプ氏
貝塚市　石田ひろ子
歳末も静かな街の高齢化
使い勝手いい百均のカレンダー
弘前市　高瀬　霜石
人妻になったらハグをしてくれる
取れそうな気がするだけの万馬券
大阪市　古今堂蕉子
忘れぬ内に書いた葉書を出し忘れ
満月や言うてるベランダの煙草
府中市　岸田　武
いたわしやクラブのママが難聴に
ロボットの奴は呼吸も乱さない
松山市　郷田　みや
正直な鏡に文句言っている
溜めるだけ溜めたポイント期間切れ

三原市　笹重　耕三
窓のない部屋も地下室などもない
加西市　山端なつみ
来年からずっと猫年ずっと古稀
大阪市　藤田　武人
キャッチャーの囁き打者を惑わせる
米子市　後藤美恵子
一つ一つ庭の柿拭き子に送る
岡山市　丹下　凱夫
蓬髪に亀虫がよく来て困る
大阪市　平井美智子
空っぽの犬の小屋にも注連飾り
カニカマボコの味になじんでいる平和
河内長野市　中島　一彌
寝言から鶯鳴の仲拗れだす
木枯らしが吹くと喪中の報せ来る
鳥取県　斉尾くにこ
スマホの目上目遣いに睨まれる
六人が家族であったころの箸
三田市　堀　正和
雀卓を囲む四人で三百歳
安いわけ三日使ってから気付く
大阪市　栃尾　奏子
平成は女をアマゾネスにした
男なら泣くなと昭和叫んでる
豊中市　藤井　則彦
うっかりと新札入れたお香典
せっかちをテストしている閉ボタン

人はみな簡単そうに句を作る　鳥取市　倉益　一瑤
柳友は柳仇だから老いに喝　大阪市　田浦　實
四苦八苦やっと生まれた句にほっと　堺　市　近藤　治子
おっちゃんの句碑は触ってほしそうだ　沖縄県　森山　文切
三田市は兵庫県ですあしからず　三田市　上田ひとみ
さあ起きよと言わんばかりに直下型　熊本市　杉野　羅天
触れてみてやっと造花と知りました　桜井市　安土　理恵
婦人科と小児科以外みな馴染み　藤井寺市　鈴木いさお
早トチリちゃうちゃう旬の冬桜　尼崎市　清水久美子
太鼓橋渡って神に縋り付く　大阪市　坂　裕之
もう二、三年はいけると思います　大阪市　谷口　義
老妻は惣菜パック並べ立て　鳥取市　池澤　大鯰
メリーウィドウ　カリブ海行く一人旅　奈良市　阿部　紀子
大人にはなれずガキンチョのままだ　松江市　石橋　芳山

雪解けという美しい文字がある　佐賀県　真島久美子
滑稽な文字が伝えるお人柄　青森県　松山　芳生
心にはピンクに染まる余地がある　岡山県　田中　恵
頭髪は白いがコーヒーブラックだ　姫路市　古川　奮水
寸胴の私によく似合う和服　豊中市　木藤こみつ
朝と昼別々の服着る秋だ　米子市　成田　雨奇
ウエストに合わせば袖が長すぎる　倉吉市　岡崎美知江
着膨れて着膨れに会う診療所　豊中市　水野　黒兎
人生のお手柄老衰死らしい　堺　市　矢倉　五月
火の魂を持ってスキップ宙がえり　河内長野市　森田　旅人
飛行機も夫婦一緒で恐くない　奈良県　渡辺　富子
コンクリートの切れ目切れ目に生える草　豊橋市　高柳　閑雲
庭帚持つと元気が湧いてくる　和歌山市　古久保和子
野良着着るやる気抱いての幕あける　岩出市　村中　悦男

枯れ木でもまだまだ元気二重跳び　三田市　村田　博
実っても頭を下げず見苦しい　寝屋川市　冨山ルイ子
無人駅無人ハンドル無人レジ　明石市　糀谷　和郎
単線のワンマンカーの客になる　大阪市　森　廣子
やっと得た椅子が生み出す気の驕り　枚方市　佐藤　武紀
老眼鏡ホントのことが見えてくる　河内長野市　山岡富美子
6桁以上使うことなし計算機　京都市　都倉　求芽
脳以外数値OK健康度　生駒市　飛永ふりこ
わくわくの釣糸見抜く魚の知恵　橋本市　石田　隆彦
サングラス裕次郎には敵わない　八王子市　川名　洋子
女人高野観音様は超美人　大阪市　平賀　国和
ボーナスが出たら買おうと言った頃　松山市　柳田かおる
祭日に日の丸という踏み絵あり　唐津市　坂本　蜂朗
どう見ても窮屈そうだ骨壺は　岡山市　永見　心咲

鳥取市　永原　昌鼓
モーツァルト聴いてスッポン味を増す
奈良県　長谷川崇明
聞き役になるも幸せフグの鍋
東大阪市　北村　賢子
一大事カニ解禁の誕生日
弘前市　髙森　一呑
腹一杯でも上トロだけは別
堺　市　坂上　淳司
鮒鮨が美味いやなんてどんな舌
豊橋市　小松くみ子
忘年会ウコン飲みさあ出かけよう
松原市　森松まつお
貴乃花サカナに友も熱い酒
江南市　脇田　雅美
酒の友いわしフライで酔いまわる
弘前市　稲見　則彦
もう一本あと一本の凌ぎあい
鳥取市　岸本　孝子
車座の仲間の酒はすぐ酔える
鳥取県　竹信　照彦
飲み仲間歳のわりには怪気炎
富田林市　山野　寿之
七人の敵も仲間の縄のれん
松江市　中筋　弘充
人間が好きだから行く縄のれん
河内長野市　藤塚　克三
顔つなぎ親しくなるはやはり酒

神戸市　山口　光久
酒飲みの強い味方のインシュリン
札幌市　三浦　強一
熱燗と湯豆腐で見る寒の月
大洲市　中居　善信
焼酎は気付け薬と思ってる
河内長野市　辻村　ヒロ
言いすぎたごめんね言えずビール注ぐ
羽曳野市　吉村久仁雄
一杯だけと誘って今日も終電車
倉吉市　大羽　雄大
口癖の飲めば出てくる旅プラン
河内長野市　谷　久美子
酒に酔い風呂でのぼせた旅の宿
松山市　栗田　忠士
ネオン街の朝を狙っているカラス
堺　市　澤井　敏治
カラスは不滅ヒト科がゴミを出す限り
箕面市　広島　巴子
友とお茶煩悩大分減りました
高槻市　松岡　篤
ふるさとの空き家を介護する時代
鳥取市　奥田　由美
CMの声に酔うから大人買い
八尾市　前田　紀雄
神様も此の世の矛盾解きにくい
沖縄県　禱　モモト
医者いわく無くて七病七癖と

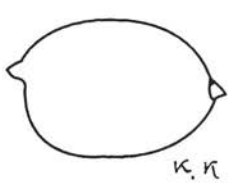
神戸市　近藤　勝正
絵本見るようだ一輛雪の中
山口市　青木　隆子
話下手受話器を置けば悔い残り
京都市　清水　英旺
女房は偉いへそくりしてるらし
倉吉市　田中けいこ
おばちゃんになったら出来る「遠慮なし」
枚方市　海老池　洋
野良子猫に餌を与えて叱られる
防府市　坂本　加代
ロボットが増えてニンゲン減ってきた
鳥取市　谷口回春子
少しずつ記憶したこと露と消え
紀の川市　楠原　富香
宝くじ買わず若しもを語り合う
川西市　山口　不動
平成の天皇の背の鎮魂歌
大阪市　榎本日の出
口げんか楽しくしよう呆け防止
鳥取市　田中　天翔
大変だこれから恥を晒すのだ
堺　市　羽田野洋介
歳重ね名残りつきないクラス会
大阪府　畑中　節子
鍵はずしすっかり円くなった父

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　368名）



「一大事」　山口光久選

一大事私のうちがわからない　三田市　尾﨑　一子
もしボタン押せば無くなります地球　大阪市　栃尾　奏子
心まで魔女になったら一大事　鳥取市　大前　安子
白い粉の魔性におんな取りつかれ　唐津市　山口　高明
戦争になれば一大事を越える　鳥取市　夏目　一粋
式場も予約したよと連れて来る　和歌山市　楠見　章子
一大事夫の顔が浮かばない　大阪市　内田志津子
救急車来れば近所の窓が開く　白河市　鈴木たけし
一大事と言わねばあなた来てくれぬ　雲南市　菅田かつ子
どうしようパトカーが後ついて来る　松江市　中筋　弘充
舞台の孫社会の窓が開いたまま　堺　市　村上　玄也
一大事僕も断捨離されそうだ　八幡市　今井万紗子
日本海幸の宝庫に木の葉船　八尾市　山根　妙子
欠けたのは月と平和という自覚　佐賀県　真島久美子
Jアラート防空壕が間に合わぬ　松山市　栗田　忠士

「一大事」　斉尾くにこ選

何も無いエリモの上空ミサイルが　鳥取県　児玉　規雄
一大事と騒いで見せるワイドショー　川西市　大坪　一徳
猪見て撤退すると言う案山子　松江市　中筋　弘充
免許証忘れた事に気がついた　三田市　北野　哲男
一大事また再稼働するという　枚方市　寺川　弘一
相撲界とっさに隠すビール瓶　豊中市　水野　黒兎
家中の空気が重い母が病む　尼崎市　藤田　雪菜
報連相可愛い部下の「タイヘンだ」　河内長野市　梶原　弘光
廃舟と死者流れ着く日本海　大阪市　森　廣子
知らぬ間にオスプレイ来る我が町に　岩国市　上村　夢香
愛してる金婚式に言う亭主　泉大津市　助川　和美
何がなんだか国技の一大事　岡山市　丹下　凱夫
次なのに祝辞のメモが見当たらぬ　明石市　糀谷　和郎
ノーマルのタイヤのままで雪積もる　鳥取市　奥田　由美
預かった孫が転んだママの留守　大阪市　髙杉　力

免許証忘れた事に気がついた　三田市　北野　哲男
忘却の森に舞い込んだわたし　富田林市　関　よしみ
帳尻が合わずご破算くり返し　桜井市　安土　理恵
私に内緒で出来る顔の皺　岡山県　田中　恵
事故で渋滞動かない帰れない　熊本市　杉野　羅天
突然のリストラローンのしかかる　奈良市　米田　恭昌
天災に人災プラス北の核　大阪市　若本　安代
景勝地トイレはどこか見つからぬ　羽曳野市　吉村久仁雄
風向きが変わるわが家の一大事　寝屋川市　籠島　恵子
蟻地獄アッと言う間の一大事　高槻市　富田　美義
神前の誓いに嘘が潜んでる　紀の川市　楠原　富香
三食の白いご飯が駄目らしい　大阪市　榎本日の出
へそくりが妻の視線に怯えてる　豊橋市　藤田　千休
一面が三面記事のごとき今　大阪府　神野千恵子
ＡＩと二人暮らしになりました　犬山市　金子美千代
よちよちばたん家中駆け寄る一大事　神戸市　上田　和宏
へそくった諭吉を連れて妻の乱　高槻市　杉本　義昭
飛び乗った汽車逆方向へ走り出す　岡山県　山縣のぶ子
引き落し出来ないからと通知くる　弘前市　稲見　則彦
毎日がこの世に生きる一大事　鳥取市　土橋　螢
生命線日毎にうすくなってきた　大阪府　米澤　俶子
遺言書お棺の中に入れちゃった　神戸市　細川　花門
一大事だけどこの世で済む話　高槻市　片山かずお

うっかりな口が招いた一大事　出雲市　伊藤　玲子
結婚はせぬとカミングアウトの子　箕面市　出口セツ子
一大事ママが居るから大丈夫　神戸市　能勢　利子
夫の急死これ以上ない一大事　米子市　後藤美恵子
一大事メールができた返事来た　泉大津市　磯野不二夫
全ボツも天賞もみな一大事　米子市　成田　雨奇
東京に雪が降ったら一大事　鳥取市　岸本　宏章
平成の残す時間に加速つく　神戸市　玄番美恵子
遠ざけていた乳腺科手招きす　鳥取県　門村　幸子
電車のドアに杖が挟まり走り出す　奈良市　阿部　紀子
ＡＩはいつか反旗をひるがえす　尾道市　大本　和子
要るデータ消してしまった初仕事　高槻市　松岡　篤
我が家から賞状もらう人が出た　大阪市　坂　裕之
どうしようヘップバーンが会いに来る　池田市　上山　堅坊
突然のリストラローンのしかかる　奈良市　米田　恭昌
不審火にローンの済まぬ家焼かれ　唐津市　山口　高明
原発へミサイル落ちてくるもしも　枚方市　海老池　洋
葬式の後で分かった負債額　可児市　板山まみ子
化粧品切れる女の一大事　寝屋川市　籠島　恵子
なくなるの理想の家庭サザエさん　松江市　榊瀬みちを
木造の船で日本に攻めて来る　大阪市　近藤　正
世界一周キャンセルさせた破産劇　神戸市　冨永　恭子
国技にも有った確執暴露され　三田市　多田　雅尚

国難と言われていても手が打てぬ　横浜市　菊地　政勝
電話の声に母さんがふるえてる　西宮市　緒方美津子
ＡＩはいつか反旗をひるがえす　尾道市　大本　和子
弁当を二つ作っている娘　大阪市　田中ゆみ子
まばたきをする間にミサイルが届く　倉吉市　牧野　芳光
十二月妻と金庫が消えている　加古川市　吉村めぐみ
原発へミサイル落ちてくるもしも　枚方市　海老池　洋
へそくりを人に聞けない隠し場所　和歌山市　定松　宏枝
社の秘密握る男の定年日　橿原市　居谷真理子
癌告知相手に不足ないけれど　大阪市　川端　一歩
官と民ずれた視線の一大事　鳥取市　加藤　茶人
還暦まで歳は覚えていたのだが　寝屋川市　伊達　郁夫
慣れっこになってはならぬ一大事　鳥取市　谷口回春子
近道を選んで向かい風に逢う　三原市　笹重　耕三
一大事の時まで休ませてあげる　藤井寺市　太田扶美代
よく肥えていますよこれがガンですよ　堺市　大和　峯二
娘の下宿男パジャマが風に揺れ　堺市　加島　由一
ある日夫がどなたさんかと聞いてきた　鳥取市　倉益　一瑤
一大事面接官がロボットだ　高槻市　島田千鶴子

秀　句

一大事国の借金核のゴミ　さいたま市　星野　育子
核ボタン押すかも知れぬのが二人　南あわじ市　萩原　狸月
一大事など望んでいない非常口　大阪市　升成　好

女房が僕のスマホをいじってる　堺市　村上　玄也
農を継ぐ新嫁迎え一安堵　唐津市　岩崎　實
事故で渋滞動かない帰れない　熊本市　杉野　羅天
突然に逆走車来た高速路　奈良県　谷川　憲
一夜にて複数犯の鹿の跡　池田市　太田　省三
年金を減らして九千億兵機　三田市　上垣キヨミ
もしボタン押せば無くなります地球　大阪市　栃尾　奏子
がらんどう真っくら闇の家ン中　奈良市　山本　昌代
被災してライフラインがみな止まる　堺市　遠山　唯教
忘却の森に迷い込んだわたし　富田林市　関　よしみ
減量が上手くいかない渡り鳥　大阪市　平井美智子
脱走をしたか冷蔵庫のプリン　佐賀県　真島久美子
誤って打ったラインにすぐ既読　堺市　矢倉　五月
キャッシュレス進んでパンも買えません　松江市　石橋　芳山
今になり亡夫の気持ち気がついた　奈良市　髙橋　敬子
長廊下彦左衛門が駆け抜ける　岡山市　永見　心咲
社の秘密握る男の定年日　橿原市　居谷真理子
母は逝き九つ上の父残す　大阪市　小野　雅美
ふうもんの天皇崩御されました　鳥取市　田中　天翔

秀　句

ヒロシマの生き証人が減っていく　河内長野市　中島　一彌
ＣＴの白の部分が紛争地　土佐清水市　辻内　次根
友達のふりしたユダに気付かない　西予市　黒田　茂代

86 新子語録（2）

12月号では、平井美智子編集「時実新子の川柳と慟哭」から「新子語録」を取り上げましたが、今回はその続きです。

平凡な市井の人たちの川柳が、その境遇ゆえに平凡でつまらないということは決してありません。主流はそういった人たちなのです。

（1995年　新子流川柳入門）

売れっ子の芸能人やスポーツ選手の暮らしぶりは華やかに見えますが、人知れぬ悩みはあり、寝るときは一人です。市井の人たちの暮らしは平凡に見えますが、それぞれが「自分」というドラマの主人公であり、その主人公の考え方や台詞の違いから面白い川柳が生まれてきます。

一句の中で具象はとても大切である。

（1996年　川柳大学）

知恵だけで絞りだした句には、この「具象」が現れにくいものです。経験や実感を元に生まれた句には「現場でしか知り得ない事実」があり、それが作品の力になります。ただ単に「果物」よりも「林檎」や「蜜柑」が具体的です。

現代川柳のユーモアの基本は「自分を笑うこと」。

（1996年　川柳大学）

ユーモア句にもいろいろの味がありますが、自嘲の句は、「ああ、私も一緒！」という共感を呼びます。自嘲のネタは無限にありますが、心に余裕がないと掴むことができません。

私たちの書く川柳もどこかで誰かを癒すことができるといいですね。

（1997年　川柳大学）

しみじみさせられた句、ホロリとした句などを作者名と共に記録しておくことをお勧めします。後日、読み返すたびに癒してくれるでしょう。この記録はあなただけの宝物です。あなたの作品もいずれは誰かの宝物になります。

発想は虫の目から。アンテナ張って、まわりをじっくり眺めてみよう。

（1998年　川柳大学）

「虫の目から」とは、些細な事も見逃さないということでしょう。人間関係で「重箱の隅をつつく言動」は嫌われますが、川柳のネタは暮らしの隅っこに隠れているものです。

文芸は答えの出ないもの。死ぬまで追っかけるもの。

（2004年　川柳大学）

文芸にも芸術にもパーフェクトとか到達点はありません。もしも、そのようなものがあれば誰もその後に続かないでしょう。模範解答がないからこそ面白くて追い続けられます。

心を時々旅に出してやってください。

（2013年　新子の川柳ライブ塾）

動き回れる範囲は限られていますが、心は自由に翔び立てます。翔び難いときは読書や映画などが手助けしてくれます。

新葉館出版・ベストコレクション・シリーズ「時実新子の川柳と慟哭」。新書版・98頁。千二百円＋税。

「鬼」

（投句　２４４名）

栗田忠士選

伝承のいずこの鬼もユーモラス　大阪市　樋口　眞
親知らずだろうか鬼の牙四つ　大阪市　古今堂蕉子
鬼も笑う予定びっしり新手帳　河内長野市　穂口　正子
鬼ごっこいつまで続く土俵の輪　八尾市　山根　妙子
柩には入れてね鬼に配る飴　橿原市　居谷真理子
慈善家の裏に隠れた鬼の顔　篠山市　酒井　健二
怖い世になったものだと鬼も言う　川西市　大坪　一徳
豆撒いて逃げる鬼なら知れたもの　大洲市　中居　善信
孫抱いて威厳を崩す鬼瓦　三田市　上垣キヨミ
玄関で能面の鬼お出迎え　米子市　後藤　宏之
わくわくの隙間へ鬼が忍びこむ　紀の川市　宇野　幹子
心中の鬼を宥めている介護　富田林市　中村　惠
一人居の節分鬼もおいでやす　堺　市　坂上　淳司
鬼さんもどうぞお入り今日は鍋　西宮市　緒方美津子
人間に戻ろう鬼の面捨てて　和歌山市　福井　菜摘
豪快な笑いの奥に潜む鬼　横浜市　川島　良子
鳩尾の底にまだ棲む鬼海星（ひとで）　弘前市　髙瀬　霜石
泣き虫の鬼はあんずの味がする　岡山市　永見　心咲
長老の鬼は笑顔を絶やさない　岡山市　丹下　凱夫
パソコンの中にも鬼が潜んでる　豊中市　松尾美智代
身の内の鬼が顔出す遺産分け　奈良県　渡辺　富子
鬼は外なんて言えない僕が鬼　池田市　奥園　敏昭
人間て怖いこわいと逃げる鬼　香芝市　大内　朝子
いい人と言われ使えぬ鬼の面　札幌市　三浦　強一
本当に怖い鬼なら薄笑い　奈良県　安福　和夫
本当の鬼が手招きする笑顔　大洲市　花岡　順子
要注意笑顔の似合う鬼もいる　奈良市　大久保眞澄
他人のミスを陰でよろこぶ鬼が棲む　堺　市　遠山　唯敦
淋しげな鬼の背母の喪が明ける　三原市　笹重　耕三
ロボットに仕事の鬼も外される　犬山市　関本かつ子
本当の鬼はワタシの中にいる　大阪府　米澤　俶子
あの椅子に座ると鬼になるらしい　横浜市　菊地　政勝

佳　句

弱み見せたら強く出る鬼である　堺　市　村上　玄也
心根のやさしい鬼が風呂で泣く　和歌山市　武本　碧
二十五時鬼のひとりの泣く時間　土佐清水市　辻内　次根
天邪鬼赤子の笑みにほぐされる　男鹿市　伊藤のぶよし
いい人に隠れ上手な鬼が棲む　河内長野市　原熊知津子

人

胸に棲む鬼は誰にも見せぬまま　上尾市　中村　伸子

地

弱点はわたしの中の鬼である　堺　市　大和　峯二

天

仕事の鬼でした惜しい人でした　八王子市　川名　洋子

軸

逃げてきた鬼が寄り添う吹きだまり

「格　別」

（投句　220名）

藤井寿代選

格別な日ですあなたの生まれた日　東大阪市　北村　賢子
シェフさえも母の肉ジャガ格別と　大阪市　奥村　五月
格別な美人でないがいい笑顔　大阪府　米澤　俶子
服はエルメス　カバンはグッチ　ただの人　大阪市　古今堂蕉子
とって置きのその日の為に買うワイン　大阪市　森　廣子
冬空の主役はやはりオリオン座　河内長野市　中島　一彌
記念日にワイングラスを踊らせる　富田林市　山野　寿之
だとしてもアイドルだって恋もする　堺市　内藤　憲彦
お茶漬けが格別うまい旅帰り　和歌山市　土屋起世子
格別な席で神経すり切れる　奈良市　山本　昌代
横綱に特に厳しい心技体　札幌市　三浦　強一
格別の配慮しますとリストラに　橋本市　石田　隆彦
格別なドアが開いてみる未来　和歌山市　北原　昭枝
金婚の酒に浮んだ走馬灯　宝塚市　岸田　万彩
七冠は格別すぎる囲碁将棋　松原市　森松まつお
取れ立ての河豚カニ牡蠣を出す宿屋　尼崎市　清水久美子
夫の逝った師走の寒さ格別だ　米子市　後藤美恵子
破格セールやっと蚕に包まれる　羽曳野市　徳山みつこ
手術あと夫がくれたキスの味　横浜市　川島　良子
いぶりがっこ　とりわけうまい母の味　岡山市　永見　心咲
格別なことは望まぬ拉致家族　松江市　中筋　弘充

幻の酒は喉越しから違う　弘前市　福士　慕情
今日だけはA5ランクの和牛肉　松江市　石橋　芳山
頂天の椅子特別な風が吹く　紀の川市　宇野　幹子
浜名湖のうなぎと特に申し添え　高槻市　原　洋志
その度に赤い花びら舞っている　佐賀県　真島久美子
タグ付けば小さい蟹も格別だ　米子市　池田　美穂
ここで見るサクラ格別カナダ旅　高槻市　富田　保子
生みたての夢が燦々陽にあたる　青森県　松山　芳生
どんぐりの中のひとつが光ってる　吹田市　須磨　活恵
よく見える位置スズランの椅子を置く　富田林市　関　よしみ
格別に北斎の青人を呑み　伊丹市　延寿庵野鶴
フィニッシュへ格別力溜めておく　和歌山市　上田　紀子

佳　句

毎日がクライマックスです　ハハハ　弘前市　髙瀬　霜石
いつ見てもどこから見ても富士山だ　奈良市　大久保眞澄
格別だ山頂で食うカップ麺　笠岡市　藤井　智史
「十二月八日」という日考える　岡山市　丹下　凱夫
最高の晴れならヤハリ日本晴れ　男鹿市　伊藤のぶよし

人

シャンシャンは格の高さをまだ知らず　橿原市　居谷真理子

地

アナハイムの空に輝け二刀流　西宮市　緒方美津子

天

アイキャンがノーベル賞で光り出す　奈良県　渡辺　富子

軸

木洩れ日の下のくちづけ忘れない

初心者教室

題―短い

居谷　真理子

【短夜】みじかよ　夏を示す季語
【短日】たんじつ　冬を示す季語
【日短】ひみじか　冬を示す季語

右はどれも今回の投句にあった言葉です。川柳は季語を使っても使わなくてもかまいません。季語と意識せずに使っている場合も多いようです。しかし一語で大きな力を持つのが季語。正しく効果的に使えば、句の世界が広がります。たまに季語の力にひきずられて俳句もどきの川柳になったりもしますが。

また、「短か夜」「短かめ」等、慣用的に送りがなに「か」を入れる場合もありますが、当欄では「短」は「みじか」で統一しました。

（原は原句　参は参考句）

原 短日のせかせかさせる歳の暮れ　雄　大

「短日」も「年の暮れ」も冬の季語。重なりましたがこの場合は許されそうです。

参 短日でなおその上に年の暮れ

原 植木切る短かすぎるか花咲かぬ　ミヨノ

参 気前よく剪定をして花咲かず

原 来賓の祝辞喝采五七五　敏　昭

祝辞の短さを詠んだ句は多数あり。敏昭さんは五七五と具体的になさいました。

参 五七五の祝辞が受けたご来賓

原 我が財布心地悪いかショートステイ　勝　正

参 我が財布にショートステイの論吉様

原 平成がもう終るのか何もせず　まさる

参 何もせぬまま平成が終わりそう

原 一年が短かく思う八十路　紀美恵

「はちじゅうじ」と読めば下五におさまりますが「やそじ」と読むのが順当でしょう。

参 一年の短さ思うのも八十路

原 生命線短い私幾つまで　隆　子

参 生命線短いままに生きている

原 短くて父子の電話事足りる　みちを

参 父と子の電話短く事足りる

原 短かくも短かくもなしわが生命　一　平

力が入りすぎたようです。

参 短いが短いこともない命

原 短いが師の教えには深い意味　(田)廣　子

参 短さの中に深さがある教え

原 気がつけば子育て期間短くて　(高)弥　生

原 三年間あっという間に受験生　(高)弥　生

二句を一句にしました。

参 気がつけばあっという間に子は育ち

原 了解とのみ夫のメール短かすぎ　旅　人

参 了解とだけのメールが夫から

原 気短かは弁解にまた腹が立つ　なつみ

参 弁解がまた気短を怒らせる

原 裾上げて足の短さ身にしみる　のぞみ

同感！

参 裾上げて足の短さ思い知る

原 隠すなら履くな短いスカートは　孚　彦

お気持ちは分かりますが、ユーモアをまじえて

参 隠すからミニスカートが気にかかる

原 仮の世の短い命日々生きる　夢　香

余韻を残したい句

参 仮の世の短い命だとしても

原 木枯しに会って短い秋終わる　和　之

参 木枯しに追われ短い秋終わる

原 絵手紙の短い言葉生きている　治　子

参 絵手紙に添えたひと言生きている
原 わたくしの本音短くはいいいえ (大)安 子
参 わたくしの本音はハイとイイエだけ
原 短足と言われる筋は君にない 三樹夫
参 短足と君に言われる筋はない
原 短調で皆と歌へる九十祖母 久 子
参 短調でみんなと歌うおばあちゃん
原 祝宴の短いスピーチ宴なごむ 開 子
参 短くて宴がなごむその話術
原 背も低く足短いが気は長い 一 雄
参 短足でございますけど気が長い
原 短めの返事に顔を出す本音 真
参 一言の返事にやっと出た本音
原 短髪にしたら一気に風邪ひいた 美 穂
参 短髪にした頭から風邪をひく
原 人生が短かすぎます大宇宙 由紀子
参 人生の時間を思う大宇宙
原 短詩だが川柳詠みが生き甲斐だ ひでお
こう言い切れるひでおさんの素晴しさ
参 川柳の十七音を生き甲斐に
原 一言が短すぎては誤解する (見)温 子
参 一言のその短さが誤解生む
原 孫娘からの短いメールに愛こもる 整
八八五になり、かなり苦しい
参 孫からのショートメールに愛こもる
原 気短かな夫釣り糸垂れて小半日 (東)美智子
この句も五七五に整えましょう
参 気短が釣り糸垂れて小半日
原 挨拶は忖度し短くって良い 清 司
参 忖度し短く済ますご挨拶
原 耳遠しされど短気な前頭葉 (高)道 子
ちょっと凝りすぎたような
参 耳遠くなって短気になりました
原 傾聴の短い一時共に生き 宏 子
参 傾聴のひとときだけど共に生き
原 冬だから短い晴れ間日向ぼこ 恵 子
参 冬晴れのわずかをもらう日向ぼこ
原 髪切ると失恋したの皆が聞く 美枝子
実体験ですか？少し脚色しました。
参 髪切ると失恋したという噂
原 短日や貯めておきたい日のひかり こずえ
冬ですので欲しいのはやはり暖かさ
参 短日や溜めておきたい陽の温み
原 心から楽しむ日帰りバス旅行 (畑)節 子
参 いい旅行日帰りだからバスだから
原 ありがたし惜しし一日アッと過ぎ (門)幸 子
参 過ぎるのが惜しい一日アッと過ぎ
原 短夜なり三合の酒ちびちびと 洋 一
冒頭に書きましたが「短夜」は夏の季語。
川柳もやはり季節にあった句を詠まれる方が
共感を得やすいです。
参 暮早し三合の酒ちびちびと
原 帯に短し襷に長し今の彼氏も元彼も こみつ
ずいぶん思いきった破調ですね。もうこれ
は七七七五の都々逸の世界。
参 彼ふたり帯にも襷にもならず

【佳 句】

短いが端的だった父の文 紀美代
短日のひだまりで蒔く花の種 昭 枝
覚えたぞショートメールを打ちまくる不二夫
了解のメールだけでも欲しい夜 (小)雅 美
井戸端会議サッと済ませる年の暮 一 彌

【今月の推せん句】

気短なカミナリ様はすぐ落ちる 長高 俊雄
バッサリと髪切って行く手術台 横山 里子
一時間は短いですね立話 貝塚 正子

川柳塔鑑賞

同人吟　北野哲男

―1月号から

恙なき年でありたし祝箸

津村志華子

意気込みで捲る睦月のカレンダー

木田比呂朗

新しい年の初めの静と動、この二句で平成最後の年が平穏に終ります様に。

よく保った揃って後期高齢者

黒岩靖博

遠慮ない空気になれた差し向い

足立つな子

いくつもの山河を越えて今を迎えられました。私は喜寿からが人生第二の収穫期だと思っています。どうぞ揃って夕映えの収穫期を満喫して下さいます様に祈ります。

九十歳まだぬけぬけと神頼み

津村志華子

まだ元気憎まれ口も絶好調

杉本義昭

毎日が楽しい今が旬だろう

山口光久

なんとなく嫌いな余生なる言葉

平賀国和

余生など全く無縁の四句を頂きました。一句目何を神様に頼まれたのか、ぬけぬけには煩悩の響きを感じます。二句目私も上半身は元気です。お互い憎まれ口で闊歩しましょう。三句目今が旬、この自覚こそが回りを楽しくさせます。四句目全く同感の拍手が聞こえてきます。

今にして思えばここちよい疼き

酒井真由

帰らざる日々のすべてが宝物

藤成操江

よれよれになって馴染んで来た木綿

松尾美智代

齢を重ねてこその感慨。疼き、宝物、木綿と、長い間の思いを凝縮した三句に心を揺さ振られるのは、私だけではないと思います。

クラス会話しているうち若くなる

岩切康子

帰ろうかもう五時間も喋ったよ

江島谷勝弘

喋るのは健康の源。昔を語る、今を語る、これからを語る。クラス会の一番人気は古い失敗談でしょう。大笑いが続くのが見える様です。定例のお喋り会、飲み会は何時も時間が足りません。話は泉の湧く如く尽きることなし。

夫婦して同じところで笑いたい

緒方美津子

あなたしかいないといざの時言おう

吉田陽子

円満な夫婦をさり気なく語りながら、毎日の暮しにいろいろなことがあることも垣間見せるホームドラマです。

ありますよ持病のふたつみっつなら

髙瀬霜石

おくすりがとてもおいしくなりました

松山芳生

病院のハシゴが出来る歳になる

牧野芳光

歳を重ねると何かの持病はある筈ですが、元気自慢を連想させる一句。二句目薬も確かに呑み易くなりましたが、察するところ句の本意は百薬の長のこと？三句目診察券がまた増えた様ですね。一人で病院をハシゴ出来る間は楽しみなことも出来ると思いますが如何です。

小春日に眠るのも良し咲くもよし

居谷真理子

楽しまん四季折折の彩を着る

黒田能子

図書館の椅子で冬眠から覚める

宇野幹子

三句を通じて悠々自適の様子と前向きの姿勢が見えます。心のゆとりが新しい楽しみを見付けることでしょう。

真っ新な朝が窓辺にやってくる

平井美智子

若かった頃の私を思い出させてくれた一句です。この感じが少し薄れている歳ですが、またちょっと元気を頂きました。

予報士が教えてくれる今日の服

上垣キヨミ

出掛ける時には寒暖晴雨の予報を確かめてから着て行く服を決める。外出の多い女の人には必須の情報ですが、それにつけても衣服の多さよ。

掃きよせる神のアートの柿落葉

髙岡茂子

葉が落ちて隣がぐっと近くなり

佐藤古拙

秋。落葉に神のアート、隣が近く見える現実。川柳の視野無限を感じました。

手品師の嘘政治家の嘘飯の種

宇賀史郎

オベッカも愛想笑いも飯の種

加藤茶人

飯の種はいろいろ、忖度の嘘、営業マンの愛想よさ、いずれも生活がかかっているのです。

言うなればビタミンCの様な人

西田美恵子

美容と健康に必要なビタミンCを意中の人とは旨い表現です。恐れ入りました。お友達よりもっと身近な方のおのろけかも知れませんが、過剰とバランスに注意の上どうぞ末長くお幸せに。

水煙抄鑑賞

—1月号から

丹後屋　肇

輝いた今日一日をラップする

延寿庵　野　鶴

一読明解。素晴しい一日を包む充実感に溢れています。読み手側も自分のことのように、その喜びに共感致します。

ペン先に運良く降りてきた言葉

真　島　久美子

作句の中では、十七音字の決まった達成感に膝をポンと打つ時があります。粘りよく作句を続けてきた成果でありましょう。

七十億の奇跡のうちの一人です

池　田　美　穂

世界の人口の中の一人という奇跡の存在に唯々感謝あるのみですね。毎日を大切にして生きて参りましょう。

犬も食わぬ喧嘩を猫が買って出る

西　川　千　鶴

二人で暮らして居れば、噛み合わぬ日もあって、つい夫婦喧嘩になる場合も起こります。その時飼っているペットが仲介役を買って、気分転換を担ってくれるのでしょう。

大声で内緒話をするカラス

神　野　千恵子

カラスの内緒話とはどんな声を立てるのでしょうか、あのダミ声の中に潜ませているのでしょうね、きっと。

後戻り出来ない靴を履きました

柴　本　ばっは

人間生まれ落ちた時から、元気で居れば死するまで後戻りは出来ません。その人生を靴を履くと捉えた表現に見事一本とられました。

健康に時時泣くといいようだ

中　島　一　彌

健康には笑ってストレスを溜めないようにという常識を逆転させました。いい発見でした。

消しゴムのカスにたまっているボヤキ

木　藤　こみつ

句会では一応作句したものを提出しますが、突然自分の中でいいヒントを得て急遽変更することがあります。締め切り時間が迫って、書き直す消しゴムやカスを払う音、これは聞きづらく美的ではありませんね。私もしっかり反省致します。

一線に並ぶと勝ちを意識する

高　柳　閑　雲

わくわくとして楽しい運動会ですが、競走者と一線に並ぶと負けたくない闘争心がむらむらと湧き上がって参ります。結果はどん尻でしょげ返って終り。

終電車眠れる美女へ肩を貸す

太　田　省　三

磨いたら光る間が華だった

小　栢　こずえ

指先から都会の色へ染めあげる

原　熊　知津子

夕闇が迫る赤提灯が呼ぶ

上　山　堅　坊

花金と言うもわびしいひとり酒

長　髙　俊　雄

褒められて伸びるタイプでまだ伸びず

小　野　雅　美

其の外、いい句が沢山ありました。次への期待が含らみます。素晴しい誌友同志の皆様方へ、改めて乾杯！

『麻生路郎読本』余滴 (44)

「川柳職業人宣言」前後④

粟原道夫

青螺　で、生活費の出る所が、大體ヂヤーナリズムに限られてゐるとなると、職業川柳人はそこへ自分の句や原稿を持ち込んで行くのかね。

車山　そりや自分の生活の苦樂に關係してるのだから、懸命な賣込みもやらうし運動もやらうさ。

青螺　さあそこだ。賣込んだ結果もし今のヂヤーナリズムが、僕等が川柳を考へてゐる熱心さと同じ程度で作品を評價して呉れればいいが、現在の尠くとも川柳家の原稿を貰はうとするヂヤーナリズムは「居候三杯目にはそッと出し」位の認識でしかないのだからな。作品價値よりも先づ商品價値が彼等には決定的な問題だから——

幻樹　それは良心的な職業川柳人なら誰だつて持つ不安だよ。だからさういふ場合そんな不安な影に戰つてゐないで、「必ず正しい川柳を紹介する」といふ意味の事を一般川柳家に裏書したらいゝぢやないか。こいつは見えない短刀で恐迫するんぢやない。ただこの眞摯さに一應頷いて貰つてから新しい首途を我我で送り出すんだ。

竹緒　そこで職業川柳人の先づ直面する問題は、大衆受け云云だと思ふが、唯物論に依れば藝術も一個の商品として成立するのだ。卽ち繪でも文學でも需要があるから供給が成立つ。ただ大衆の眼を開かせるか否かが、低俗な藝術を作るか高尙な藝術を作るかになるのだ。職業川柳人が新聞雜誌に句を發表出來た位で有頂天になつてゐると、その職業人は滅びてしまふし、川柳自身も大衆から見放されて終ふ。

不及　大衆を無智な者のやうに考へてゐるヂヤーナリズムは此際反省しなければ不可ないな。廿年前の大衆から今の大衆まで、一寸も進歩してゐないのが今のヂヤーナリズムの頭の中にある大衆だ。

幻樹　然し、つくづく思ふ。「ハイ私は川柳の商人で御座い！」と食ふためにさういふ宣言をしたものが、他の藝術の何の部門にあつたらう。實際食ふために見詰めた大衆つていふ奴は、何處まで底意地の悪い人種だか譯が解らない。そのくせ解るところはよく解る。全く讃ふべき仇敵つて氣がする。

一胡　話は違ふが、シエクスピヤが地球座の座付作者として踊らされてゐながら、あんな偉大なそして、あんな通俗性を持つた作品を殘してゐるのだからな。實際「オセロ」なんか讀むとそんぢよそこらのエロ小說なんかをかしくつて讀めやしない。職業川柳人だつてシエクスピヤが地球座のために書かねばならなかつたやうに、ヂヤーナリズムに句を提供しなければならないさ。それで猶シエクスピヤのやうな偉大な作品を殘すやうに努力するんだね。

不及　僕は甚だ自重論に聞えるかも知れないが、自ら期時を待つべきだと思ふ。好い句を發表し續けてゐれば、自然食へる時期が來る。

平吉　僕もその言葉に贊成だ。消極的な考かも知れないが時期だよ。又僕の氣持とすれば宣言つていふ事は、恰でチンドン屋のやうにも取れるのだ。

車山　今更時期を待つ必要が何處にある。俳句の高濱虛子だつて食へるまでにな

るには總ゆる手段を講じたといふぢやないか。藝術は藝術、食ふ事は食ふ事だから——

猫　三　宣言必ずしも悪くはない。兎に角混沌と昏迷してゐる現在の川柳の上で何か、仕事をしやうとするには、ゴチヨゴチヨ蔭でやつてるより、一應自分の意志を表明してやるに越した事はない。好い句を作つてゐれば必ず食へるといふけれども「それが食へんから立つたのだ」と所謂職業川柳人は言やしないか。

一　胡　みんなリヤリストだなあ。よく直ぐ職業職業つて口に出せるね。僕は職業つて言葉は一番心の奥に殘してある。これが、僕の悪いセンチメンタリズムか——笑へもしない。

竹　緒　藝術の職業性は昔からあつたんで、例へば繪の如きは白い食器皿より何か奇麗な皿が欲しいと物持に望まれて、畫家が職業的になり立ち、王侯が退窟を感じそこに何物かを求めた時、音樂が生れ詩の朗讀の發生となつたんだ。

幻　樹　それは自然發生的な所産だつたので、＊今度のやうに供給するから需要の意思表示をしろと、詰め寄つたりするのは悲壯な眞劍味は解るが、その手段には何うしても心から賛成出來ない。

＊「今度の～詰め寄ったりする」は、路郎の「川柳職業人宣言」「川柳人協會と私」に対する発言か。前回、前々回の「余滴」を参照して下さい。

青　螺　又大衆の事に戻るが、漱石が作品を發表した時の小説といふものに對する大衆の認識と、現在の川柳に對する大衆の變（ママ）識とは違ふと思ふ。現在の一般大衆はまだまだ川柳なんて卑俗なもの、つまり地口や洒落を詠つてる程度だと思つてる者が多いのだから、その意味の職業川柳人になるものがもし、我も我もと出て來たら、一體川柳は何んなものになつて來るだらう。

幻　樹　さうすりや又新しい川柳が生れて來るかも知れないよ。然し、宣言さへすれば、誰でも職業川柳人のネオンが點滅するのだとすると大變な事になるぞ。

不　及　そんな事は有り得ないし、又假にあつたとしても自然に淘汰されてゆくよ。

幻　樹　然し、一體誰が職業川柳人としての價値を認めるのだい。

竹　緒　そんな事は兎に角として悪くすると大衆の眼を開かない中に、切角明治に興つた新川柳が再び天保川柳に戻る心配はある。

車　山　要するに、問題の結論は何うなる。

竹　緒　既にスタートを切つた人がある以上、極力これを後から總ゆる意味で援助するのが當然だ。

青　螺　勿論だ。

平　吉　或程度まで指導標はこちらで打たなければいけない。又絶えず連繫は持たなければいけない、決して離れては不可ない、といふのは結局、「川柳」の問題なのだからだ、川柳のために川柳を論じ、川柳のために自己の句に苦しむといふ事は忘れてはいけない。

不　及　けれど誤つた道へ迷ひ込まないやうに、僕達で監視する必要がある。

平　吉　こゝで川柳というものを大きく考へてみると、こんな小さな職業化云云なんて事が、今更ながら問題になるといふのは何としても淋しい、然し、僕達は今この川柳といふ一つの小さな殿堂を、飽くまで昔の儘（まま）にそつと育ててゆくといふ保守的な考と、もつと處女地を開拓するといふやうな前進的な考と、この二つの道の何れ（いず）かを採らなければならない立場にあるとしたら、勿論前進的なものでなけりやならない。そ

の意味で職業川柳人の言動に若し飽き足らぬ場合、今度は僕達の手で何か積極的に行動しなけりやならないぞ。

幻　樹　まアそんな血氣にはやる前に、先づ目下のところ職業川柳人の行動を、靜に見護つて行かうぢやないか。俺達の親父が起つたのだと思へば間違ひないさ。然し、その親父には何處までも川柳詩人である事を忘れてもらひたくないのだ、川柳詩人としての感激性！　こいつが消えてしまつたら、もうその人間に價値がなくなつてしまふのだ。人間の價値であり川柳の價値がそこから決定されて行くよ。

猫　三　今夜は種々名論卓説を拜聽したけれど元來僕にはこの問題はピンと來ない。今の僕にとつて問題なのは、川柳が何の程度に社會的存在があるかといふやうな事ではなく、藝術的な存在としての川柳をもつと探究しなければならないと思ふ。＊「俳句は單なる趣味に非ずして實に今や我我の生活である」と絶叫した某誌の主宰者にその對抗誌が「俳句は生活だつて、そりやさうだらう、何しろ奴さん達には俳句は飯の種なのだから」と言つた話があるが、川柳で飯が食へないかといふ事はそれはその當事者が勝手に考へるべき事であつて、これを他から云云するのは僭越であり、見當違ひであり滑稽ではないか。畢竟寶石屋の飾り窓を覗いてあの寶石は売れるだらうかとかいや売れないだらうとか論議するやうなものだ。職業俳人とか職業詩人とかは餘り聞かないが、特に川柳だけが職業人を云云するのは、結局川柳を支持する大衆性によるのかな。何にしてもお寒いこつた。

＊このやりとりは、「ホトトギス」と「層雲」の間でなされたものだと思つて、「ホトトギス」をざつと見たが、今のところ不明である。

幻　樹　然し向う河岸の火事ぢやない。兎に角今年は一つの課題が我々に與へられたんだ。來年にでもなつたら幾らか結果も解つて來るだらうから、一切はその上の事だ。それまで我々は下になつて精進だ、精進だ。

竹　緒　ではこの位で。

前々回の「余滴」で、職業川柳家の宣言をした人が路郎以外にもいたことに触れたが、前田雀郎ではないかと思われる。

「川柳きやり」（昭和12年3月）で、品川陣居が、「廣汎な諸勢力の綜合」の「職業川柳の深化」で、次のように述べている。

〈前田雀郎氏が二十年の俸給者生活を清算して（筆者註―雀郎は、大正6年講談社に入社。同10年に都新聞に入社し、昭和12年1月退社した。『川柳総合大事典』参照）、今度、在來の「せんりう社」に新しい同人をプラスして新しいスタッフのもとに新「せんりう社」を經營されることが發表された。（中略）《川柳界はもう過渡期ではありません。昭和の川柳はある程度自らの姿を整へて來たと思つて居ります。これからは社會へ對しての啓蒙時代であります。內にこれを錬磨する一方、川柳は今何處にあるかを本當に世の中の人に知つて貰はねばならぬ時であります。》［せんりう］（筆者註。「」の後、不明。「一月号」だと思われる）（中略）今度雀郎氏が銀座に「書斎」を持つて、そこで「せんりう」誌のみでなく、何か大きな仕事をされるといふことは、われわれにとつてまことに欣快この上もない事である。しかもその仕事のレッ振りが柳壇をのみ相手とせずに、ひろく世間と向き合つて行くとしたならば、これはまことに川柳が職業化されることのプロバビリチイを增すものであつて、われわれとして心強い限りである。〉

こんにちは 新同人です

川柳の森に迷い込んで

下松市　有海静枝

柳歴を問われると、どうも心許ない。止めたり再開したりの繰り返しを延べて十五年は経過している気がする。五七五以外何にも知らないのに投句の依頼を受けた事に始まり、師もなく碌に学びもせずの時の流れであるから、柳歴とはおこがましい。恥入るのみ。

ここ数年、後から始められた方の上手な句にタジタジ。ようやく入門書などを手に川柳を知り始めた。作句数だけは重ねているので、入門書がスッスと頭に入ってくる。川柳の歩んできた道もやっとこさ知ったとこ。

さて、川柳とは何ぞや？　あちらこちらに「人間を詠む」と書かれている。ではでは人間とは何ぞや？　よい齢をして赤面する様な事をつつうらうら考える。人は多面形。川柳の切り口も多種多様。

ある大会誌の寄稿文に「無意識の差別」が解かれていた。時折気になって胸につかえていたものがストンと落ちた。その島田駱舟氏の文をごくごく一部引用。「人間を詠む川柳は人間を丁寧に扱わないといけません。」

川柳を学び人間を学ぶ所存。よろしくお願い致します。

さあ大変

男鹿市　伊藤　のぶよし

川柳との出会いは、地元新聞に「一本の鉛筆と紙で始められる川柳は、いかが」という勧誘文を目にし、吟社の初心者講習を受けたのがはじまりです。定年後〝ふところに優しい暇つぶしはないか〟と探していたこともあって、年金の枠で出来そうと思いあっさり入会しました。

恥ずかしながら、川柳という言葉を聞くのも、読み方が〝センリュウ〟もこの時はじめて知りました。こんな訳ですから年齢も考慮し一応取り組む以上は、〝石の上にも三年〟の倍の六年でダメなら辞めると決めていました。

しかし、あっという間に三倍近くの年月がたち、池の泥鰌よろしく〝深みにはまってサア大変〟の心境で現在にいたっております。

吟社に入会してまもなく

時は来たその手をはなせ俺はゆく　森田　白林
火葬場を照らす名月だってある　森田　白林

に出会い強い衝撃をうけました。同時に、初投句の

釣れぬ日はトンボと語る竿の先

が抜け思い出になっています。今回、同人の仲間に入れていただき有り難うございます。一日一善にならい、一日一句を心がけていきたいと思っています。

こんにちは　新同人です

川柳を始めたきっかけ

岩国市　上村夢香

ずいぶん前になりますが、「サラリーマン川柳」の中で

一戸建て手が出る土地は熊も出る

と言う川柳を目にいたしました。その時の世相をよく反映してるなあと思った記憶があります。

それ以来、「サラリーマン川柳」を毎年楽しみにして読んでおりました。それが川柳を始めたきっかけです。

本格的に学んでみたいと思いまして、「NHK通信講座」を受講するようになりました。

講師の方々の厳しい中にも心のこもったご指導いただきまして、さまざまなコメントは、自分への大きな励みとなっております。

この度、川柳塔同人の仲間に加えていただきまして新たなスタートをさせていただくことになりました。

学習中の身ではございますが、自分なりに精進してまいりたいと存じます。

ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

入門講座

奈良市　宇賀史郎

今年の春勉強句会の日、公民館の方より「隣のK市の公民館が川柳入門講座を検討されており講師の紹介依頼がある。お願いできないか。」との話があり、勉強句会のM先生に打診したところ「多忙につき受けられないが、川柳の普及、新会員を増やすことにつながる筈で、断ったら他柳社に話が廻るので受けるべきだ。話をきいた張本人の君がやりなさい。」と断られ、理恵会長に適切な方の選任をお願いしたが「国文祭があり、K市の地理的位置から君しかいない。」と体を躱された。悩んだ挙句、川柳教室に七年通った経験から教わり方の逆でよいかと腹を括って、K市の公民館館長と面談。九月から一一月、二週間隔、五講座、無報酬と決定。川上三太郎氏に贈られたサトウハチロウの詩、昨年度の国民文化祭の秀句、昨年度サラリーマン川柳、近藤健康川柳等を選び、虫食い川柳の作成、簡単な川柳史等資料を作り「川柳しませんか」を用意。市名に因んだ宿題を考え、連記2句互選2句雑吟1句と決め、16名の受講者でスタート。初日の互選の秀句「もうイヤダこんな苦業をなぜ受けた」にショックを受け、席の並べ方、講評は褒めることに変えて1名の退会者のみで最終回。初めて出した席題「夫婦」の互選の秀句「放し飼い夫婦円満秘訣です」。

「今後何らかの形で川柳と関わって下さい。新聞ラジオネット等へ投稿、句会への参加を積極的に」と申し上げて終わりました。当会の十二月句会に受講者二名の出席に感謝。

こんにちは 新同人です

心豊かに

川西市　岡　一心

毎日を自分の好きに生きてみる―年重ね幸せ重ね喜寿豊かーと感謝の思いです。川柳との出会いは好運でした。

突然の脳梗塞発症により入院と定年退職が重なりその出会いで起死回生することが出来たのですから。

私も参加していた地域の高齢者集会「きらく会」の行事の一環として旧来の知人が講師となり川柳教室が加わり毎月定例化、楽しい行事となりました。みんなで夢中になり虫喰いクイズや作品、宿題比べ等々誠にワイワイガヤガヤ明るく楽しく為になるその魅力にはまりました。

私はNHK講座の川柳教室を初歩としてその奥深い味わいにはまり込み、川柳塔誌及び川柳マガジン定期投稿者となり十年余。その傍らボランティアとして地域の明峰地区青少年育成市民会議の定例活動として小、中、高校生参加による新春川柳大会行事の講師奉仕十年余を経て喜寿迎う日々であり、時を越え己を越えて活きる夢を抱きつづけてともかくも何よりも大きな、大切な存在は妻である。

年重ね幸せ重ね共白髪―の有難い糟糠の妻である。

小学校、中学校、高校の同級生として共に歩み、社会人としても同じ銀行に勤務することとなり結ばれた絆であり共生する同志であり夫婦である。人生心豊かに一歩一歩踏みしめつつ御許へ天のふるさとへ向いたいものである。

鈴鹿市　小河柳女

平成二年二月、二度目の危篤に陥った養母の介護のため夜間、病室に泊まり込みました。勤めを持つ身には傍にいてやれないからです。そして四十日間後の三月十四日生徒を卒業させた夜、任務を終えた安堵感と疲労のため、喘息にかかり、帯状疱疹になり、緑内障になりました。その上ウツ状態にも…。

何にかに寄りかかりたいという不安定な気持ちから、近くの川柳会に通いました。しかし川柳とは何かがわからず次のグループへ通いました。が、川柳の概念がわからず名古屋まで通いました。故石森騎久夫先生に出会ったことで、川柳の正体がわかりました。

「川柳とは作者の思い（情感、思想を底辺にして人間観、人生観、社会観、世界観）を空間的に表現するものである。」「因みに、空間的表現とは比喩、暗喩などの表現法である。」という実に明解な答えを与えて下さいました。この定義ならば、近代文学の一ジャンルとして屹立することができると信じています。

川柳塔社の御縁も「秋の川柳塔まつり」に応募いたしました「**おろしりんごは現世のようである**」を小島蘭幸先生に理解していただいたことから始まりました。

川柳の理論と実践を死ぬまで続けていくつもりです。

こんにちは 新同人です

生涯の盟友

三原市　鴨田昭紀

従来からの私の川柳の楽しみ方としては、特定の組織にも属さず自由奔放に楽しむこととしてきました。今も私の主催する小さい結社「川柳奉行三原川柳会」では特定の柳社に属した人はほんの一部で、殆どの人は無所属で楽しく毎月の句会を楽しんでいます。それはそれで楽しければ一向に構わない訳ですが、ただ数年前から私自身が感じていたことは生意気ながらも今後の川柳界の発展や在り方などについて微力ながらも協力や進言をさせて頂くためには、日本の川柳界を牽引するどこかの大手柳社に所属すべきと思うようになりました。

そこで全国的組織を有する主要柳社の柳誌を一通り拝見させて頂きましたが、私の川柳観に比較的近いと感じた川柳塔社にお世話になることになりました。そしてもう一つの決め手となったのは、たまたますぐ隣の竹原市に川柳界の大御所である小島蘭幸主幹が住んでおられたことでした。これを機に竹原川柳会にも入会させていただき現在もお世話になっています。

ある偶然から川柳という盟友に出会って以来十数年、のめり込むほどに奥の深さに悩み・苦しみながらもそれが次第に快感へと変っていくことの満足感や充実感を今後も楽しんでいきたいと思っていますのでどうぞ宜しくお願い致します。

川柳に魅せられて

東京都　川名洋子

会社勤めをしていた頃、生命保険会社に勤務していた友人が、サラリーマン川柳を毎年もってきてくれました。面白いなと思ったのがきっかけです。定年になって川柳を始めました。人間を詠む、自分をどう入れるか、どこまで発想を広げるかなど難しいことばかりです。いつかこれぞと思う句を作りたいと思っていますが、満足する句が出ないまま今に至っています。

東京では三か所の句会、勉強会に参加していますが、川柳の奥深さ、難しさ、語彙不足をひしひしと感じています。最終的には息子達に、自分が生きてきた証として四・五十句を残したいですね。

川柳塔の大会に二度参加、とてもいい雰囲気でした。また行きたいのですが、大阪までは遠いため中々句会に参加できないのが残念です。

行き詰まると『川柳の理論と実践』『俊秀流川柳入門』を開いています。

好きな句は

一つずつ石積んでゆく誕生日　西出　楓楽

大根がおいしいだけで冬が好き　大木　俊秀

私の句

近いはずなのに遠くなって　夕日　洋子

こんにちは 新同人です

佳句への挑戦

塩竈市　木田比呂朗

吟社の幹部からの「あなたは『川柳塔』誌を読むように」との助言により、購読を初めたのが塔社との出会いでした。一向に代わり映えしない作品を見かねてのアドバイスだったのです。

吟社には毎月交換誌が沢山送付され、折に触れては目を通していました。「川柳塔」もその中の一つでしたが、毎月読んでいくうちに勧められた理由が分かりました。シンプルな表現でありながら穿ちの効いた句や、また身辺の出来事が巧みなユーモアで詠まれている句など、私には欠けている多くの点に気づかされ作句に対する考え方を新たにし、広く深く勉強しなければならないと痛感した次第です。

特に題詠の「檸檬抄」「一路集」の作品の表現方法には感服します。句を鑑賞し、題に対する多岐にわたる捉え方に触発されて投句を始めましたが、以前よりの作句スタイルからなかなか抜け出せません。前述のコーナーの作品を参考に課題に対する距離感とでも言いましょうか、題にツキ過ぎず、平易な言葉で要点をさらりと詠みあげることが目標です。昨今ユーモア川柳が少なくなったと言われております。会心のユーモア句を目指しトライし続けますのでどうぞよろしくお願いいたします。

川柳に魅せられて

大阪市　髙杉　力

私が川柳を始めたのは昭和四十五年、学生時代に遡ります。亡父鬼遊に連れられ、本社句会や菜の花句会に参加していました。入社面接の時も趣味の欄に川柳と書いていたので、面接官から「川柳って世の中を斜めから見るやつだね？」と問われました。その時「一歩下がって見ることはあっても、常に世の中を正面から見て作ります！」と答えたことをよく覚えています。

それなのに在職中はほとんど作句せず、退職後に復活したもののテニス、ダンス、音楽など他の趣味で忙しく、締切の前日にまとめて作るドロナワ作句の状態が続いていました。

そんな時小島蘭幸さん、新家完司さんから同人への推挙のお手紙が届きました。生きてきた証となるような句を詠む自信はありませんが、多くの方との交流を通じて新しい世界が開ける予感がして、有り難くお受けすることにしました。どうかどこかの句会でお会いした時には気軽にお声を掛けていただければ幸いです。今回私が同人になることを一番喜んでくれたのは、母千歩と亡父鬼遊だとおもいます。

伝統ある川柳塔に親子三人で名を連ねる喜びを噛み締めながら、精進したいと思います。最後に大好きな父の句を一つ紹介させていただき、ご挨拶とさせていただきます。

消えるから雪は刹那を浄く舞い　　髙杉　鬼遊

こんにちは 新同人です

鳥取市　田中天翔

晩年の母が俳句を楽しんでいました。私も在職中から、五七リズム調の何かを習いたいと思っていたところ、運よく第二の職場の友人のご両親が川柳をなさっていました。

平成二十五年六月、お宅にお邪魔し、川柳の定型と人間を詠むものと教わり、新家先生著『川柳の理論と実践』の本を戴いて帰りました。この本が大切な教本となりました。

一週間後、ふうもん吟社に紹介していただいた時の題のひとつが「ざまあ見ろ」でした。「**ざまあ見ろとまんまる月が見え隠れ**」と即興で詠みましたら会場大笑い！私にもできるかも…と単細胞は喜びました。

二ケ月後に洋々先生から、「天翔と名乗りなさい」と言っていただき、すったもんだの末にありがたく頂戴しました。今では本名より馴染んでおります。感謝の一言です。

二十六年二月誌友。二十九年三月に同人の仲間入りをさせていただきました。

盛桜先生、岩美川柳会、先輩に育てていただいております。望んで入った道です。今後「継続は力」を信じ日々アンテナを高く張り、五感と言葉を大切に楽しんで自分の姿、想いを詠んでいきますのでよろしくお願いいたします。

好きな句

寒いのは季節などではなくこころ　新家　完司

こんにちは新同人です

三田市　谷口修平

川柳をはじめたきっかけですが、何かの用事で三田市民センターを訪れた時に、色々なパンフレットの中で「NHK学園の川柳講座」が目に止まりました。以前からサラリーマン川柳などを読んで面白そうだなとは思っていたのと、「ひょっとこ」のイラストが目を引いたせいかも知れません。パラパラと中を見てみると「**盃に散る花びらも酒が好き**」という花びらを擬人化した句が目に留まりこれは面白そうだといっぺんに気に入り早速通信講座の申し込みをしました。今から7年程前の事です。その後2年程は専ら通信教育で投句をしていたのですが、何か物足りなく感じていたところ、ある会合で地元川柳会の会長の奥様から句会への出席を勧められたので出席したところ、これも又その雰囲気がよくていっぺんに気に入り病み付きになってしまいました。三田市には7つの句会があるのですが、ご多分に洩れず高齢化が進んでおり、もっと若い人にも入会して頂き活性化したいという思いで29年9月からホームページを立ち上げて様々な情報発信を行っています。「川柳さんだ」で検索して頂ければご覧になれますので是非一度見て下さい。

こんにちは　新同人です

川柳再出発にあたり

羽曳野市　仲谷　真

私が川柳塔誌を初めて手にしたのは、アベノのユーゴ書店であった。当時一部売りでした。

初歩教室の初投句のお題は「軽い」でした。

身軽だが独身無職飛びそうな　　**真**

初歩教室に載るようになり、購読を始めました。

朝日なにわ柳壇で、薫風師に

風みどり庶民の声に負けました

が入選し、それから年間購読を始めました。

しばらくして羽曳野川柳や藤井寺川柳に通うようになりました。

両親を亡くし、入院も経験し、心臓にはステントが、三ヶ所入ってます。

退院後、川柳の再出発にあたり、藤井寺川柳の髙田美代子さんに、柳号　真（まこと）を、いただきました。

これからも、諸先輩のご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いします。

大阪に春の訪れ大相撲　　**真**

晩学の川柳

尼崎市　永田紀恵

私は小学生の頃習った「雀の子そこのけ…」や「やせ蛙負けるな…」等、一茶の俳句に興味を持ち、句をまねてけったいな５７５を詠み（?）友達を笑わせていたのをおぼえています。四十代半ばある新聞社の読者招待で開催された俳句の講習会に参加しました。その時の添削で選者から「この句は俳句というより川柳ですね」と批評されました。

「川柳」の二文字が私の中にインプットされた瞬間でした。その後はまだ仕事も持っていましたので新聞などの川柳欄に目を通すぐらいでした。私は趣味として登山をしていましたが七十代に入り体力に自信がなくなり、俳句でも始めようかなと漠然と考えていました。そんな折、道で出合った知人から「今日は午後から川柳の会に行く」と聞き、昔言われた「川柳」が急によみがえったのです。「そうだ川柳だ！」と早速紹介していただき「川柳たちばな」に入会しました。七十四歳の春でした。その後は誘っていただき「川柳あまがさき」の会員になりあちこちの句会にも参加する様になりました。ですが二〇一八年二月で川柳を始めて丸四年という新参者、その上晩学です。この度川柳塔同人に推薦をいただき恐縮しています。どこまでやれるか解らないのですが何卒よろしくお願い申し上げます。

こんにちは 新同人です

上尾市　中村伸子

川柳を始めたのは、夫の転勤で竹原市に住んだのがきっかけです。公民館のコーラスでご一緒した石原淑子さんに「木曜日は開いてる?」と聞かれたまたま木曜日だけが開いていたのが川柳との運命の出会いでした。

竹原川柳会前会長の山内静水先生の公民館講座でした。素人の怖さ知らずで句を作り、先生の誉め上手に乗せられて、いつのまにかどっぷりと川柳の世界に浸かっていました。次の転勤で福岡県へと移るとき、当然川柳とはお別れだと思っていました。すると先生は「やめるなんて淋しいことは聞きたくない。福岡から送ってくれればいいのです」もうこれで離れられなくなってしまいました。

その後、埼玉県に住み相変らず「たけはら」に句を送り続けています。「川柳塔」は十年以上前から拝読しておりますが、朗読ボランティアなどに時間をとられ中々投句は出来ませんでした。一昨年ボランティアを退いてからやっと重い腰を上げ、誌友として投句を始めました。

柳歴は29年ですが中身が伴っておりません。まだまだ至りませんが、同人のすみっこで精進させていただきたいと思います。私の好きな一句です。

大好きな人と芒が原にいる

蘭幸

私の川柳

西予市　西田美恵子

私が川柳を始めたきっかけは、職場の上司からのお誘いでした。職場は家畜を診療する獣医師のみの職場で、上司の句は「**瞳孔が開いてあの世が見えて来る**」と言うものでした。ならば私もと「**この世仮の世くよくよせずに生きて行こ**」と作句。初心者ながらあっぱれと誉められ、気を良くしたのが始まりでした。

又、第七回全日本川柳大会で「**展望はどうあれ父は鍬を打つ**」で誌上大会賞を頂き、ますます私の川柳に対するラブコールは熱くなって行きました。

その後同人の善信さんからのお誘いがあって、塔に入会し運良く優秀作家賞を手にする事が出来ました。そのお陰で大会に主人と初めての参加、大会の雰囲気に圧倒されました。一つに呼名の大きさ、愛媛の大会では考えられませんね。読み上げられた自分の句に自信を持って呼名する。私もつられて自分でも驚く程の声ではっきり呼名出来ました。これで大会は十分盛り上がりますね。

川柳も昔と変り、田舎から都会に出て来て精錬されたような、洒落れた句が多くなり付いてゆけない気もしますが、私は私の川柳として楽しんでゆきたいと思っています。

こんにちは　新同人です

尼崎市　藤田雪菜

総合文化センターの受付で、ふと目にした川柳教室募集のチラシでした。頭の体操にと安易な気持で、習って見ようと思ったのが、川柳を始めるきっかけです。

長浜美龍先生と沢山の先輩に恵まれて、稚拙な質問にも親切丁寧に教えて頂き、挫折を繰り返しながら今日まで続けられました。句会に参加すると、私の知らない事が多くありいつも楽しく、興味深く聞いております。

このたびは同人のお話をいただき、まだまだ未熟者で分不相応だと思っておりますが、川柳塔同人のお仲間に加えて頂けるのも、句会での皆様方の御指導、そして同人へ推薦して下さる方が居られる、からこそだと感謝いたしております。

これからも焦らず脳も身体も健やかに、終章を過ごしたいと思います。

全没にもめげず先輩に支えられながら、納得のいく句が詠めるようになっていきたいと思っています。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

川柳塔　本社句会

神戸市　細川花門

一昨年の五月川柳塔本社句会に初めて参加しました。それ以来平抜きはヒット、佳作は二塁打、人は三塁打、地はホームラン、天は満塁ホームラン、声なしは三振と決めて年間打率を算出して遊んでいます。

二十八年五月～十二月（八月は欠席）出席回数は七回、一回の投句数は十二句ですので出句総数は八十四句、この内訳は全没二回、一声が三回、三声が二回でした。即ち打席八十四回に対してヒット数が九、打率一割七厘。

これでは戦力外通告になりかねません。

二十九年一月～十二月頑張って毎月出席しました。その結果は全没一回、一声三回、二声五回、三声三回。ラッキーなことに二塁打が一回ありました。

扨て、今年の打率は百四十四打席、ヒット二十二本、打率は一割五分二厘。

戦力外通告の危機はまだ続きます。頓首再拝。

こんにちは　新同人です

川柳の魅力

枚方市　山口　弘委智

友人の句会に誘われたのが、川柳を始めたきっかけです。その後幾つかの句会に参加して、川柳の魅力にとりつかれています。

一、スピード

句会に参加して、出句後ほぼ一時間程度で甲乙が披講されます。スポーツ競技を除いて、この様なスピード感は他にない最大の魅力です。

二、学ぶ

句会には多くの方々が参加されます。しかも各々違った人生を歩まれ、その生き様が句に凝縮されています。それが私の人生の幅を広げる意味で、多くを学び参考にさせていただいています。

三、縁

句会でお会いする諸先輩と、未熟者で分不相応ですが、ご縁が生まれ、柳友が増えたことは、望外の喜びです。

伊達郁夫先生、江島谷勝弘先生、推薦ありがとうございました。これからもご指導よろしくお願いいたします。

川柳塔社の益々の発展を祈念いたします。

私と川柳

宝塚市　丸山孔一

我流で約五十年前に始めた川柳。当時、日経新聞夕刊に「日経川柳」のコラムがあり投句。月間秀句に選ばれたこともあった（選者が三太郎さんか水府さんか定かではないが）。またその後奇しくも大阪市内の某病院で橘高薫風さんにお会いする機会があった。当時はそんな大御所とはつゆ知らず、賀状の交換のみ続けていたが、私の勤務が国内・海外と目まぐるしく変り、住所不定の如くになり途中で失礼をしてしまった。

それからしばらく川柳とのお付き合いは無かったが、退職を機に再度気になり始め、平成十六年川柳塔に誌友として参加。時事的作句は極力避けながら依然我流を続けている。先輩同人諸氏の句を読みながら何とか勉強しつつあるが、中でも気になるお二方。失礼を顧みずお名前を挙げさせて頂くと、お一人はお酒をこよなく愛しつつそれをもて遊ばれる新家完司さん（ご指導も頂いた）。もうお一人はロマンチックでお優しいのか、はた又冷徹なのかよく分からない安土理恵さん。今後共宜しく。

他の趣味としてはカラオケや落語があるが、特に落語は川柳と共通点がある。共に自分の頭で世界を描く。頭の中で陽は照り風が吹く。自分で小宇宙を創造しながら苦しみ楽しむ。これからも苦吟しながら川柳を楽しみたい。

（投句２１０名）

異常なほどの寒波で、大雪に見舞われたり、インフルエンザが流行したりで大変ですが、そんな中でも梅は咲き、芳香を漂わせてくれています。

しかし、そうは言っても、あまりの寒さは身体に堪えることしきり、ついつい動くことから遠ざかってしまいますが、せめて頭ぐらいは少しでも動かさねば、とナビを拝見しています。

では、どうぞ。

一人旅どこで咲いてもいいんだよ

黒石市　北山まみどり

（評）自由であること、それは意外に不自由でもあります。自分自身を奮い立たせて大輪の花を咲かせる、これ最高！

平成の次の元号捻り出す

三田市　多田　雅尚

（評）次の元号、もう決まっているのかどうか、早く知りたいものですが、ますます昭和が遠くなっていきます。

介護ロボットちょっと休憩していった

寝屋川市　森　茜

（評）ロボットが介護の分野でいよいよ活躍しそう。これからの老人社会では、ロボットさえ休みたくなるほどかしら。

遠い日のときめきをまだ持っている

東京都　川本真理子

（評）恋のときめき、あるいは諦めきれない夢。口に出すのは憚っても、胸の奥深く秘めているのは素晴らしいですね。

このように命繋いでいくんだね

犬山市　金子美千代

（評）動物も植物も、そして人間も。世の中のありとあらゆるものが、古きから新しきへ、脈々と繋がっていくのです。

反骨がムクムクムクと湧く孤独

大阪市　内田志津子

（評）徒党を組んでいては反骨精神など問うべきもありません。孤独という言葉こそが似合うと思います。

百年後の恋を夢見ているのです

松山市　栗田　忠士

（評）何だかすごくロマンティックではありませんか。百年後、自分のたましいは何処にあるのでしょう。

アルプスで鍛え室内で転ぶ

海南市　堂上　泰女

（評）嘘のような話ですが、人ごとではありません。本当にこのようなことは起こりうるのですから。

再びのバブル到来待っている

三田市　堀　正和

（評）バブル時代の光りと影、いい思いをされた方であれば、〈待っている〉の言葉に力が入りそうですね。

へそくりの場所を忘れたのが誤算

河内長野市　山岡富美子

（評）これ、家族にも聞くに聞けないし困ったものですよね。我が身を嘆くしかないですもの。

笠岡市　藤井　智史

川柳の大好きな人手を挙げて

河内長野市　穂口　正子

負けへんでもう一花を近い内

高槻市　片山かずお

もう少し待とうか三月はそこだ

大阪市　若本　安代

タイトルを総なめにする駒の音

羽曳野市　徳山みつこ

バームクーヘンでウフフの午後のお茶

大洲市　中居　善信

流れきて椰子が根づいている小島

羽曳野市　吉村久仁雄

蓄音機越路吹雪を聴いている

吹田市　山本希久子

帽子目深に理不尽をやり過ごす

高槻市　松岡　篤

日に五便待つバス停も欠伸して

米子市　八木　千代
ははの樹を越える梢になりまする
豊中市　藤井　則彦
新人の出すアイディアに社も弾む
大阪市　平井美智子
イジメなどなかった頃のコッペパン
河内長野市　藤塚　克三
被災地に復興示す新たな芽
弘前市　福士　慕情
俺の背を越えろと父の檄が飛ぶ
橿原市　居谷真理子
もういいと思うこの世にまた未練
東大阪市　北村　賢子
大国に寄り添っている小判鮫
奈良市　長谷川崇明
4月には満開ですわいらっしゃい
大阪市　柴本ばっは
さあ朝日へ伸びをしましょう目覚めたよ
明石市　糀谷　和郎
茜雲やんま飛ばした日は遙か
八王子市　川名　洋子
反対の手をこっそりとあげている
大阪市　江島谷勝弘
年輪はわたしの歳とほぼ同じ
尾道市　大本　和子
備長炭旨い焼鳥へいおまち
香芝市　大内　朝子
残された根っこ新たな命生む
篠山市　酒井　真由
捨て去った筈の未練がひょっこりと
貝塚市　石田ひろ子
毛皮の帽子被り気分はバーグマン
奈良市　山本　昌代
次世代の光になると手を挙げる
松江市　石橋　芳山
中心はもっと右だと言ったのに
倉吉市　山中　康子
いつまでも続く三人同い年
富田林市　中井　アキ
婆ちゃんが好きと魔法をかけられる
唐津市　仁部　四郎
汝天われの成長見逃すな
米子市　池田　美穂
すでにもう大器の顔をしている子
佐賀県　真島久美子
珍しく父から柔らかい意見
弘前市　髙瀬　霜石
ベルリンの壁を思い出そう諸君
防府市　坂本　加代
腰かけて地球の未来考える
泉大津市　磯野不二夫
眼の手術夢もはっきり見えました
大阪市　笠嶋　恵美
ゆっくりと休みにおいで母の愛
鳥取市　谷口回春子
やっと来た俺の出番と三代目
枚方市　小林　わこ
夢の中しかと聖火を持っている
青森県　松山　芳生
香ばしく風が生れて樹と遊ぶ
鳥取市　山下　凱柳
私一人目立ってしまいごめんよね
大洲市　花岡　順子
大仏の指だと思う悟りの芽
豊中市　水野　黒兎
僥倖を十四歳に教えられ
和歌山市　武本　碧
埋み火がくすぶっている火消し壺
枚方市　海老池　洋
ひこばえといのちの話する詩人
唐津市　坂本　蜂朗
人間の暴挙自然が怒り出す
和歌山市　北原　昭枝
知らぬ間に愛が芽生えた青リンゴ
鳥取市　斉尾くにこ
斬られても斬られても来てくれる春
和歌山市　上田　紀子
ここからが勝負力を蓄える
江南市　脇田　雅美
晴天に今日もしあわせ日向ぼこ
神戸市　冨永　恭子
何度でもチャレンジできる生きてこそ

3月号発表
(2月15日締切)

(平本　勝彦　画)
柳筥に2句

本社 一月句会

◇一月九日（火）午後一時
アウィーナ大阪

宵戎の九日、新年句会は百四十二名（内投句者四名）の参加で開催、過日亡くなられた同人両川洋々さん（鳥取市）藤井正雄さん（茨木市）のお二人への黙祷で始まった。初出席は大浦初音さん（箕面市）。句会に先立ち、初歩教室年間賞の横山里子さん、奥園敏昭さん、中島一彌さん、月間賞永久保持者の山田葉子さんが表彰され、本社句会皆出席の40名が主幹の色紙のお祝いを受けた。

今月のお話は小島蘭幸主幹。題は「NHKひるまえ川柳」。3年間31回の放送でとりあげた同人の句は87句に及び、心に残る秀句を多数紹介していただいた。その中から

婚活の環状線を抜けて春　藤井　智史
夫の朝布団の中で聞いている　工藤千代子
私の膝で昼前川柳犬も聞く　政岡日枝子
（眞澄）

月間賞は柴本ばっはさん（大阪市）

（司会―真理子・隆彦）（脇取―まつお・奏子）
（受付―舞夢・正彦）（懸垂幕墨書―耕治）
（清記―憲彦・勝弘）

席題「ばっかり」　籠島　恵子　選

川柳塔句会べっぴんばっかりだ　新家　完司
酒酒酒酒ばっかりの三箇日　鈴木いさお
また秋刀魚かそんな時代がありました　前　たもつ
働いてばかりたまには呑みなはれ　川端　六点
失った記憶は空へばかり浮く　藤田　雪菜
奥ゆかしい人ばっかりの初句会　鴨谷瑠美子
酒ばっかり飲まんとオカズ食べなはれ　森松まつお
星野さん強気ばっかりありがとう　前田　紀雄
きらきらの未来ばかりの二十歳　美馬りゆうこ
男の沽券ホラばっかりを吹いている　荻野　浩子
講演会寝てばっかりですみません　川端　一歩
抜け殻の軽さばかりが手に残る　梅崎　流青
悪いことばかりが当たる僕の勘　升成　好
一強が右へばっかり舵を取る　内藤　憲彦
三つほど若いばかりと荷物持ち　山本　昌代
正月から吠えてばっかり年男　山本　進
口ばっかり達者なハズが舌をかむ　大久保眞澄
それらしい顔です苦情処理係　居谷真理子
山盛りの油料理が胃にもたれ　金川　宣子
二枚舌嘘ばっかりで世を渡る　山野　寿之
皆勤賞ばかり溜まっている夫　三宅　保州
苦労しますあなたに惚れたばっかりに　石田ひろ子
恐妻家妻が妻がと言い過ぎる　油谷　克己
ええかげん相撲ばかりでうんざりや　江島谷勝弘
余所見ばっかり手には風さえ残らない　原田すみ子
人生は曲線ばかりゆっくりと　酒井　紀華
これぱっかりはどうにもならぬ空模様　山本希久子
気がつくと君ばっかりを追っている　能勢　利子
アンタばっかりと言われるほどはモテない　片山かずお
家内から川柳バカと言われてる　細川　花門
走馬灯去り行くものは風ばかり　海老池　洋
転けました上ばっかりを見てました　冨永　恭子
そんな事ばかりしてたらこうなるで　川上　大輪
足音を消したばっかりほっとかれ　山本　昌代
今年こそ遊んでばかりいられない　立蔵　信子
歩きスマホ孤独の群れが闊歩する　笹倉　良一
楽させると口ばっかりで五十年　磯島福貴子
北風に負けてばっかりいられない　立蔵　信子

佳

うろたえてばかりで時が流れたね　山田　葉子
不平ばっかり言うから福が逃げてゆく　山田　葉子
手の方が留守口ばっかりで動かない　油谷　克己
はいはいと口ばっかりで描いた餅　関　よしみ
沖縄ばっかりが辛い目に合わされる　森　廣子

人

ノーベル賞遊んでばかりいたあの子　田中　章子

地

自分史にリセットしたい恥ばかり　柿花　和夫

天

ばっかりでなかった例外もあった　山岡冨美子

軸

分かりましたと言って下さるのにあなた

兼題「和風」　山野　寿之　選

御神酒注ぐ和服の妻に惚れ直す　上垣キヨミ
華添える和服姿の砂被り　内田志津子
お転婆を貴婦人にする裾捌き　笹倉　良一
ニーハオと舞妓姿が行く京都　大久保眞澄
古民家の歴史を語る刀疵　澤井　敏治
マンションに一坪だけの畳の間　森　廣子
マンションの和室は老いの指定席　金川　宣子
洋服で暮らし着物にあこがれる　松尾美智代
和服着た途端に内股で歩く　藤井　則彦
添え書きの賀状へ電話したくなり　矢倉　五月
三陸のコタツ列車の旅の暖　中島　一彌
和も洋も熟す日本の食文化　初代　正彦
干支聞いてすぐに敬語に改める　岸田　万彩
庭下駄をその気にさせた松の雪　梅崎　流青
襟足の白さで勝負するおんな　三宅　保州
日本だなあ赤ちょうちんに割烹着　松岡　篤
信じる気ないがやっぱり引くみくじ　矢倉　五月
一目惚れソース顔より醤油顔　荻野　浩子
寿司は手で蕎麦は啜って江戸の粋　島田　誠一
何年ぶり蘭草の匂い畳替え　柴本ばっは
張り替えた障子に襖ある暮らし　小山　紀乃
レンタルの和服が歩く京の町　鴨谷瑠美子
琴の音流れ和の膳箸を割る　山本希久子
先斗町路地の奥から下駄の音　細川　花門
懐石の湯気を揺らした鹿おどし　梅崎　流青

故郷の空き家はどれも純和風　山下　純子
味噌汁に鮭我が家の朝はまだ昭和　小川賀世子
成人式やまとなでしこ闊歩する　渡辺　富子
原点に戻ろう温かいお味噌汁　栃尾　奏子
胴長に短足和風には自信　山岡冨美子
懐石の器自慢の腕がなる　松原　寿子
路地の店粋な女将の割烹着　萩原　狸月
故郷を持たぬ男のとろろ汁　山崎　武彦
青い瞳の嫁が和風に馴染まない　鈴木いさお
故里は墨絵の中の祭り笛　木本　朱夏
日本の棚田育てた四季の風　酒井　紀華
殊更に和風のきわみ宮大工　大内　朝子
佳

心の窓覗けば気付く和の文化　今井万紗子
元日はお屠蘇お節にみそ雑煮　鈴木いさお
類のない憲法持っている和風　澤井　敏治
ねんねこの背中で聴いた児の鼓動　横山　里子
たしなみを覗かせている身八つ口　三宅　保州
人

静寂の庭鳴り響く鹿威し　井澤　壽峰
地

天空から戦はダメと奴凧　中里はこべ
天

簔糸ぬき振袖が春へ舞う　松原　寿子
軸

本格のお節へ老母の割烹着

兼題「たっぷり」　鈴木いさお　選

たっぷりと脂肪を溜めた三が日　村上　氷筆
褒め言葉たっぷり塩が効いている　太田扶美代
飢餓の子にたっぷり食べてもらいたい　三宅　保州
たっぷりの墨で平和と書く祈り　山本加お里
倦怠期たっぷり効かす練り芥子　石田ひろ子
マンネリの背にたっぷりと塩コショウ　藤田　雪菜
とんでもない量をつめこんでいるスマホ　居谷真理子
くたくたのおでんが続く三日間　冨永　恭子
時間たっぷりとってその事話します　鴨谷瑠美子
終章にたっぷりとってある余白　川端　六点
嫌な奴たっぷりワサビ入れたった　太田としお
漂白剤たっぷり消したい過去があるのです　中岡千代美
福袋無駄をたっぷり詰め込んで　川上　大輪
墨継ぎをたっぷりとして第二章　升成　好
春の旅へたっぷりとっておく時間　立蔵　信子
なみなみと注いでくれますあのお店　江島谷勝弘
ねむり薬がたっぷり入っているピアノ　鴨谷瑠美子
スパイスがたっぷり効いた小言聞く　村上　玄也
たっぷりと生きたぞという顔である　谷口　義
へそくりをたんまり貯めてから離婚　木藤こみつ
不美人もたっぷり浸かる美人の湯　藤田　雪菜
ちょっぴりにたっぷり収入と支出　山岡冨美子
いい嘘をたっぷり言えた披露宴　酒井　紀華
残り時間たっぷりあると思ってる　前　たもつ

たっぷりと愛情こめて薄味に　藤原　大子
たっぷりと夢背負い込んだランドセル　井澤　壽峰
受け升へたっぷりこぼす初春の酒　安土　理恵
糊代をたっぷりとってとんでます　荻野　浩子
広辞苑に知恵を授かる語彙の数　笹倉　良一
三日間でたっぷり稼ぐえべっさん　山本　進
おごらされたっぷりのろけ聞かされる　鈴木　栄子
たっぷりの自信がたまにへまをする　太田扶美代
たっぷりと生きて恥じない皺の数　西出　楓楽
枯れちゃった水をたっぷりあげたのに　川上　大輪
里帰りたっぷり愚痴も聞いてやる　長高　俊雄
プラマイのマイがたっぷり遺産分け　清水久美子

佳

目刺しにもたっぷりとある海の味　初代　正彦
思い違いしているたっぷりのアンコ　籠島　恵子
すり減った夢へたっぷり赤を塗る　渡辺　富子
鏡の僕が愚痴をたっぷり聞いてくれ　吉村久仁雄
初売りの鯛焼き尻尾までも餡　米澤　俶子

人

六十年飲んだけれどもまだ飲める　新家　完司

地

難民がたっぷり食えるのはいつだ　川端　一歩

天

夕焼け小焼けまだたっぷりと人を恋う　美馬りゆうこ

軸

大匙三杯砂糖を入れた僕のモカ

兼題「子ども」　山岡富美子　選

腕白もおきゃんも消えた過疎の村　両澤行兵衛
子の世話にならぬと言ったのは昨日　榎本日の出
ラブシーンじっと見つめる子が怖い　米田　恭昌
スマホの子かたや飢える子いる地球　澤井　敏治
痛いとこ突いてくるのは子どもです　立蔵　信子
公園で声を掛けると逃げる子ら　三宅　保州
百過ぎて百年前の子に戻る　水野　黒兎
風の子をテレビゲームがかっさらう　藤井　宏造
じじばばは風の子　孫はスマホ族　清水久美子
幼稚園あの子はきっとアスリート　川上　大輪
大借金子どものリスク言わぬ国　前　たもつ
夢いずこスマホの海を泳ぐ子よ　渡辺　富子
童歌大人ごころで深く詠む　山根　妙子
子は親のコピー丸ごと似ています　山本加お里
三歳の子に本心を見透かされ　藤田　雪菜
手を出して子供っぽいと無視される　坂　裕之
幼な児のなんでなんでが栄養素　石田ひろ子
七歳のメル友喜寿の道照らす　山本希久子
家族絵におさまりきらぬ子がひとり　山田　葉子
子に遺す地図から消した甘い道　海老池　洋
公園に子等の歓声いい町だ　萩原　狸月
踏み台になろうこどもがジャンプする　川端　六点
廃校の校歌昭和の子に戻す　北野　哲男
幼くて札よりコインうれしがる　村上　氷筆
赤チンが勲章だった昭和の子　山崎　武彦
夢食べているから子等の瞳がきれい　伊達　郁夫
ウニいくらトロが好きだと言う子ども　居谷真理子
賢い子何処か何だか憎らしい　森　廣子
用あればメールにしてと言う娘　大坪　一徳
子孫曽孫だんだん期待でかくなる　吉岡　修
遊ぶ子は炒り豆のよう弾けてる　山口弘委智
子の出来が良くて田舎の家が絶え　島田　誠一
おばちゃんお子様ランチ食べてはる　柴本ばっは
孫と折る紙風船の温かさ　藤田　雪菜
子供だぞ頼って来いやお母ちゃん　萩原　狸月
孟母三遷子供はかなりプレッシャー　原田すみ子
父になる父の轍を踏みしめて　木本　朱夏

佳

十歳の私に及ばない私　居谷真理子
お嬢さんこころの化粧まだですね　内藤　憲彦
先入観持たぬ子供が開けるドア　原田すみ子
おだやかに育ってくれてありがとう　上田ひとみ
野望でもいい大志を抱け子よ吠えよ　澤井　敏治

人

赤ちゃんは神のお使いだと思う　木藤こみつ

地

子どもらの誰のためでもない笑顔　中島　一彌

天

どこの子もうちの子未来託す子だ　安土　理恵

軸

鮮やかにスマホを繰っている幼児

兼題「笑う」　古今堂燕子　選

笑顔消えたそれが取柄であったのに　磯島福貴子
下手なギャグ少し笑ってあげました　森松まつお
赤ちゃんの笑顔は空気清浄機　山岡冨美子
身を削り最後に笑う者は誰　長髙　俊雄
笑ってはおれぬチャックが閉まらない　川端　六点
ウフフと咲いてゲラゲラ散っていく　居谷真理子
五臓六腑に笑い袋を一つづつ　宮崎シマ子
笑えない川柳ばかりできて鬱　岸田　万彩
僕を殺した君の笑顔が憎らしい　鴨谷瑠美子
流石真打落しどころはドット来る　両澤行兵衛
お迎えの舟は笑って乗り込もう　新家　完司
物忘れ突っ支い棒になる笑い　石田ひろ子
笑うから警戒心を解けば詐欺　萩原　狸月
笑っちゃう死ぬの生きるの過去のこと　酒井　紀華
笑っているのに泣かないでと言われ　山岡冨美子
ころころ笑うこころ美人に惚れて今　澤井　敏治
笑ってはないよ元もとこんな顔　川上　大輪
大げさに笑って脳の錆をとる　内藤　憲彦
ワッハッハ腹もハモってグーと鳴く　澤井　敏治
マニキュアににっこり老母はディに行く　能勢　利子
お年玉あくびのように笑み連鎖　宇都満知子
帰りしなえべっさんでも行けへんか　江島谷勝弘
ひふみんが笑う歯の無い口開けて　鈴木いさお
爆笑のあとは平和だなと思う　藤田　雪菜
笑えない日常茶飯ヘリ落ちる　前田　紀雄

愛想笑いでほっとかれてるプロポーズ　鶴田　遠野
作り笑いせぬシャンシャンにアイラブユー　清水久美子
打ち始めへ囲碁も将棋もよく笑う　美馬りゆうこ
怒らんと笑いなはれと恵比須さん　飛永ふりこ
生産者笑顔も貼って出荷する　中島　一彌
微笑めばほほ笑み返る乳母車　山崎　武彦
震度1ナマズが笑う池の底　中島　一彌
監視カメラに盗まれていた笑い　木本　朱夏
笑う日の来ると信じている我慢　大内　朝子
女系三代笑い声にも華がある　原田すみ子
微笑み返し胸のつかえが霧散する　島田　誠一
ライバルの含み笑いに湧くファイト　藤井　則彦

佳

皆笑う親父はちょっとだけ笑う　大坪　一德
繁昌亭笑えば春はもう間近　水野　黒兎
笑い合うことは万国共通語　三宅　保州
ここで笑うと別れ話が嘘になる　鴨谷瑠美子
よく笑う妻よへソクリ溜まったな　新家　完司

人

コロコロと笑う十五の水蜜桃　細川　花門

地

うつむいてニヤリと聞いているお世辞　森松まつお

天

通訳を介して笑う間の悪さ　村上　玄也

軸

なれそめを話して父のてれ笑い

兼題「トップ」　新家　完司　選

日川協のトップばんざい塔主幹　丹後屋　肇
思いようトップ賞より皆勤賞　太田扶美代
天の天取ったよろこびまだ知らん　細川　花門
月間賞ただの一度もいただけぬ　江島谷勝弘
初詣がトップニュースという平和　澤井　敏治
清々しい朝だI CANのトップ記事　田中ゆみ子
トップ記事バンダに名前つく平和　酒井　紀華
わたくしは載ったことないトップ記事　平松かすみ
明るくて謙虚羽生さんすごいなあ　冨永　恭子
トップ棋士だったひふみんゆるキャラに　小野　雅美
トップランナー風除けにしてチャンス待つ　能勢　利子
初対面掃除していたのがトップ　山田　葉子
箒持つのはやめてください社長さん　山田　耕治
トップだけ倒産の危機わかってる　中川ひろ介
私の名前ご存知ない社長　三宅　保州
謝罪会見振り付けどおりする社長　大坪　一德
あのビルの一番上に住んでます　久保田千代
飯よりも商売よりもタイガース　内藤　憲彦
トップモード奇抜ですねとしか言えぬ　片山かずお
トップは良いな奇麗な秘書を連れている　中岡千代美
悪い順ならばいつでもトップです　村上　玄也
新人にITならっているトップ　桝本　宏子
観覧車のトップでチュッと軽いキス　村上　氷筆
寝不足がずっと続いているトップ　籠島　恵子
いつからかトップの趣味が僕の趣味　酒井　健二

東大より上がありますハーバード　太田としお
国民はガリガリ　トップ太鼓腹　山田　耕治
裸になると凄いんです　トップ　小島　蘭幸
勉強はびりだがもてたのはトップ　松岡　篤
核ボタンちらちらさせているトップ　平松かすみ
トップにはトップの苦悩金がいる　油谷　克己
妻からのトップダウンに畏まる　藤井　則彦
チャンス到来青青だトップギア　小川賀世子
町会長例年通りあみだクジ　森松まつお
年齢だけトップになってうろたえる　山田　葉子
横綱の横綱らしい足の裏　居谷真理子
飴と鞭トップは多分鞭ばかり　川上　大輪
天辺の孤独を恐れ落ちる柿　梅崎　流青

佳

トップ目ざしギックリ腰になりました　渡辺　富子
年重ね気になるトップやまいだれ　山口弘委智
断トツの人気は母の茶碗蒸し　中里はこべ
クッションが効きすぎているトップの座　谷口　義
七草粥かならず食べているトップ　立蔵　信子

人

スタートラインみんなトップの顔をして　升成　好

地

トップまで昇ると下に雲かかる　大坪　一徳

天

メタセコイア天突きそうだ尖って　柴本ばっは

軸

我が家では天皇　外へ出るとゴミ

句会燦燦

十二月句会を読む　弘津　秋の子

百合子ちゃんと手を結んでから地獄　井丸　昌紀
結び目のねじれを文春がねらう　山岡富美子
素顔のままで理事長になりました　小島　蘭幸

十二月句会は水野黒兎さんの「時代と川柳」のお話からスタート。この三句は「今」を詠んでいる。その今が時代の句に繋がってゆく。百合子ちゃんは東京都知事の小池百合子。文春は週刊誌。理事長は社団法人全日本川柳協会。時が過ぎれば説明がいるかもしれない。それでも残る句は残る。「理事長」の句に私は凄味を感じる。

逸品の好きな貧乏人である　山本　進

逸品を持つ人は目利きの貧乏人であってほしい。貧乏人という言葉を久しぶりに味わう。爽快である。

土偶から学ぶ原始の女神論　栃尾　奏子

平成二十九年は京都博物館の国宝展が大人気であった。私は岡田美術館で縄文時代の晩期の土偶を見た時からの土偶ファンであるが「原始の女神」の言葉にハッとする。短い太い足で大地にズシンと立っていたのは日本の女神であったのだ。

ふと見ると一升瓶が痩せている　宮崎シマ子
汚れても気の済むまでの泥遊び　小谷　小雪
祝開通頑固な腸が笑い出す　安福　和夫
ライバルからお祝い負けたなと思う　鈴木　栄子

四句にVサインを送りたい。笑顔をご馳走様です。

金輪際素顔は見せぬ花の芯　中村　恵
素顔でもわたし見つけてくれますか　山田　葉子

鋼と柔の二句。「金輪際」の漢字の強さ。「みつけてくれますか」平仮名の柔らかさ。しかし、よくよく読んでいけば花の芯の涙、素顔の中の決意が見えてくる。捕まる句である。

川柳塔WEB句会　兼題「　仲　」　＊平抜きと佳作は到着順

12月例会入選句　投句数317句(160名)　真島久子　森山盛桜　共選

真島久子　選

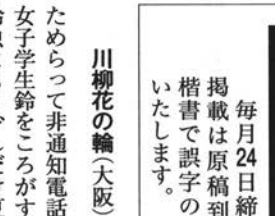
仲裁の出来るＡＩ欲しくなる	大木　雅彦
仲たがい横目で犬が吠えている	ガクちゃん
タラップを降りる時だけ手をつなぎ	竹中　正幸
恋仲になれそうな風吹き抜ける	麦　　乃
誘っているつもり靡いているつもり	武本　　碧
仲直りされたら困る少女像	谷口　修平
仲間には医者も僧侶も入れてある	沢田　正司
雨降ればデートをやめるそんな仲	山本　　進
仲良しになった　弱みを見せてから	西山　竹里
仲人も絶滅危惧のたぐいかな	山川　　守
ツーカーの仲で無口な二人です	青砥たかこ
仲裁をかってでたのは薔薇の花	米山明日歌
この指に止まってくれるはずなのに	大内せつ子
うどんでも食べて行こうと言える仲	こ　み　ち
したたかな癌も仲間に入れて老い	た　ま　き
笑い声仲間はずれで聞いている	平尾　定昭
芋づるの一つに僕がいる仲間	平尾　定昭
因数に分解できぬ夫婦仲	白鳥　象堂
木枯らしと赤いベンチの話し合い	柴田比呂志
輪郭にすれば一筆書きの仲	加藤　当白
挨拶をせぬゴキブリと仲違い	新家　完司
カップ麺取り持っている夫婦仲	フーマー
病院でしか出会わない元上司	桔　梗　庵
友達の友達に見る同じ色	大塚　久子
お互いに傷があるから言える仲	船岡　五郎
ハリネズミどうし仲良く保つ距離	澁谷さくら
天麩羅と西瓜が吠える自己主張	藤井　智史
仲直りしたのか声がやわらかい	光畑　勝弘
信じあう仲で続いてゆく介護	城崎　れい
貰禄がまあまあまあと割って入り	アズスン安須
青空は仲間といつも半分こ	永見　心咲
酒を飲む仲間がひとり逝きました	丹下　凱夫
佳　毒饅頭食べて大人の仲間入り	あ　そ　か
佳　仲直りしたくてケンカ売っている	ま　さ　じ
佳　仲間割れしそうでしない柚子胡椒	安藤　なみ
佳　蜜月の仲です　以上現場から	加藤　当白
佳　雪虫ふわり心通じる仲となる	山本　昌乃
人　目が笑った指でマルしたそんな仲	吉岡　　修
地　まだ仲が良かったころに来た手紙	橋倉久美子
天　ネクタイを取ると同色だと分かる	海賊　芳山

森山　盛桜　選

安泰のために仲良くする保身	颯　　来
清濁を呑み合い同じ色になる	藤澤　霧堂
タラップを降りる時だけ手をつなぎ	竹中　正幸
夕暮れがしんみり沁みる仲になり	の　ひ　ろ
友がいる励まし役と叱り役	かきくけ子
恋仲になれそうな風吹き抜ける	麦　　乃
誘っているつもり靡いているつもり	武本　　碧
仲間には医者も僧侶も入れてある	沢田　正司
雨降ればデートをやめるそんな仲	山本　　進
仲間内でもなさそうな相撲界	茨木　昭夫
嘘つきに仲間外れという仕置き	右田　俊郎
まだ仲が良かったころに来た手紙	橋倉久美子
ネクタイを取ると同色だと分かる	海賊　芳山
明るすぎて仲間外れにされた星	ま　さ　と
ふざけ合う仲間が遠くなってゆく	十　六　夜
芋づるの一つに僕がいる仲間	平尾　定昭
因数に分解できぬ夫婦仲	白鳥　象堂
納豆のネバネバ仲間割れ笑う	うちだあつこ
仲良しが知恵出し合って耐える冬	葱　坊　主
蜜月の仲です　以上現場から	加藤　当白
挨拶をせぬゴキブリと仲違い	新家　完司
恋仲にオーバーヒートするスマホ	高杉　究作
友多く蟻も蜥蜴も仲間うち	岸井ふさゑ
仲間だと言われその気にさせられる	佐々木弘子
利己主義という厄介な同居人	笹倉　良一
居酒屋の仲間深くは知らぬまま	片山かずお
価値観がもつれて不仲説が出る	若　　芽
あっさりで飽きぬ茶漬けのような仲	孝　　代
キミとならおとなの酔いを楽しめる	美馬りゅうこ
二人きりアールグレイと気取る仲	青砥　和子
自画像と仲良く肩を組む明日	颯　　爽
仲のいい振りをしているおでん鍋	丹下　凱夫
佳　政界の仲間いつでもすりガラス	荘子　　隆
佳　毒饅頭食べて大人の仲間入り	あ　そ　か
佳　笑いだすところが同じそんな仲	青砥たかこ
佳　仲裁をかってでたのは薔薇の花	米山明日歌
佳　この指に止まってくれるはずなのに	大内せつ子
人　病院でしか出会わない元上司	桔　梗　庵
地　仲間ではないな敬語が多すぎる	笹倉　良一
天　仲裁をどすんと父のしゃれこうべ	岩根　彰子

投句方法　【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net/html/index02.html　（サイト管理　森山文切）



毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳花の輪（大阪）　岡本　薫報

ためらって非通知電話取りそこね　克　茂
女子学生鈴をころがす賑やかさ　昭　好
鈴虫よもう少しだけ夏でいて　あや乃
大雨にためらっている予定表　泰　子
ためらわず九人きざむ殺人鬼　勇太朗
首に鈴つけられたのは私かも　薫　風
話し合う機会ためらい去った友　やすの
ためらわず我道すすむ若き棋士　敬　子
社会の窓開いているよと言いにくい　みちる
核ボタンためらいもなく押しそうだ　笑　子
ためらいが一線を越す分岐点　亜　成
筋道がきれいに通る鈴の音　正太郎
鈴つけるその役誰が引き受ける　美　穂
一票でこの国守る気で入れる　美智子
人の作見ると縮こむ言葉出ず　美　草
目を病んで不自由な事身にしみる　瑞　枝
婆ちゃんの帯にそっくりラウス昆布　紀の治
過ちをするから人間愛おしい　あやこ
盃にバッタが止まる子の逮夜　令位子
気のせいかブログに嘘の気配する　ゆたか
赤トンボ墓石一匹暮れせまる　治　代
秋の空いわしさば雲見飽きない　ひろこ
誕生日元気で迎え手を合わす　雨　奇
妻話す相手はメダカぼくじゃない　日枝子
簡単な料理だったが亡母の味　宏　之
迷惑をかけないウソも種尽きる　美佐子
栗のイガ剥がす物にも進化論　恵　子
太陽も雲に隠れて泣く事も　多美子
まだ生きる生きてやるぞと欲が出る　千　代
散歩道芒が待っていてくれる　久芽代

川柳塔打吹（鳥取）　野口　節子報

ギシギシと空家の窓をゆする風　悦　子
ギシギシときしみだしたよ築三十　節　子
ギシギシと錆びてしまった脳のギヤ　大　鯰
冬ざれにギシギシ野心研ぎすます　紀美恵
ギシギシの噂話に溺れそう　滋
ギシギシは習い始めのバイオリン　美知江
カードギシギシ財布の中で喘いでる　芳　光
歯ぎしりが聞こえるようなスラム街　くにこ
一年の早さと無為な日の遅さ　美ッ千
遅くても八十路の坂は登りきる　たけ代
けちけちでこぼれる程の財をなし　久　江
戦って器からこぼれる私　玲　坊
小判鮫おこぼれ頂戴して生きる　義　人
渋滞は我慢し過ぎてこぼしそう　照　彦
毀すには金が足りない青シート　完　司
ぼんやりと今日という日を取りこぼす　石花菜
一滴も零してならぬ戦の血　妻　子
日本など眼中にない北の国　清
地球儀で世界旅行は十五分　公　恵
地球儀を回して心遊ばせる　美美子
地図をみて行きたいとこの机上論　野　蒜
物干しで消えてなくなる宝島　貴　恵
木の木目世界地図でも見るようだ　龍　枝
すぐそこと書かれた地図に家が無い　三津子
親の書く地図になかった子の広場　みち子
北朝鮮が地図のまん中に居る　重　忠
地図にない俺が歩いた茨道　泰　山
こみ入った地図でローマにたどり着き　紀の治
番地だけ残して白い地図になる　芳　生

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

口こみで流行る過疎からシェフの味　則　彦
プロポーズしぶしぶ受けて孫ふたり　風来坊
干柿の千から千の冬の声　劦
巻き戻し出来ないボクの半生記　美　鈴
若人の声がひとつになる部活　重　虎
呑めないのに二次会のため出す会費　慕　情
昭和史の汚点巻き戻しはしない　隆　樹
ファッション誌男爵いもと眺めてる

大声で叱るかあちゃんもう居ない　一呑
日本食世界を股に大ブーム　洋子
さざなみの声を聴いてる失意の日　黙人
断われず入った保険助けられ　初枝
大声で辻褄が合う老い二人　柳子
昭和の歌口ついて出るしまい風呂　英子
師走の声ひと雨ごとに増してくる　冬道
負けた日の尻尾早目に巻き上げる　ひとし
ぐるぐると私あなたに巻かれたい　小とみ
あの頃はこれが流行というモンペ　のぶよし
隣人と声かけあって生きてます　龍馬
若かったわたしもはいたミニスカート　京子
敗戦ショックりんごの歌で立ち直り　呑舟
木枯らしの渦に巻かれている枯葉　きよし
どちらかがしぶしぶ貝になる平和　吹喜
ロールケーキに負けぬ私は痩せるのだ　規子
たおやかな亡母の思い出紅葉狩り　花匠
一日が長い気がする休肝日　ふさゑ
一日の終りを告げる酒二合　花峯
人情の裏もおもても知る涙　氏加子
生きてれば新害虫に新型菌　井蛙
フェロモンと放射能との相異点　一花
わたくしはここにいますという旋毛　霜石
駆けだした少年フェルメールの青　和香子
煩悩の根っこが疼く今宵かな　夕香

川柳塔すみよし（大阪）　森松まつお報

老い一人オーシャンビューの初日の出　ひろ介
地図を眺めて想像をする楽しさだ　かりん
失恋し心身癒やすためパリ　舞夢
七つの海越えた経験おばあちゃん　ばっは
海外は戦争してる国もある　美世子
パスポートなしでミサイル飛んで来た　宏造
英語わからず海外旅行あじけない　シマ子
海外と言っても違う点はない　公平
パリでストベルサイユ宮見られない　廣子
ネットから地球の裏もすぐわかり　直子
マスメディア活躍目立つ帰国子女　隆昭
絶好調今日はビールが甘すぎる　勝弘
余裕など無いのに何時も奢ります　舞蹴
朝取りの唐黍濡れて籠に満つ　重信
たいくつな会議の前に濃いコーヒー　(矢)五月
太刀筋を軽く見切って身を躱す　克己
辛酸をなめて余裕のある器　朝子
振り幅を広げ楽しみます余生　美籠
努力した背には自信という余裕　大子
ヒートテック送る故郷雪予報　ゆみ子
真ん中で采配できる母がいる　志津子
食べて寝て貴方と笑い合う暮らし　崩
我が財布いつも万札どっさりと　福貴子
もうかりまっかぼちぼちでんなとは余裕　保州
背かれても母は信じることやめぬ　一歩
背かれてよっしゃ馬力で伸し上がる　ふりこ
子が背く越えねばならぬ成長期　満作
父親に背き息子に背かれる　いさお
天災の恐さ自然に背く罪　大輔

佳句地十選　（1月号から）

平井美智子　選

頂点を目指すアスリートの孤独　無限
ラヴレターがわりに焼き芋を渡す　霜石
新米がキラキラ今日もありがとう　史子
まだ温いうちに夕陽を折り畳む　かこ
母の煙まっすぐ父に逢いに行く　理恵
オハヨウと言えばそこから朝になる　ひとみ
泣き終えた女のなんと強いこと　奏子
私という器でわたくしを生きる　森子
級長の選挙で飴が配られる　六点
夕焼け小焼けちゃらちゃら今日を引き摺って　芳山

寺川弘一　選

アルバムの甘酸っぱさを嗅いでいる　知香
満月がしんなりもたれかかる帰路　(裲)則彦
生きるコツ時々歩く向き変える　陽子
しみじみと秋です柿を剥いてます　一志
オハヨウと言えばそこから朝になる　ひとみ
ポケットに今年のゴミがかなりある　(永)美佐子
褒めもせずけなしもしない菊は菊　(冨)恭子
転んだら転んだ場所で生きて行く　涼子
散歩道月はだまってついて来る　(山)美穂
運命線折れて曲がってまだ達者　あさ子

私に背くと痛い目にあわす　まつお
あきらめず口説き続けていたならば　昌紀
もしかして今が一番幸せだ　芳香
文春にもしつかまればスクープだ　日の出
もしかして好きやったんや悪口は　里子
用も無くもしかを尋ね合う電話　妙子

はびきの市民川柳会（大阪）中川ひろ介報

待ってたよ母の言葉が身を包む　久仁子
懐かしい焚き火に入れた芋の味　ちづる
白けてく空気感じぬ手前味噌　大子
格子戸に情緒を醸す京の宿　壽峰
達筆の人への返信のびのびに　みつこ
追求をされて言い訳する苦手　一文
忖度は苦手ガチンコ勝負する　いさお
神無月恋の気配はお留守です　真
芸術の秋に感性とぎすます　ひろ介
風雪の時を刻んだセピア色　朋子
デイトの日今日の感じは勝負服　フジ
廃屋の霊気感じる背のあたり　シルク
人間を重ね盃重ね合う　欣之
ついて行く下戸しぶしぶの三次会　髙鷲
お疲れとほっこり置いて孫帰る　章司
小包が田舎の秋を感じさせ　洋一
悪友と呼べるうれしい奴がいる　まつお
路地の花昭和の香り漂わせ　久仁雄
本当の友は自然に握手する　清
故郷に元気貰える友がいる　喜久子
恒例のバーゲン友と憂さ晴らし　登志子
庭にくる雀も野良もみんな友　ヨシ枝
ちゃん付けの友達今も続いてる　さくら
お友達になっておきたいお医者様　泰子
紅葉狩り大阪城に彬の碑　かつ美
書くことで喜怒哀楽をまきちらす　千鶴子
むらさきの雨粒溜めし式部の実　美喜
平成の終りも少し近付いて　雄太

竹原川柳会（広島）　古田　太虚報

筆先へ思いを込めて書く句集　栄香
百枚書けば百枚の字筆を知る　千代美
反核をしっかり署名して帰る　慶子
一行へ母幸せのなぐり書き　鬼焼
愚痴ばかり書く便りです老いて今　規代
母の書くやさしい文字が僕を抱く　寛
書いて消す人生だったなとぽつり　笑子
芸術に百点は無し色彩を付け　一徳
好きな色やはり赤だよカープだよ　宣之
ぶつかって曲げて生まれた自分色　輝恵
いいことがありそうカラーの夢を見る　昭紀
春夏秋冬わたしの色にする書斎　蘭幸
ぶらんこに乗ったら風の色見えた　比呂子
なつかしい昭和レコード宝もの　汎美
古箪笥母はすこぶる元気です　幸子
菩提寺に四百年を知る大樹　節生
古地図手にタイムスリップ歴史旅　淑子
古民家のカフェ床柱ピッカピカ　弘子
時効にはできぬ昭和のシミひとつ　敬子
古漬けは長い我慢の味がする　京子
炊き立ての新米食べるありがたさ　歩美
ホッとした日もある古い写真繰る　貞子
小春日へあの日のコスモスが揺れる　厚子
ひょっこりと友は笑顔をのぞかせる　栄恵
三歳の戦いごっこに付き合えぬ　史子

城北川柳会（大阪）　近藤　正報

これはしたり余命預金が釣り合わぬ　直樹
迂闊にも好きな素振りを見せた罪　あさ子
夢希望まるごとを抱く新暦　朝子
腕ふるう飽きない母の祭寿司　杁香
三連休気象の視聴率アップ　肇
トイレでは相田みつをと対峙する　勝弘
笑みひとつ使い切るまで生きてやる　野鶴
謹慎が解けてぽつぽつ虫が出る　俊雄
フォアグラもトリュフも飽きたなんちゃって　榮子
アッポーペンほんに楽しい新機軸　堅坊
迂闊さの集合体の開戦日　和夫
酔っ払い隣の扉を叩いてる　高志
飽きるほど人喰ってきた顔してる　修
自分の肩そっと抱きたい時がある　たもつ
家計簿を暦がわりに良い内助　寛昭
花暦四季の移りを投げかける　縣笹
喪のハガキ心を風が吹き抜ける　志華子
猫の手も借りずにすます冬支度　洋志
澄んだ秋少し汚して秋刀魚焼く　郁夫

老い進みぼつぼつ増えるやまいだれ　弘委智
別嬪は三日で飽きるいい妻だ　克己
大晦日舞台華やぐ歌暦　満作
埋もれ火を掻き立て作る五七五　捷二
歳の瀬の街で自分を見失う　満洲夫
二人してボツボツ坂を下りましょう　千恵子
深呼吸また歯車が回りだす　賢子
大晦日のキスは二年にも及ぶ　一歩
飽きっぽい二人が何故か続いてる　武彦
あの世にもぼつぼつなじみ多くなり　実
母の思い出尽きずことこと豆を煮る　星雨
九条を守りゆったり幸福度　正

川柳塔なら　大久保眞澄報

八十年生きて私は何のこす　理恵
海凪いで忘れ上手に生きる術　よう子
嫌われ者百歳までは生きてやる　優
よく生きたあの極貧を懐かしむ　賛郎
退院日明日からゆるり舞う余生　百合子
生きていく為に煌めく趣味を追う　美智子
堂堂と生きると四股を踏んでいる　甚之市
生きて死ぬドラマいとしく今朝のお茶　成子
生きるって不思議苦楽の縄をなう　萌子
友の訃報来て人生を省みる　文聡
うつし世のさまざま実に愛らしい　完次
生きる意味もう考えていられない　眞澄
定年後正規雇用で妻の部下　紀雄
兄弟が力合わせるたのもしさ　圭子
呼び捨てにされて縮まる愛の距離　良一
汗浸みたタスキ繋いで美酒を酌む　貫一
協力は諭吉に限り受け付ける　盛隆
英知集め青い地球を守りたい　富子
頑張るぞおけらだってと口ずさむ　のぶよ
バタバタと生き夢をバクバクそれもよし　万紗子
バタバタとしないで生きるマイペース　すみれ
バタバタが師走の風に八つ当たり　國治
積み上げた結果できっと花の芽が　ふりこ
一年の有り様問うて散る落ち葉　将文
バタバタと男転がし貢がせる　雅美
四捨五入結果私は消えました　崇明
結局は父の轍を辿ってる　恭昌
結果しか見ない厳しさ血が凍る　和夫
ひとつずつ鎖はずして生きてゆく　恵美子
生きるのもいいな真っ赤に冬を咲く　辰雄
大空に羽ばたくまでは夢がある　倫

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

陶芸へ行ってくるよと昼のメモ　實
城跡の濠に浮かんだ花筏　高明
浅学で非才でフェイクニュース好き　四郎
絶交の友にも老いの波しぶき　蜂朗

川柳わかあゆ（島根）　松本はるみ報

また夏よ思い出します終戦日　好栄
夏の海水平線に深呼吸　ハル子
手ぶらとて来ればうれしい親心　かつ子
正座して墨の匂いに書く一字　恵美子
下手な字で下手な文章それがいい　昌
同病の友と文通六年目　安子
人老いて夏日なつかし浮袋　はるみ

京都塔の会　山田　葉子報

大鳥居くぐり紅葉のファンファーレ　千枝子
晩秋の色が目に染む松尾さん　忠子
賽銭のおかげで呼名出来ました　益子
突き放しそっと見守る捨て育ち　哲子
しっかりし過ぎゆとりの欲しい躾糸　公子
しっかりと灯し続ける命の火　美智代
古寺の鐘打てば紅葉が舞い落ちる　肇
北風が我が物顔で秋を抜く　弥生
どん底で笑い袋を空にする　昭
失投に流れを変えたホームラン　五月
赤い血の流れるあったかい言葉　朝子
安易には流れたくない老いの意地　求芽
行く雲や流れる水を友とする　英旺
無香料で人の邪魔せず生きてます　文代
最後かも母と二人の檜風呂　美津子
松茸売場香りに足を止めただけ　葉子
雲流れ松尾の空は澄み渡る　篤子
流れ出る言葉の裏に潜む罠　ふりこ
お流れを受けてヘロヘロ宮仕え　満子
ふわりふわふわ雲に習った流れ方　かずお
衆目の檜舞台へ立つお方　正彦
貴女誰しっかりしてたあの人が　みよし

手のなかに君の心音しかときく　紀華
残り香に四苦八苦する午前様　則彦
うなぎ屋に開店前の炭香る　弘子
ただいまにカレーの香りがお出迎え　弘之
松尾の絵馬毎年賀状に使う友　宏子
昨日今日明日も続く今の時　元一
病葉の紅葉我が身の明日想う　千代
曲水の庭にひととき浸る幸　光久
しっかりと叱るしっかりと褒める　扶美代
湯上りの流れる櫛に目が揺れる　保子
幸せの実こぼれぬようにしかと抱く　万紗子

南大阪川柳会　松岡　篤報

腹八分守っているが酒は駄目　忠昭
つつましい食事血糖値は正常　克己
収入は年金だけでつつましい　勝弘
間違いを辿ればすべてわが不徳　峰子
片道の切符で辿る浄土まで　あさ子
山坂を辿る試練の八合目　柳伸
ゆったりと辿っています老の坂　あや子
糸電話辿れば淡い恋の頃　秀子
アリの後辿ると娘つまみ食い　昌紀
へとへとで辿り着いても富士は富士　益子
原因を辿れば金に突き当たる　栄子
あつい映画手を握ったのは貴方　シマ子
裕ちゃんになり切ったままシネマ出る　いさお
甘い洋画大人の恋を知りました　ばっは
二十四の瞳に会いに小豆島　国和

岸恵子老いも若きもまちこ巻き　更紗
ラブシーン最後列も負けてない　東風
痛ましい記録映画に飢餓の子ら　志華子
身の丈は年取るほどに縮みだす　歌留多
パパ老けてママ若返り翔んでいる　恭昌
憎しみも距離の二乗に反比例　修
年金に反比例した物価高　ルイ子
日米の貿易収支反比例　和雄
テストゼロ気分はずしりランドセル　弘委智
諭吉さん増えれば減った妻の愚痴　博実
年令と反比例する友の数　なぎさ
点滴のポツリ命を考える　直子
一芸に磨きをかける年の暮れ　篤
いつでもの言葉に甘え借りたまま　一歩
十二月平次を読んで締めくくる　弘子
転職を重ね身につくど根性　たもつ
日本の国丸洗いしてみませんか　楓楽
わざと主語抜いて会話を丸くする　郁夫
誤解まだ解けぬか燗がぬる過ぎる　

川柳塔わかやま吟社　小谷　小雪報

ピリオドは私が打つと決めている　知香
生きている限り終わりに出来ぬこと　克子
帳尻を合わす歩幅を変えながら　大輪
私の歩幅で音符躍らせる　冨美子
あるがまま自分の歩幅踏み締める　ほのか
ともに生きた歩幅がきみを覚えている　あきこ
着実な亀の歩幅を信じよう　紀久子

過去形で語るとすべて懐かしい　保州
過ぎた日があったからこそ明日が来る　まさみ
哀しみをやり過ごしては白寿まで　徑子
過ぎ去ればみな美しき絵空事　紀子
あの親切今も温もり胸の中　秀子
しゃべり過ぎ独りぼっちにふと気付く　小雪
温厚な眼差ししかし頑固です　ちづこ
無口だがしかし魅力があふれてる　寿子
辛い筈しかし母さん笑ってる　京子
納税の前にひと言物申す　日出男
夢なのに起きたら濡れていた枕　なる子

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

銀杏の葉小判のように降ってくる　一眸
たまの都会ちがう空気もいい刺激　亜矢
椿おつそっと指折る待ち時間　和郎
見た目とは違う器が温かい　章子
窓際を飾り幸せ招き入れ　千恵子
シナリオを変えればならぬ外は雨　葵
リュウマチを病んで重たい腕時計　和之
秋深し妄想するに丁度よい　華蓮
旗揚げて行き着く先が決まらない　真帆
忘却が時には助け船となり　和代
真っ白に包帯を干す秋日和　陽子
言い渡す言葉は一つ有り難う　安子
物申す世渡り下手と言われても　美恵子
嫁と娘の温度差見抜く風になり　菜美
どの窓を覗けば先が見えますか　游子

命をかけて歩く旅路に悔いはなし　公弘

川柳塔おっぱこ吟社（香川）川﨑ひかり報

気苦労を笑い飛ばして生き上手　初恵
まだ飛べる飛んでみたいと老の春　よしみ
座蒲団が四方飛び交う名勝負　弘
幸せに生きた証の笑いジワ　いさむ
夢見たか笑う曽孫の百面相　放任
夢叶う日まで助走をくり返す　ひかり

川柳茶ばしら（愛知）関本かつ子報

絵手紙の近況文に癒やされる　雅美
あの顔で旨いと聞いたオニオコゼ　まみ子
日本の空をミサイル飛んでいき　遡行
はしご酒鬼に手みやげ寿司の折り　三樹夫
感性のギャップ使わぬプレゼント　美千代
振り向けばあっという間の五十年　かつ子

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

まだまだとオアシスに水足してやる　美智子
傷乾く優しい風に吹かれてる　知恵子
お日様のにおいがしない乾燥機　紗季
お綺麗な人は気ままな方ばかり　芳山
輪にとけて気ままな話飛んで出る　ひふみ
気ままにはくしゃみもできぬ四人部屋　涼子
約束のない日の朝は爪のびる　孝子
追う影を消したひとつの水たまり　桂子
喜寿傘寿やっとの思い追いかける　ゆき
代代を追っかけてみて我を知る　あきら
パトカーの前には出ないようにする　弘充
酔い醒まし飲んで人間取り戻す　草庵
孝行息子安心させぬ老いさせぬ　みちを
安心にいつも寄り添っている不安　青帆
将来の日本どうなる不安だけ　俊子
防犯カメラ家のあちこち付けました　輝山
安心というお薬を買っておく　ひすい
現世はフリーサイズで平和買う　とも子
永遠にこころのサイズでかくする　柳歩
心の幅サイズ直しのリフォームに　哲子
特大のステーキ食べるうれしいよ　朋子
凸と凹ぴったり合って水入らず　徳利
秋が行きSサイズからLLへ　寿代

和歌山三幸川柳会　楠見　章子報

晴れやかな顔で遺影撮っておく　宏枝
青空が祝いを添える七五三　敏照
出不精の父へ肩押す晴れマーク　美枝子
疑いが晴れて二人の根を下ろす　富香
晴天へ心の翼広げたい　あき子
晴れたなら探しにいこう青い鳥　碧
夢がある何時も心に晴れマーク　次根
削除キー押したら晴れてきた明日　和子
追いかける夢があるから生きられる　美羽
俳諧の異端を駆けた山頭火　義雄
ダダダっと走って気がつけば独り　知香
ジーパンの穴から秋が駆け抜ける　幹子
思い切り駆けよう僕を信じよう　ダン吉
ガラスの天馬星空を駆ける夢　俶子
順調に追いかけて来た老いの風　起世子
月末の財布の中はカードだけ　まき
カード一枚届けた事で生む縁　みね
極楽の切符欲しさに数珠を繰る　昇寛
青白い切り札持っている強み　愿
切り札を温め過ぎて期限切れ　千鶴
免許返納少し寂しい靴の音　当代
諭吉さん好きでカードは持たぬ主義　章子
台風が心配事を連れてくる　絹子
台風一過詫びてるような月の冴え　ひろ子
台風の進路いずこも人が住む　保州
くよくよも愉快に暮らすのも一期　菜摘
春と秋壊してしまう温暖化　一雄
死神が台風の目にのっている　宏夫
酎ハイで一病ずつの私語が出る　智三
まだ触れる人情がある旅半ば　昭枝
究極は憂さも晴らせず自己疎外　寛
ありのまま咲いて持て成すこぼれ萩　純子
只スマホだけでつながる寂しさよ　准一
臓器提供すこし迷ってからサイン　理恵
衣替え着信音も変えてみる　日出男

倉吉川柳会（鳥取）竹信　照彦報

ポケモンフィーバー砂丘に降って湧いた人　龍枝
悪評の噂を降らす相撲道　大鯰
北の船日本海に降って湧く　次男

ミサイルの雨が降りそな空模様　鬼　一
降る雪に備えて老いの冬支度　智恵子
あの世でも手袋編んでいる母よ　完　司
手袋のばら売りあれば重宝だ　雄　大
寒鮒釣り身も手袋も凍りつく　重　忠
手袋でおにぎり握る新時代　恭　子
手袋をはめての拍手届かない　祐　子
雪だるま寒さ凌ぎか軍手はめ　風　露
手袋をはずし心で握手する　紀美恵
あれほどに大泣きした子今朝けろり　由紀子
桃缶に急に元気になる仮病　野　蒜
忘れてもけろりと出来るのも特技　萩　江
友の名をけろり忘れてどなたさん　康　子
目の位置を変えてけろりと余生いく　日出子
朝飯をけろり忘れて飯まだか　酔芙蓉
散歩して朝晩日本海を飲む　石花菜
長生きはしたくないけど薬飲む　玲　子
声飲んでお産に耐えた昭和初期　美知江
病院の薬飲むのを止めてみる　けいこ
呑む時は総理大臣よりえらい　妻　子
親友の訃報にえっと息を飲む　茂　夫
生臭き命に一杯の真水　宣　子
効く薬効かぬ薬も飲んでいる　照　彦

富　柳　会（大阪）　関よしみ報

紫が好きになったの母ゆずり　伸　雄
あざやかな料紙に写す一行詩　文　重
一人でも独りではない友が居る　田鶴子
悪人も成仏できる和のこころ　隆　充
誕生日しぶしぶもらう年ひとつ　常　男
悪人を説いて親鸞阿弥陀様　朋　子
極道も心の中で母に泣く　清
夕暮の空朱に染めて秋深し　壽　峰
冬晴れの空に鮮やか奴凧　未　知
コーヒーが無言で恋の橋渡し　高　鷲
いい人になれそう人の和がしみる　あかり
人と人触れ合うやわらかな和音　か　こ
いつまでも愛が湿って乾かない　恵
偽りの愛とは知らず抱きしめる　寿　之
ノック出来る和みの扉一つ持つ　アキよしみ
諸諸を胡麻和えにして朝の膳　欣　之
天平の大仏っつぁんが大和加護　森　子
私の悪意を知ったのはわたし

ブラザ川柳（大阪）　梶原弘光報

苦労なく過すこの世のむずかしさ　久美子
連れ合いは三下り半を聞き流す　弘　光
罪でしょうか補正下着で盛るバスト　清　乃
人生も落語の様な落ちほしい　文　子
木戸銭と今もこだわる伝統芸　政　夫
若い衆裸まつりに血潮とぶ　五　月
寝てる人席を立つ人芸の道　一　彌
一二三が後継棋士をべたにほめ　修
おばちゃんの限界越えた若づくり　克　三
上見ればまだ若いかも背を伸ばす　正　子
若作りしたら鏡に笑われた　淳　司
水はじく娘の背中にただ見惚れ　和　代
独り暮らし笑いに飢えて寄席通い　悦　夫

川柳ささやま（兵庫）　北澤稠民報

早や師走年とる毎に早廻り　かほる
肩車した子が髭を置いている　哲　男
ともだちは男に限る昼の酒　稠　民
すくすくと大地を蹴って裸足の子　真　由
七十年猫背で過ごし今つけが　開　子
八十路入り少しは頼れど意地も見せ　幸　子
自然界四季折々のお洒落する　照　代
悩まないいつでも心に歌持って　美智子
朝がくる猫横にいる安堵する　善　輔
隙間風ときどき吹くが夫婦です　さゆ子

長　柳　会（大阪）　辻村ヒロ報

親友の心配りは母のよう　ヒ　ロ
悲嘆暮れ癒してくれる無二の友　洋　二
路地裏の昭和にあった温い風　福　子
ご無沙汰を詫びることなし弾む声　美　子
Lになり Mの服でも捨てられぬ　幸　子
捨てる気でやっぱり残す未練心　弘　美
七代目老舗を守る若旦那　たけし
母さんは丸い会話で包み込む　旅　人
日の丸を背負って走る九秒台　登美子
若い男と遊んできたと孫のこと　正　美
煽てられ若い若いと使われる　由　夏
杖の友もう頑張れと言えません　和　子

親友だから境界線を死守してる　ともこ
この出合い大事にしたい老いの坂　敬二
夢に酔いロマン忘れぬ八十路人　光弘
妻酔って月下美人となり候　正博
鯛よりもレアのビフテキまだ八十路　直樹
粗大ゴミと夫の背中に貼ってやる　淳司
寄席芸人陰で支える恋女房　孝代
座ぶとんの上で咲かせる笑い種　隆彦
噺家の扇子手ぬぐい七変化　孝
寄せ通い知ってほぐれた肩のこり　和代
若い芽を摘んだ戦争知らぬ世に　三和子

川柳塔さかい（大阪）　内藤　憲彦報

子供より親にてこずる教師達　八千代
いのししが校庭駆ける山事情　憲彦
力まない匠の技の鉋屑　みつ江
お産の力みこれが母への第一歩　（綾）清
限界と言う難敵を討つ気骨　誠一
もちつきのコツは力まず杵降ろす　康信
こんどこそと力むこぶしがかたくなり　かりん
力む子の尖った命抱きしめる　志津子
ガンバレとでっかい母のにぎり飯　淑子
山茶花の蕊に力みがまだのこる　唯教
芝居されコンタン見抜く心地よさ　富夫
見舞われて重病らしく芝居する　五月
お芝居である筈はない男泣き　愿
忖度も芝居も上手い秘書課長　（向）清
人前は芝居をしてた冷えた仲　玄也
反省が人よりうまい猿の芸　好
夫婦にも芝居心が肝心だ　廣子
体中で力む赤児の生きる覇気　ひろ子
出産に立ち合う主人力んでる　舞夢
力んでも力まなくても大晦日　みつこ
べっぴんの前では力む癖抜けず　和夫
核ミサイルいつまで力む北朝鮮　光雄
力んでるまるでお顔が鬼瓦　としお
どんと来いと言って財布が空になる　玲子
涙飲み我慢してます嫌なこと　ヨシ枝
名の知れた画伯の絵にはいい値段　瑠美子
なあなあが外部にもれて違憲です　世紀子
長き夜に賀状準備の戌を描く　妙子
長い深い崖だが緑いい景色　健吾
無いものは無い頑と家内が言い放つ　澄空
何もかも我慢してたら胃に悪い　さくら
難儀な男頑固なうえにいらちです　ゆみ子
何回も癌を切ったと威張る腹　敏治
長かった雁字搦めの糸を解く　雅美
泣くものか瓦礫の浜の石を蹴る　時雄

西宮北口川柳会（兵庫）　藤井　宏造報

二番手がぴったり追うてくる重さ　千賀子
ぴったりの言葉ひとつが見つからぬ　哲子
ぴったりはダメよ隙間が要るんです　堅坊
人見知りぴったりママにかくれんぼ　敦子
一年生ぴったりの服一寸待て　健彦
相性はぴったり夢をみています　わこ
後二十日私を責めるカレンダー　キヨミ
いつのまにかボクの誕生日が無い　勝弘
育ちざかり大きめの服を買っておく　光子
その笑顔あったかくなる眠くなる　ひとみ
しぶしぶと承知をしたが残る悔い　光久
哀しい過去忘却という救世主　紀華
美辞麗句追って忘れる句のこころ　弘子
忘れ傘のセールで買った傘忘れ　弘委智
ストレスを血圧計が覗きみる　千代
どの仮面つけて帰ろかプチ家出　宣子
大笑いしてこころ空っぽにする　野鶴
世は減塩しお鮭恋し冬の朝　じろう
幸せは話あいてが側にいる　章子
断捨離を手伝う息子ボイボイと　順子
邪魔な日もぴったりついて来る影よ　いわゑ
母親にぴったりの子が社を背負う　浩司
終活に息ぴったりと尉と姥　黒兎
苦手な人きっと向こうも苦手だろ　利子
なるほどだこの故郷なら詩が浮かぶ　りこ
ＤＮＡ子供見てればよく分かる　一徳
納得いかぬ顔して河豚が釣り上がる　宏造
納得はそこそこ妥協しておこう　能子
入社式横一線でよぉーいドン　盛夫
同窓会打ちあけあった恋談義　正彦
同期会出席出来る有り難み　武臣
車椅子妻に押されて同期会　美津子
スタートはまず黙祷の同期会　武彦
同期会未来語らず過去ばかり　邦男

ジャンカラで同期の桜唄う父　野　薫

岩美川柳会（鳥取）　山下　節子報

九十年生きた証の写真帳　重　忠
遅くまで寝ていて走るくせがつく　清　信
忖度がやたら出て来て壁になる　一　平
フラッシュを浴びて涙の拉致家族　一　粋
先走りしては孤独の海にいる　一　瑤
レントゲン写真骨には自信ある　天　翔
良い嫁だ孫の写メールよく呉れる　茶　子
満点に家路へ急ぐランドセル　公　子
因習の壁まだまだ厚く残る里　美恵子
はずかしい喉の奥まで写される　蟹　郎
節一つ壁当たる度太くなる　たぬ
晩秋は写真に生きる鮮やかに　菖　子
走っても亡夫掴めぬ夢の中　敏　子
補聴器を買ってほしいと壁も言う　振　作
密談の全てを聞いた壁怯む　真理子
白壁に会うと落書きしたくなる　彰　夫
も一人の私が壁になっている　雅　女
一線の壁は自分の中にある　幸　安
セピア写真化石の恋が浮いて来る　千　代
走ったら間に合ったのに走れない　節　子

ふうもん吟社（鳥取）　両川　無限報

天命にも少し余白ありそうだ　(故)洋々
チャンスさえあれば私も渡る虹　無　限
手探りで掴むとどしょうきゅっと鳴く　清　信
天命と諦めないでぼけ封じ　蟹　郎
本日のゲスト鬼です豆をまく　振　作
来年は増えるといいな笑いじわ　美津子
手探りで進む墓場の肝だめし　節　子
手探りの十指神経とがらせる　美恵子
手探りの駆け引きに湧く大相撲　一　平
真実に尾ヒレが付いて先歩き　楓　花
来年のゲストは福の神と決め　天　翔
手探りの過ぎた安保と基地が泣く　とも湖
招かざる客が居座る三時間　凱　柳
七億円当たる天命なら受ける　金　祥
天命を背負っています泣きボクロ　一　瑤
シラを切り通し忘れる日まで待つ　みゆき
手探りで極楽ゆきの径さぐる　一　酔
天命が眠るやる気に火を点けた　回春子
法要のゲストの母は額で笑み　幸　子
天命と思えば苦難越せる橋　八千代
本命の課長左遷で俺浮かぶ　隆　浩
法事の日今日のゲストは先祖様　勲　章
手探りであなたの背なに好きと書く　善　平
手探りの先で光っている蛍　稲佐嶽
改憲へまだ手探りのリベラル派　賢　悟
天命と思うがすがる医者と神　茶　人
天命は近い断捨離急がねば　毅
手探りの暮らしに慣れた老い独り　昌　鼓
百までに断捨離すれば良しとする　紀美江
手探りの五七五で脳に喝　真理子
司会者がゲスト持ち上げ殿にする　薫
天命にもてあそばれている寿命　彰　夫
突然のゲスト楽屋はうろたえる　雅　女
天命と妻に尽くした要介護　重　忠

あかつき川柳会（大阪）　山本　昌代報

母が来る今年は足が痛そうだ　シマ子
衝動買い枝切りバサミ納戸行き　冬のト
羽生さんの七冠まさに金字塔　一　歩
督促状来ても払えぬ母子家庭　善　之
屋根贈る度量見せろよ少女像　太　郎
日本に来るなといえぬ難破船　(櫻)秀　夫
おもしろく生きるお迎え来る日まで　浩　子
新年が来ればまたもや増えるシワ　万　作
ミサイルへ土竜になって生き伸びる　敏　子
大元はぼかし枝葉をニュースショー　一　志
来年は戌年アイボ飼うつもり　久美子
線香花火アイラブユーと言うて消え　堅　坊
裸木の枝電飾が乗っ取った　紀　乃
地よ天よお相撲さんは人である　茶　助
薬のまされて国別メダル数　紅　絵
東京は雪エルサレム荒模様　義　泰
偶数の月でよかったクリスマス　和　雄
核兵器が抑止力だと言うドグマ　鈍　甲
核の傘核戦争へ紙一重　武
補助線を三本引いて生き延びる　栄　子
子育てに切りたい枝と伸ばす枝　のぶ久
土からは命をもらう夢貰う　信　二
地に耳を当てるマグマの呻き声　克　己

署名する平和な世界きっと来る　直子
脚線美ショートパンツで闊歩する　和
死線越え今は語り部希望添え　郁子
原点が枝葉にうもれ見失う　常男
枝分れして良かったと枝野さん　康信
この先に越えてはならぬ線がある　壽峰
元気かと里から句がやってくる　恵美子
初歩き地上へ靴のご挨拶　ひろ子
再来年新元号がやってくる　朝子
お正月あげる正月来てくれる　たもつ
めでたいな老老婚の知らせ来て　篤
魂は天に墓標と花は地に　哲男

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

すり減った指輪に刻む過ぎた日日　順子
気が和む花が一輪あるだけで　奈津子
一巡り乗って楽しむ環状線　正子
輪の中に入ると温い落葉焚き　黒兎
しがらみを切り後味のほろ苦さ　郁子
トントントン切る音今日も軽快だ　桂子
玉葱をきざんだからと嘘ひとつ　美佐子
手刀を切って一番風呂に入る　則彦
枝切られ仁王立ちする街路の樹　堅坊
肩の荷はおろした空も晴れている　久子
善行を誰にも知れず成し遂げる　孚彦
皇位継承日程決まる秋の空　柳童
希望の党元の都政に戻る知事　長一
マスクした彼女見逃し縁切られ　信男
誰だっけマスク外した歯医者さん　春代
目力美人マスクをしても見破られ　一弥
一面の落葉掃き寄せ中に立つ　守啓

川柳あまがさき（兵庫）大浦　初音報

俺じゃない妻が忖度流行らせた　修平
泥酔の妻の介抱にへろへろ　公子
乳液も何度も振れば三日もつ　たみえ
混迷に終止符を打つ青い空　千賀子
酒飲んでまさかの美女が抱けるとは　柳明
婚活を終活にする後妻業　英坊
戦いは終りにしよう青い空　初音
入所待ち亡くなる人を待てという　菊江
妻出かけ何故か心がうきうきと　富夫
熱いお茶入れて至福の良き人と　雪菜
どの場所に居てもドヤ顔胡蝶蘭　紀恵
大穴を鼻差で負けてしゃがみ込む　新緑
飲むために仕事しながら五時を待つ　かずお
寒気団が攻めても負けぬ肉襦袢　靖鬼
ステーキに飽いたか犬がソッポむく　まつお
介助ロボへろへろ歩く命の灯　紀華
妻であり時に母親時に医者　祐康
過ぎた日に置き忘れたか感受性　りこ
遺伝子の治療進んで死ねません　健二
終りまで続けてこその誇り顔　つな子
骨密度上げる私の肉料理　芳香
おはようと監視カメラに手をあげる　耕治
終の住処はコンビニ医者の傍がよい　ひろ介
豚まんを肉まんと言う文化の差　正和
ポケットに手擦れの句帳しのばせて　ヨシエ
苦労したと口には出さぬ髪の艶　美籠
一年を喋り通した雀の子　哲夫
おひさまも私の発芽まっている　ひとみ
旧友と飲む地酒に古里の花が咲き　純
へろへろは絶対見せぬ阿修羅像　宏造

岸和田川柳（大阪）石田ひろ子報

懇ろになってはならぬ人と酒　玲子
酒止めた途端に体狂い出す　大輔
法螺ばかり片耳で聞く酒の席　カズ子
酒飲んでやっと本音を喋り出す　忠太
気弱さを知っているのか酒が呼ぶ　洋二
やっとローン終えて夫婦で酌み交わす　隆昭
良き友と楽しく飲んで良きお酒　康信
酔いが醒めだんだん腹が立ってくる　ダン吉
長生きに頑張り不要自然よし　カズ子
頑張ってみたがはけないSサイズ　義泰
頑張ってないよお迎えこないだけ　みつ江
八十路坂頑張らなくて良いと医者　珠子
子供には見せぬ頑張る父の背　和美
昭和人ガンバルだけが取り柄なの　心
ガンバレにハイハイハイとお前もな　清
ビリなのに頑張ったねとほめる母　喜代志
ボウフラが頑張り目指すオニヤンマ　堅坊
おあいそで頑張れなんて言いません　律雄
鄙の駅まだ現役の跨線橋　六点

子や孫に軍靴履かせぬ大車輪　信二
漂着の木造船と言うけれど　三成
五寸釘のせいか夜な夜な痛む胸　英雄
ピリオドはふざけた奴だ後がない　ふさゑ
迷いつつ最後のコンマひげを剃る　昭
ピリオドを打てば明日は新しい　あかね
散る順序どちらが先か揉めている　香代
青春のピリオドあなたとの出合い　ひろ子

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

賄いがすこうし大儀になって来た　孔美子
ATM年金日だな混んでいる　大鯰
素敵な時が過ぎ出涸らしになった　盛桜
農業を継ぐ人とわぬ氏素性　弘子
若者も素敵に暮らす町であれ　すみれ
眉毛糸繋ぎ合わせてちゃんちゃんこ　和子
自家製で賄う母が頼もしい　実満
チークダンスしか出来ぬ男は駄目だ　照彦
夢に出た壇れい様とダンスする　好幸
婆ちゃんはダンスの日には腰が延び　文道
あどけない子供の笑顔素敵だね　草文
年金の枠で賄う慶弔費　重忠
跡継ぎを欲しいと思うも太郎　みさ子
縄のれん憂さを忘れて踊りだす　裕
表札はずっと変わらぬ跡を継ぐ　かおる
あちこちの霧笛に船は動けない　蟹郎
日本の大地を鎮めるダンスする　小鹿
タンゴ踏むよりもアナタの足を踏む　茶子
ちょい悪とチークダンスで若返る　満
継ぐ人の絶えた墓にも彼岸花　恒

川柳藤井寺（大阪）　鴨谷瑠美子報

瞬く間月日流れて早や師走　いさお
大噴火流れを止める再稼働　紀雄
生きる術流れにまかすままならず　絹子
平成も流れ流れて底見える　光男
ほっこりと空気の流れ変える人　フジ子
諍いを水に流して和睦する　彦弘
流言に惑うことなく妻信ず　典子
流されてどこへ向かうか笹の舟　雄太
梅の香が流れて春はすぐ其此に　美代子
汚染水どこへ流しているのです　一歩
抱擁を嫉妬している流れ星　一文
逆らわず時の流れに負かせ生き　シルク
柿八年年流れても帰れない　信二
鉋シュルシュル流れる汗も拭わずに　みつこ
奥さんが来るのは何時か待っている　真
奥ゆかしかった新婚三日ほど　まつお
いま死ねば妻が富豪になる保険　六点
富は無い贅肉だけは保ってる　喜代子
ポインセチアの赤を富みだとみるゆとり　瑠美子
神さんが居るはずやのに貧富の差　扶美代

八尾市民川柳会（大阪）　中薗　清報

左手と右手秤にかけてみる　惠
人からもらい人にも返す元気虫　両文
藁と土踏んで親父と建てた家　穏夫
天空へカンバス架けて描く夢　耀一
あんばいは心加減の味加減　朋子
白壁に残る匠の鏝の跡　壽峰
あんばいは砂糖と塩のど真ん中　森子
豪傑は活断層の上で寝る　常男
三角四角師走の風に迎合す　あかり
生きている証しになった今朝の水　欣之
橋架けて橋を落としている戦　寿之
山積みの懺悔隠して今日も酒　かこ
憧れは未知への美しいタクト

六甲川柳会（兵庫）　市坪　武臣報

不器用に生きて男を自慢する　博史
男には出来ない長い立ち話　武臣
男なら言いわけせずに忍一字　じろう
男です行方不明はロマンです　和郎
男ですよ言わねばホント分らない　弘
男の子女になって帰省する　日呂志
あこがれた君の誘いに夢うつつ　弘華
生前葬笑顔で誘う酒肴　敏夫
騙されてあげようかしら月が澄む　美穂
だまされる程の財産ない暮し　としお
信じてた彼に一杯食わされる　光久
通さねばならぬ霞ヶ関の嘘　洋次郎
正直になろうこんなに白い雪　ひとみ
だまされてコップの中にある慙愧　憲三
いい予感つるんとむけた茹で卵　道子

ジジババのふところ寂し奇数月　邦子
晴れた日に鐘打ち鳴らし終焉りたい　和宏
私より漢字はしっかり書ける老母　利子
信頼の日本品質どこ行った　盛夫
言い訳は上手くいったが心臥せ　芳江
言いわけに真実語り信を得る　正彦
喪中はがきもう言い訳は届かない　ほおずき
見え透いた言訳容れて場を収め　浩司
言い分けをしない子の目がぬれている　千賀子
時どきははぐれないように手を繋ぐ　武彦

翠洋会（大阪）　佐々木満作報

我が家のおせち愛を豪華に詰めました　蕉子
花嫁は豪華衣装で決意する　良子
居て自然だけど不在の気楽さよ　すみ子
楽焼にお薄一服立つ至福　志華子
若い二人苦楽を共に結ばれる　善之
楽ちんの椅子の上には俺の首　昭
アニメーション治虫の夢は無尽蔵　満作
歴史秘話アニメになって陽の目みる　希久子
孫と見るアニメ映画は寝られない　げんえい
何でもアニメになると思ったが　みつ子
アニメソングてきぱき進む大掃除　ふりこ
サンフラワーで豪華クルーズしてる夢　桃花
老人もアニメ人気の時代です　公平
御退位が決まり皇室ホッとされ　舞夢
虎狂が六甲おろしに見送られ　恭昌
ほっこりと心通わす冬至粥　理恵
生きる意味ふと考える散歩道　富子
酔うとすぐ昭和の唄を口ずさむ　弘子
餌もやらぬロボット犬に守りをされ　敬子
四国巡った友朱印帳棺に入れ　紀子
緊張が解けてぽろっと出た言葉　日の出
双眼鏡で主役を探す披露宴　眞澄
今日のうさすっととけゆく仕舞風呂　楓楽
溶け合って夫婦は同じ色になる　集一
わだかまり軽いジョークでとけてきた　捷也
一日がゆっくりとける年の暮　義

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

天国に行けば不用な鬼の面　かすみ
遣り場ない悲しみ月に吠える犬　亜成
戻らない天国いいのか我が亭主　信子
宝くじ買わねば億も手に入らぬ　銀杏
影のある男性よりもお人好し　尚世
悲しみの中に押し入る無理無体　高鷲
漆黒の宇宙に煌めく冬銀河　壽峰
凩に後押しされる縄のれん　清
古日記影を慕った青春譜　麗
悲しみをわくわくに変え母の機知　弘委智
義理と見栄包みなおしてのし袋　寿子
天国と地獄のはざま生きている　朝子
絶好のチャンスは過ぎてからわかる　弘一
よく来たとミカン剥き出す母の指　郁夫
若いっていいなチャンスは何処にでも　ルイ子
西日射す部屋に想い出だけ残し　茜
前かがみの影がしっかりせいと言う　鈍甲
悲しみをかくす笑顔が美しい　博泉
一瞬の迷いチャンスを不意にする　仁
チャンス掴む両手は今も空けてある　賢子
肩書に似合った顔になってくる　洋
しゃべらないからいざこざのない夫婦　薫
汚れちまった悲しみ中也の純情　恵子

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

懐の辞表に妻子抱いて出る　歌留多
帽子飛ばしボクの秘密を暴く風　公子
若い娘にニッコリされて舞い上がる　英旺
南北の新地張り合う舞扇　肇
お年玉やるから曾孫来ておくれ　求芽
寒い冬せめて懐ぬくくなれ　健三
舞姫も素顔になれば笑う女　武彦
銀盤に命あずけた赤い靴　シズヱ
獅子舞の鼻の穴まで春の風　真理子
華やかに舞妓の暮の事始め　健二
アスリート磨きに磨き頂上に　多美子
幸せに出来るとたしか言ったのに　美佐子
わたくしの素性ばれない様磨く　きらり
不確かな明日へ布石ひとつ打つ　野鶲
懐がダメダメダメと時価の寿司　堅坊
捜査中滅多なことはまだ言えぬ　久子
懐に飛び込み明日の風を読む　満子
トラブルを時が誇張も美化もする　見清
絵本から優しさ貰う寂しい日　千鶴子

ばあちゃんが公民館で舞っている　耕治
腹に聞く確かな鼓動ああ命　黒兎
懐の深さへ人が寄って来る　美智代
木の葉舞うように気ままな我が余生　則彦
賀状にて一年ぶりの答え待つ　(岩)玲子
リセットし歩幅も変える四コマ目　正彦
生き抜いた百戦錬磨いぶし銀　ヨシエ
懐の温い男の横にいる　雅美
悲しけりゃ悲しいように舞扇　千代
心音はたしかと医師の目が笑う　美籠
ジョーク一つ淋しい人を笑わせる　(永)玲子

川柳さんだ（兵庫）　**田中　章子報**

ニコニコと笑顔でいようきっと福　つな子
福耳の孫が希望の星となり　加代子
鬼は外福も連れ立ち出てしもた　義徳
来年もグッドラックで行きたいな　勝弘
絵が好きで裸漫遊した清　順子
あなたには私丸ごとぶつけます　ひとみ
電車内赤子に乳やる母が居た　雄太郎
地味な物ばかり持ってる戦中派　千津子
持ち前の腰の低さで輪が和む　美籠
ミサイルを持つとミサイル飛んで来る　博
銃を持つその手に聖書抱く刹那　武彦
前向いて笑顔ひとつを持ち歩く　ヨシエ
断捨離にもったいないを切り捨てる　宣子
頭髪がテーマで急に黙り込む　修平
女子会は別名魔女の会らしい　花門
セクハラがテーマになって噴火する　堅坊
サザエさん休日終るテーマ曲　利子
お題目もらい噺家玉の汗　厚子
飄々と生きるテーマは風まかせ　哲男
USJ日本人も入れます　徹
柔軟な思考あっての発明家　好文
やんわりと言われじわじわ効いてくる　耕治
柔らかな君に苦労は似合わない　優子
やわらかな言葉の裏に潜む棘　宏造
やわらかな笑顔で母は子を叱る　祐康
やわらかい物腰人が寄ってくる　光久
柔らかい赤子のグウにある未来　キヨミ
豆棋士に夢を与えて栄誉賞　俊昭
避けた道誰かがちゃんと通ってる　哲夫
晩酌を呑んで美味いで床につく　健二
納得がいくまで飲んで逝かはった　恭子
メーターも付けず払えと受信料　雅尚
進む世に座り込んでる慰安婦像　えい子
力作を夢みて励む老春譜　一子
平成の賀状出せるはあと二回　正和

大山滝句座（鳥取）　**新家　完司報**

逢いたさを重ねて雨は降り続く　(平)美智子
分水嶺辺りに湧いてくる利権　心咲
脱線があって男に味が出る　一郎
天気予報ところによりはいただけぬ　正明
はっきりと拒んだあとに湧く未練　俊子
辻褄が合って疑惑が湧いてくる　明美
意思薄れ家路が遠い千鳥足　光男
去る女を追う気にさせて雲の湧く　豪一
出雲時間で集まる腰のないうどん　芳山
どどどっと達成感と疲労感　くにこ
タバコ止めた意思酒止めぬ意思　照彦
意思だけじゃ恋も老化も止まらない　楓花
せっかちといい加減さが同居する　幸子
わが意思で動いたアリとキリギリス　大鯰
落葉集めてジャズかタンゴか風の街　美ッ千
湧水に傷口洗い知らんぷり　雄大
ポケモンゴー砂丘風紋泣いている　けいこ
楽しい事いっぱい湧いて来るように　風露
ロボットが自分の意思で将棋指す　由紀子
湧いて出る訳じゃないんだ親の金　みちを
強風は枯葉集める収集車　富隆
老人をめがけて寒波雪つぶて　麦青
雪の湧く夜は獣と温め合う　厚子
ほっとくとどんどんでかくなる狼煙　熊四郎
アイコンで意思の疎通ができる彼　七七
一世紀生きると年賀状に書く　石花菜
雑魚ばかり集めて雑魚を抜け出せず　正人
意思強い石は河原を転がらぬ　野蒜
企みは深く静かに湧いてくる　規雄
天高く私もまるまる老い太り　コスモス
批判より革命語れ指導者よ　道唱
子がいても継ぐ意志のない梨農家　久子
うちの妻朝の帰宅に低気圧　清明
「これ出来る」意志は有るけどままならず　鈴野
生ゴミの隙間から湧く詐欺師たち　完司

柳界展望

★「第38回桜井市民川柳大会」は、10月15日桜井市まほろばセンター開催。同人成績。

ライオンズクラブ賞
渡辺　富子
危機一髪ブレーキかけてくれた神

教育長賞
池　森子
わたくしと言う器で私を生きる

議長賞
安土　理恵
流されて流れ八十路の深い息

★「兵庫県川柳祭 in 豊岡」は、11月30日豊岡市民プラザで開催。同人成績の続報。

特　選
冨永　恭子
負けたなと思う私を許すきみ

特　選
多田　雅尚
飽食の時代が残す負の遺産

特　選
田中　章子
豪快な蟹の食べ方見て好きに

特　選
上田ひとみ
美しい朝だ私も起動する

▽**動　向**△
○川柳塔すみよし（大阪）昨年11月より、新会長に古今堂蕉子さんが就任。
○城北川柳会（大阪）1月より、新会長に江島谷勝弘氏が就任。
○川柳藤井寺（大阪）1月より、新会長に鴨谷瑠美子さんが就任。

▽**新誌友紹介**△
鳥取市　**副井　裕**
紹介者　森山　盛桜
鳥取市　**大角　幸代**
紹介者　森山　盛桜
門真市　**坂本　星雨**
紹介者　大内　朝子
日向市　**黒木　栄子**

常任理事会＝1月9日㈫①第24回川柳塔まつりの課題と選者講師の集約②誌友拡大への具体策③定例確認事項等。

次回常任理事会＝2月7日㈬AM10時～

ご芳志

高野山基金に
匿名氏から百万円
拝受致しました

新同人紹介

森田旅人（もりたたびと）
―岳人・直樹・冨美子・淳司推薦

朝日なにわ柳壇　今年の十秀

―29年12月23日　朝日新聞発表―（太字は本社同人）

川柳塔社相談役　**西出楓楽選**

最優秀句
誇るもの今となってはシワの数　梶原弘光

秀句
招待したい核持つ国を広島へ　平賀国和
月の宿にいつか泊まれる日がきっと　立石雉枝子
怒鳴るより任せる勇気試される　田村順一
別世界しばし漂う本の中　岡田憲一
あれとそれだけの夫婦の二進法　澤井敏治
アラハン迄ロコモフレイル寄せつけぬ　磯島福貴子
占い師心の隙間うまく突き　杉村正俊
マンガ読む机でないと母の喝　藤井正雄
幸せは時間に飢えておりますの　松本あや子

番傘川柳本社主幹　**田中新一選**

最優秀句
幸せを掴む切符だおかげ様　鈴木栄子

秀句
泣くだけ泣けば新天地まで突っ走る　吉村久仁雄
笑い声渇く心に efficacy する　岡部幹和
友の輪が僕を豊かにしてくれる　藤井満洲夫
張り裂ける気持ち静める長電話　足立ミツエ
さらさらと残り時間が落ちてゆく　神田良子
重い荷も笑えば軽くなる不思議　樋野昭信
さりげなく一歩後ろでささえられ　木村シズ
のたうって山のあなたの空めざす　六村晃一
ひょっとこをかぶり痛みに耐えている　井本健治

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳あまがさき	13日(火) 14時締切 継ぐ・蓋・甘い・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造 TEL 06-6494-5187
岸和田川柳会	17日(土) 14時締切 秘密・映える・そろそろ・サポート	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2－13－19　中岡香代
川柳塔みちのく	17日(土) 17時締切 広い・釘・秘密・進路	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　TEL 0172-36-8605
川柳ねやがわ	18日(日) 13時締切 強気・高級・裁く・サービス 自由吟	寝屋川市　産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
川柳藤井寺	18日(日) 14時締切 腕・呑気・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303 鈴木いさお
豊中もくせい川柳会	19日(月) 13時50分締切 打算・踏む・いきなり・自由吟	豊中市立中央公民館　3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川柳さんだ	20日(火) 13時30分締切 味・枯れる・グループ・胸騒ぎ 自由吟	キッピーモール（JR三田駅前） 〒669-1545 三田市狭間が丘5－10－19　谷　祐康
川柳たちばな	21日(水) 13時45分締切 席題・あっさり・動く・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)TEL 06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造 TEL 06-6494-5187
和歌山三幸川柳会	24日(土) 13時15分締切 針・トップ・覗く	和歌山商工会議所　4階　第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川柳塔すみよし	25日(日) 14時15分締切 沈黙・ギャグ・さする	住吉区民ホール 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
はびきの市民川柳会	25日(日) 14時締切 衣・来客・シンフォニー	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳ふうもん吟社	25日(日) 13時30分開場 自由吟・帳尻・ヨレヨレ・怪文書	開発ビル　2F 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
南大阪川柳会	26日(月) 18時30分締切 大げさ・さぐる・図星・雑詠	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都塔の会	26日(月) 14時締切 ベース・爪・むさぼる・席題	京都ハートピア　地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勧修寺堂田70－16 桝本宏子　TEL 075-591-0424

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

２月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	1日(木) 14時締切 逃・しばらく・忍耐	奈良県文化会館 近鉄奈良駅　東①番出口東へ徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787　松本方　安土理恵
城北 川柳会	3日(土) 10時50分締切 開く・ヒント・眩しい・自由吟	老人福祉センター　3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川柳 とんだばやし 富柳会	3日(土) 14時締切 長・守る・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4－1－10 池　森子　TEL・FAX 0721-25-0603
倉吉 川柳会	3日(土) 14時締切 ぼちぼち・稀有・仕舞う 席題一題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔 まつえ 吟社	3日(土) 13時30分締切 ぬるい・熱心・運ぶ・福	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－1　相見柳歩
あかつき 川柳会	9日(金) 14時締切 重い・鏡・祝儀・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第１ビル２F） 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2－312　前田紀雄
川柳大阪	10日(土) 14時締切 足音・怖い・人気	地下鉄・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6　山崎珠生
六甲 川柳会	10日(土) 14時締切 学ぶ・影・あっさり・自由吟	六甲道勤労市民センター　5F　E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
川柳塔 打吹	10日(土) 13時30分締切 岩・探す・チャンス・席題一題	倉吉市上灘町９　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
八尾市民 川柳会	11日(日) 14時締切 不埒・あっさり・嬉し・雑詠	八尾市渋川町・安中町集会所 JR「八尾」駅から徒歩５分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
西宮北口 川柳会	12日(月) 14時締切 隣・ぶつける・さすが・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
川柳塔 わかやま 吟社	12日(月) 14時10分締切 兼　題＝大切・小雨・抜 課題吟＝釘・螺子	和歌山ビッグ愛　〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
ほたる 川柳 同好会	13日(火) 13時30分締切 紙・走る・どっしり	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル　5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔 さかい	13日(火) 14時締切 とっさ・秘密・折り句：アキタ	東洋ビルディング　4F 堺東駅北西改札口から２分 〒599-8103 堺市東区菩提町5－171　矢倉五月

編集後記

★椿咲く有為の奥山紅椿　薫風

★平成30年戌年。干支の中に猫が居ないのを常々不満に思っているのだが…遥かな昔から猫は人類と共に在った。ギリシャのアトス半島にギリシャ正教の聖山アトスがある。20の修道院に2000人の修道士が暮らしている。「女性はマリア様だけである」という教義から女人禁制、家畜もすべてオスという徹底ぶり。ただし猫だけは別。猫はネズミを退治するためメスの存在は許されている。

★新潮社刊行『孤高の祈り』（中西裕人／写真・文）は原始キリスト教の修道士の祈りの日々を取材した写真集。千年以上も俗世と隔絶した地で守り引き継がれてゆく祈りの生活。世界遺産に登録されながら、今なお女人禁制の宗教自治国が初めて写真集になった。先ごろ読み終えた篝木蓬生著『守教』も隠れキリシタンの通史であった。両書を通じて語られる「信仰」とはなんであるのか。考えさせられる。

★一昨年の12月3日、仙台駅前のイベントで鉄魚を貰い和歌山へ連れ帰った。メダカのような2匹にせんちゃん、だいちゃんと名付けた。6センチくらいまで育ったが昨年の7月6日、水替えの時だいちゃんが飛び跳ねて落下、数時間後にいけなくなってしまった。かなり落ち込んでいたがその後コメット種や出目金を入れ、賑やかな水槽になった。

★天然記念物の鉄魚のせんちゃんは鉄真と名を改めて元気に泳いでいる。個人は天然記念物を飼えないが、この子は天然記念物に指定される前からの種なので、違法ではないと宮城鉄魚倶楽部のお墨付き。気まぐれな猫もいいけど、金魚には癒される。クウ、チャッピー、デメタン、キロロ、ミイ、サラ、すべて金魚の名前。

（朱夏）

□「川柳塔」誌の目次欄にある同人の「座右の句」はS45年4月から始まり、昨年のH29年4月までの47年間に、1085句が掲載されました。そのうちのベスト・ナインの句を紹介します。

1位79名。俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　路郎

2位36名。人恋し人煩わし波の音　栞

3位29名。寝転べば畳一帖ふさぐのみ　路郎

4位27名。古くとも僕には仁義礼智信　路郎

5位25名。飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ　葭乃

6位21名。遠き人を北斗の勺で掬わんか　薫風

7位20名。恋人の膝は檸檬のまるさかな　薫風

8位13位。人の世や嗚呼にはじまる広辞苑　薫風

9位8名。浮き草は浮き草なりに花が咲き　生々庵

10位は、同数が多く紙数の関係で割愛しました。

（勝弘）

ひとこと

雑魚の呟き

四十代に入った頃、生きてゆく指針をと関西カウンセリングの受講を決断した。創始者は大活躍されている古今堂蕉子さんの御義父・古今堂雪雄氏と後にわかり、ご縁を感じる。

その後いのちの電話のボランティアをさせて頂くことになった。電話を聴く基本「共感・受容・傾聴」の三本の柱を徹底的に教え込まれた。

句会で全没になると、しょぼんと力が抜けてしまう。句を見直すと絵空事、空想に終わっている。また修得の甘さも浮上。

ふっとボランティアで学んだ「共感」が、川柳での共感と相通じることに気付いた。共感を覚えてこそ作品が生きてくる。

雑魚なりの練磨を続けたい。

（飛永ふりこ）

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお願いいたします。

作品募集

4月号発表（2月15日締切）

川柳塔（8句） 小島蘭幸 選
水煙抄（8句） 川上大輪 選
愛染帖（2句） 新家完司 選
檸檬抄「浮く」（2句） 山口光久 斉尾くにこ 共選
インスピレーション・ナビ（2句） 大西泰世 選
一路集（2句） 「リセット」 宮尾みのり 選
「無　言」 石田隆彦 選
初歩教室 「囲　む」（3句） 居谷真理子 担当

本社2月句会

とき 2月7日㈬ 13時開場・13時40分締切
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ケ辻町19－12 電06・6772・1441
おはなし 「チンチン電車と川柳」 中原比呂志 氏
席題 「　　」 村上直樹 選
兼題 「勢　い」 田中章子 選
「のどか」 大久保眞澄 選
「イメージ」 柿花和夫 選
「傾　く」 藤村亜成 選
「自　由」 小島蘭幸 選
（各題2句以内）
会費 1000円　**投句料** 500円（切手可）

5月号
檸檬抄「魔　法」
一路集「なるほど」「　乱　」
初歩教室「自　信」

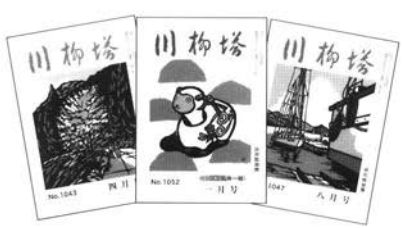
本社3月句会
7日（水） 午後1時から
兼題「よろしく」「隠　す」「ごろん」
「しびれる」「予　感」

川柳塔WEB句会のご案内

課　題「　白　」 くんじろう 居谷真理子 共選
締　切 2月20日　**発　表** 2月25日頃
投句料 無　料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

定価 八百円（送料83円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）
二〇一八年（平成三十年）二月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一－一四－一七 花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話（〇六）六七七九－三四九〇番
振替 〇〇九八〇－四－二九八四七九番

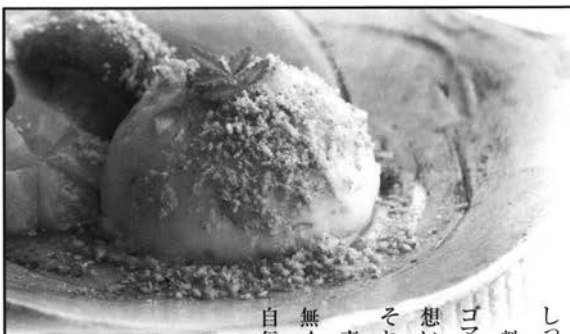
川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372－1178
FAX (06) 6372－1196
E-mail：bikenart@ea.mbn.or.jp

川柳塔のホームページアドレス　senryutou.net/html/index02.html

平成三十年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇八九号　川柳塔　二月号
定価　八百円（送料　八十三円）



オニザキの プレミアムロースト

つきごま

杵つき製法の「すりごま」

袋を開けた瞬間に広がる、香ばしい薫り。舌と記憶にしっかりと残る、深いコク。料理をより美味しくするゴマを作りたい、真っすぐな想いから生まれた逸品。それが「プレミアムロースト」。素材本来の良さを余すこと無く引き出した、オニザキの自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

雑誌 05703－2